
二年五組のコイビト

kanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二年五組のコイビト

【Nコード】

N4653U

【作者名】

kanon

【あらすじ】

未来は、進学校に通う二年生で、吹奏楽部の男子部員。トランペットが大好きで、まるで恋人のように大切にしていた。得意な科目は数学だけ、他には特に取り柄もなく、おまけに少々、体が弱い。そんな未来が、ある日の放課後の教室で、容姿端麗な英語教師、城戸に出会う。容姿だけでなく、優しい雰囲気女子に大人気の教師だ。今まで、特に関わったこともなかった彼だったが、その日、境に、少しずつ、未来の学校生活に登場するようになる。一方、親友に紹介された一つ下の沙耶とも、親しくなっていく。小柄で可愛

らしくて、未来は自然に、彼女に惹かれていくが……。

二つの出会い（前書き）

高校を舞台にした、恋愛小説です。現在高校生の人も、随分昔に高校生だった人も、きっと主人公のことがうらやましくなるはず。こんな高校生活、送りたい！って言ってもらえたらいいな。

二つの出会い

? 二つの出会い

何処からか、甘い花の香りが流れてきた。立ち止まって辺りを見回したが、それらしき花は見つからず、再び傘の柄を握り直す。季節が過ぎると忘れてしまうが、この香りに毎年、懐かしさのような胸騒ぎのような、不思議な感情が生まれるのは何故だろう。そんなことを思いながら、水たまりに映った灰色の空を飛び越えた。まだ梅雨には早いのに、ハッキリしない天気が続き、湿気を含んだ生温い風が、半袖になったばかりの腕にまとわりつく。時折足元から渦巻いては、細かい雨を霧吹きのように浴びせた。大した雨でもないのに、大袈裟なほど濡れて、こんなことなら自転車で来れば良かったと後悔した。坂の多い地形で、雨の日に限らず自転車を敬遠してしまうけれど、やはり歩くよりは楽だ。無意味な傘を畳んだ未来は、^{みき}見えているのに遠い高台の高校まで走った。

半開きの門を抜け、ようやく下駄箱に辿り着くと、未来は犬のように体についた水滴を振るった。上履きに替え、いくらか後ろめたさを覚えながら、足音をたてないように薄暗い廊下を走る。別に悪いことはしていないのに、放課後の学校はなぜか、来訪者を拒むような空気に包まれている。普段ならまだ部活などで残っている生徒も多いが、明日から試験週間が始まるため、人の気配は全くなかった。二年生になって少し遠くなった教室に着き、未来は廊下に設置されたロッカーから物理の教科書を取り出した。第一日目は、物理、現代文、世界史。他の教科は全く手つかずで、唯一点数の取れそうな物理だけを頑張ろうと思ったのに、その教科書を、置き忘れてしまったのだ。未来は普段から、教科書は全て、このロッカーに置いてあって、自宅で勉強する時だけ、持ち帰る。どこから広まったの

か、それをあてにして、顔も知らない他のクラスの生徒が、しよつちゆう未来を尋ねてきては忘れた教科書を借りていった。

せつかく来たのだから、他に忘れ物がないか、教室の机を確認しようと思に入ると、そこに英語教師の城戸きとの姿があった。一瞬、開ける扉を間違えたかと不安になる。

「……忘れ物？」

授業の時以外、関わりを持ったことはない。去年の春、未来たちが入学すると同時に新任教師として赴任してきたのだが、女子生徒の間では、その整った容姿で飛び抜けて人気が高い。物腰も穏やかで、影では下の名前で唯様ゆい、と、とても教師のあだ名とは思えない呼び名で呼ばれていた。二年になって、未来のクラスは彼の授業がなく、嘆いている女子も多い。それにしても、こんな時間に、この教室で、何をしてたのが気になる。未来が訝し気に見ていると、窓辺に佇んでいた城戸は、開けていたカーテンを閉めた。

「すごく濡れてるけど、風邪ひかないようにね、」

それだけ言つて、彼は教室を出て行った。フワリ、と花のような香りがして、一瞬でも安らいだ自分に嫌悪感を覚える。何をしてたのか解らなくなり、しばらく立ち尽くしていたが、その香りが消えるとともに記憶を取り戻し、教科書を脇に抱えて来た道に戻った。

未来の通う高校は、この辺りでは有名な進学校で、運の良いことに、自宅から歩いて行ける場所にある。忘れ物をしてもすぐ取りに帰れるのは近所に住む者の特権なのだが、無い物ねだりで、他の友人たちが電車の定期券をケースに入れて持ち歩くのが羨ましい。電車通学をしたことのない未来には、当然、満員電車に押し込まれる苦痛が解るはずもなく、二両目と三両目の間に乗ると決めて待ち合わせる暗黙の了解や、同じ車両に他校の可愛い女子が乗っていた話を聞くと、無性に悔しくなるのだった。

部屋に戻った未来は、置いて行った携帯のランプが光っていることに気付いた。多分、菜々子だろう。一緒に勉強をしようと言われ

ていた。濡れた頭を拭きながら届いたメールを確認せずに電話をかける。

「ねえ、数学、教えてよ。今から行ってもいい？」

いきなり用件から始まった。数学の試験はまだ先なのに、と思いつながらも、

「いいけど。今更やったって、そんなに変わんないだろ」

「何よそれ。バカにしないでよね。じゃあ、すぐ行くから」

切れた携帯をソファに置き、溜め息をついた。菜々子とは、小学校から同じで、中学の時、吹奏楽部で同じになり、仲良くなった。勝ち気で、何事も妥協しない、自分にも他人にも厳しい性格だ。どちらかという諦めが早く、いつも肝心なところで退いてしまう未来とは、共通点がないようにも思える。ところが、偶然高校が同じで、クラスは違うが、また吹奏楽部に入った二人は、好きだとか、付き合おうとか、どちらも言わないまま、そういう関係になっていた。未来はそのきっかけが何だったのか、考えたこともなかったが、今、ふと気になった。

「こんにちはー！」

菜々子の声がして、母親と話すのが聞こえる。自転車で五分とかからない場所に住んでいるのだ。母親同士も仲がよく、いつもスーパーで会っては、我が子をけなし合っているようだった。何事もオープンな未来の家庭では、二人の関係をとうに知っていたが、菜々子の家ではどうなのか、そういうえば聞いたことがない。

進学校と言えど、普段の試験は教科書程度の問題しか出ない。授業を真面目に聞いてさえいれば、際になって慌てなくてもそこその点数は取れるはずだが、未来にはそれすら難しかった。注意を受けるほど不真面目ではないが、授業に集中しているようでそうでなく、試験の前日はしょっちゅう徹夜している。

「未来はいいよね、数学できるから」

「……おまえはそれ以外、全部できるからいいだろ？」

言いながら、未来は自分が情けなくなつた。本当に、数学しか、

できないから。数学だけでは将来、仕事にできるものが少ないから、
他も頑張りなさい、と一年の時から担任に言われ続けているが、で
きないものは仕方がない。中学までは、他の教科も全て満点に近か
ったはずなのに、やはり進学校ともなると、教科書からしてレベル
が高く、片手間の勉強量では、ついていくのがやっとだった。

「未来は、将来何になるの？」

菜々子の計算の遅さに、苛立ちながら見ていた未来は、今考えて
いたことと被るその質問に驚く。

「数学者になれたらすごいよね。大学に残って、博士課程、だっけ
？」

まだ、現実味を帯びない会話だった。未来自身、将来自分がどん
な仕事に就くのか、見当もつかない。大学すら、決めていなかった。
「そこ、違うよ。計算してるときは、よそ事考えるなって言ってる
だろ」

「何そんなに怒ってんの？自分が試験勉強やってないからって、私
に当たらないでしょ」

言われて、未来はハツとした。いつになく、些細なことに苛立つ
理由に、心当たりがない。謝ろうとするより早く、

「まあ、集中してない私も悪いけど、」

菜々子はそう言って、再びノートに向かう。

「……ごめん」

未来も、黙って物理の教科書を開いた。

翌日、午前中の試験が終わる頃、未来は寒気がして、風邪をひい
てしまったことを認めざるを得なくなった。朝起きたときから喉が
腫れているような気がしていたが、病は気から、と自分に言い聞か
せたのに。昨日、雨が上がってから急に蒸し暑くて、窓を開けたま
ま眠ってしまった。教科書を取りに行つて濡れたのが良くなかつた
のかも知れない。未来は大きく溜め息をついた。試験週間は始まっ
たばかりで、あと三日もある。

「未来、元気ないじゃん。どうしたんだよ？」

「風邪ひいたみたいでさ、喉痛いし、」

「保健室行って、風邪薬もらったほうがいいんじゃない？」

川田俊介は、未来の親友だ。高校に入ってから知り合ったが、裏表がなく、明るくて大らかな性格が好きだ。一緒にいて楽しいし、ホツとする。話しやすく、つい忘れてしまいがちだが、俊介は未来とは比べ物にならないほど頭がいい、いわゆるエリート高校生。しかし、それを全く感じさせないところも、好感が持てた。

昼食を終えた未来は、俊介に言われた通り、保健室に向かった。去年、体育の走り高跳びで着地に失敗し、足首を捻挫したときに一度お世話になったきりだが、保健室の先生が優しく、すごく癒されたことを思い出したから。未来は、意外にも自分が癒しを求めていたことに気づき、その浅ましさの理由を探しながら保健室のドアを開けた。

「どうしたの？」

未来が体調を説明すると、彼女は食事の手を止め、簡単に未来を診察した。体温計を確認し、

「熱があるじゃない。扁桃腺も腫れてるし、無理しないで帰ったほうがいいよ」

「午後からも試験があるから、」

「あとで追試が受けられるように、私から先生に言っておける。担任の先生、誰だっけ」

有無を言わず、内線で職員室に連絡を始めた。その会話を聞いていると、なんだか自分が急に病人に思えてきて、余計に体がだるくなってくる。

「食事が終わったら、教室の荷物を持って、来てくれるって。それまで休んでなさい」

未来は言われるまま、ベッドに横になった。

「お家の人に、迎えにきてもらおう？」

そう言われて、小学校の時、よく熱を出して母親に迎えにきても

らったことを思い出した。何だか恥ずかしくなり、ただ首を横に振ると、

「無理すると、高熱が出るよ?」

「……大丈夫です。家、すぐそこだから」

「それならいいけど、」

彼女は、おやすみ、と笑顔でベッドの横の白いカーテンを引いた。ちよつと薬をもらいにきただけのはずが、こんなところに寝かされるなんて。未来は溜め息をつきながら布団に潜った。追試なんて、初めてだ。今日と同じ問題が出るのか、それとも追試は追試で別なのか。できれば今日と同じにしてもらいたいところだ。それなら俊介に聞いて、対策が出来る。

誰かの話し声が遠くに聞こえ、目を覚ました未来は、そこが何処なのか把握するのに手間取った。見慣れない天井と、自宅のものは肌触りの違う布団、それに消毒薬の匂いで徐々に記憶を取り戻してきた時、白いカーテンがゆっくりと開いた。

「具合、どう?」

首から下げた名札で、この先生が木村幸という名前だと初めて解った。みゆきと読むのか、さちと読むのか考えていると、予想外の人物が木村の後ろから現れた。

「担任の野口先生、試験監督で抜けられないから、代わりに城戸先生が荷物持ってきてくれたよ」

「……、」

起き上がってお礼を言おうとした未来は、喉が痛くて咳き込んでしまった。それに、熱のせいで体中が痛い。回復するどころか急激に酷くなっていることに不安を覚えた。

「家まで送ってあげるから、心配しなくていいよ」

未来は、城戸の腕に支えられて歩くことを不本意に思いながら、時々その腕に寄りかかってしまう自分をどうすることもできなかつた。思ったより重症なようで、帰ったら病院へ連れて行かれるであ

るうことを想像すると、憂鬱になる。下駄箱まで辿り着き、やつこのことで靴を履き替えて城戸の白い車に乗った。個人的な話を交わしたことの無い教師との二人きりの空間に、多少の緊張はあるものの、彼の香水に、今日は何だか心が癒されるのを感じた。熱のせいでだろうか。城戸は未来の自宅の場所を確認する以外は、何も喋らず、それが未来の喉の痛みを気遣ったことだとは知らずに、未来も窓の外に目を向けて黙っていた。

あつという間に自宅に着き、城戸は未来を助手席で待たせ、インターホンを鳴らした。間もなく母親が顔を出し、大袈裟に驚いた声を出す。

「わざわざすみません。今朝は何ともなかったんですけどね」

母親に急かされ、未来は車を降りた。再び、城戸が手を添えて、ふらついている未来を玄関の框に座らせる。

「かなり熱が高いようなので、病院へ連れて行ってあげて下さい」
中でお茶でも、と母親が申し出るのを丁寧に断り、森下くん、お大事に、と、城戸は学校へ戻って行った。

「お友達、お見舞いにきてくれたわよ」

母親の声で目が覚め、重い瞼を開けた未来は、そこに俊介と菜々子の姿を見つけた。

「大丈夫か？薬もらって帰って保健室に行つたきり、戻ってこないし、二日も休むから、さすがに心配になってさ」

二日も？未来は耳を疑った。城戸に家まで送ってもらってから、すぐに母親の車で病院へ連れて行かれたところまではハッキリと覚えてはいるが、その後、何度か薬を飲むために起こされたような気がするだけで、そんなに時間が経つたとは思えない。

「昨日電話しても出なかつたから、どうしたのかと思つてたのよ？
そしたら今日、川田くんが教えてくれて、」

菜々子はよつぱど心を許した相手しか、名前で呼ばない。未来を通して知り合つたにしても、もう随分慣れたはずの俊介すら、川田

くん、と呼ぶのは何だかよそよそしくて、逆に失礼な気がする。

「熱も下がってきたし、もう大丈夫だと思っただけ。試験の時に風邪ひくなんて、ダメな子の典型ね」

母親が余計なことを言いながら、二人にお茶とお菓子を出し、こゆつくり、と部屋を出て行った。その背中を睨みながら、久々に体を起こす。

「ね、城戸先生に送ってもらったってホント？」

菜々子が急に、そんなことを聞いた。

「なんで知ってるの、」

「今、お母さんが言ってたから。それにしてもひどい声ね」

そう言っ、て、未来の額に手を当てようとする。未来はそれを無意識に避けた。

「城戸が教室に入ってきたときの女子の喜びかたは凄かったよ。唯様だ、って小声で言ってたけど、あれ聞こえてるよ、絶対」

俊介の言い方が可笑しくて、思わず吹き出した。その時の女子たちの様子が目に浮かぶ。

「あいつさ、いつもあんな感じなのかな。なんかちょっと、他の先生と違うかい？」

未来もそれは感じていた。香水の匂いがするとか、そういう表面的なことではなくて、何か不思議な空気を持っている。

「女とフツーにSexとかするのかな。何か想像つかねーよな」

「ちょっと、そういう下ネタ、やめてよね！」

菜々子が怒って先に帰って行った。俊介はそれを横目で見送りながら、

「おまえ、あいつと付き合ってるの？」

「……なんとなく、」

「なんとなくでヤツちやったパターン？」

「うん、」

やっぱりな、と俊介は笑った。言ってしまった、未来は胸の奥がスッキリするのを感じた。今まで親友にも菜々子とのことを黙って

いたのは、何処か後ろめたさがあつたからだと、ようやく理解していた。

土日を返上して、休んだ分の試験の追試を終え、未来は久々に音楽室にいた。この、古い楽器や譜面、ピアノ、床のワックス、様々な存在の入り交じった匂いが好きだ。学校が変わっても、音楽室の独特の匂いは変わらない。ここ数日、気温も湿度も高かったせいか、閉め切っていた準備室の空気は温室のように蒸んでいて、窓を開けると、止まっていた時間が風とともに何処かへ流れて行く。もう何日も見たことのないような青空が、心の中まで爽やかにしてくれる気がした。

未来は自分の黒い楽器ケースを棚から下し、留め具を外した。この高校に合格したら、という約束で買ってもらったシルバーのトランペット。今、一番大切なものは、と聞かれたら、間違いなくこの楽器と答える。まだ一年ちょっとの付き合いだが、もうなくてはならない存在だ。臙脂色のビロードが貼られたそのケースからトランペットを取り出し、ピストンの動きを確認した未来は、いつものようにBの音を出してみた。触れると、安心する。感情の起伏をあまり表面に出さないタイプだが、それでも悲しい時や悩み事がある時もあるわけで、そんな時も、いつも変わらず側にいてくれる。未来にとってこの楽器は、まさしく理想のコイビトだった。

「早いね、追試どうだったの？」

いつの間にか菜々子の姿があつた。

「いつもよりは良かったような気がするけど」

「良かったじゃん。風邪はすっかり治った？」

「もう治ったよ」

肺ではなく、腹式呼吸を使うため、まだ少し咳が出るが、練習くらいはできるはずだ。何より、未来はこの楽器に、早く会いたくここに来た。

「その子と、私と、どっちが好きなの？」

突然聞かれて、答えに困った。それを察知したのか、菜々子は少なからずシヨックを受けたような顔で、

「未来に、好きって言われたことないよ。もしかしたら、私のこと好きじゃないのかもって思ってたけど、ホントにそうみたいだね」

否定しようと思えばできたのに、未来は黙っていた。菜々子だって、未来に好きだと言ったことはないはずだが、それは敢えて口にはしなかった。菜々子もそれ以上は何も言わず、自分の楽器であるクラリネットを組み立て始める。やがて他の部員たちが続々とやってきて、二人のわだかまりは残ったまま練習が始まった。

「そつえば未来、城戸先生にちゃんとお礼を言ったんでしょね」
帰宅して食卓につくなり、母親が言った。

「……あれから会ってないし、」

「職員室に行けばいいじゃないの。明日、必ず行くのよ」

「解ったよ、」

未来が仕方なく返事をする、一つ上の姉の瑠未るみが口を挟む。

「城戸先生って、すごいいイケメンなんでしょ？お母さん、こないだからそればかり」

瑠未は未来とは別の、私立の進学校に通っている。瑠未はあまり苦にしていなが、中高一貫で、厳しいという噂だ。

「だってホントに素敵だったのよ。今まであんな綺麗な男の人、見たことないくらい。スラッとして、声も優しくて。未来が熱出して良かったわ」

「……サイテーだな」

こういうことに歳は関係ないのか、と半ば呆れながら食事を終え、未来は自分のベッドに仰向けになった。しばらく天井を見ていたが、思い切つて携帯を手に取り、菜々子に電話をかける。今から会う約束をして、未来は家を出た。

歩いて近くの公園に着くと、やがて菜々子も歩いてやって来た。側まで来た菜々子を抱き寄せ、キスをする。

「……ちよつと、近所の人に見られたらどうするのよ、」

その菜々子の反応に、言おうと思っていた台詞は何処かへ行ってしまうた。代わりに、

「別れようか、もう」

「え？」

「そのほうがいいよ、多分」

泣きそうな顔で黙っている菜々子に、改めて愛情を感じない自分を確認してしまった。

「ごめん、急に。じゃあ、また明日」

未来はそう言うのと、菜々子に背を向けて歩き出した。決して嫌いなわけではない。しかし、未来の求めているものとは何かが違った。最初から、それは解っていた。それなのに、ある日、キスして、そのまま最後まで行ってしまったことを、未来はずっと後悔してきたのかも知れない。

「あーあ……」

再びベッドに仰向けになった未来は、思わずそう声を上げていた。

全く気が進まなかったが、翌日の放課後、未来は職員室の扉の前に立っていた。日頃から、解らなかつた問題の質問をしに自ら職員室に行くクラスメイトを、物好きな連中だと思っていただけに、余計に入りづらい。もうすぐ部活が始まるし、いつまでもこうしても仕方ない、と意を決してノックしようとした時、中から扉が開いた。

「あ、」

出てきたのは、城戸だった。ぶつかりそうになり、慌てて避ける。未来の顔を見るなり、

「もう風邪は治った？」

「……はい、あの、送って頂いてありがとうございます」

「空き時間だったし、気にしなくていいよ。……誰かに用事？」

そう聞かれて、あなたに会いに来たとも言えず、

「いえ、大丈夫です。失礼します」

未来は逃げるようにその場から立ち去った。柔らかい花の香りが、追いかけてくるように香るのを気にしながら、その足で部活に行き、急いでトランペットを手に取る。未来はしばらく楽器を胸に抱いていたが、ようやく落ち着き、軽く深呼吸して、半音階を逆に吹いてみた。が、間違えるはずのない音階で運指を間違えてしまい、思わず溜め息をつく。……どうも、城戸は苦手だ。理由は解らないが、未来は最近、そう感じていた。

六月も末になり、雨が続いている。毎年のことだが、明らかに梅雨入りしたと誰もが解るようになってから、気象庁はようやく、梅雨入り宣言をした。暑かったと思っただけなら急に気温が下がったり、雨が降っていても蒸し暑かったりするこの時期、何を着ればいいのか、困ってしまう。未来の通う高校は、制服がなく、皆自由な服装で登校するのだが、生徒側から、こんなに寛大でいいのか、と心配の聲が上がるほど、校則らしい校則がなかった。地域で一、二を争う進学校ともなれば、それなりに分別のある生徒が集まり、滅多なことにはしないだろうという学校側の期待も込めてのことらしいが、それにしては自由すぎた。今の時期のように、制服なら選ぶ手間もいらず楽だっただろうに、と思うこともよくある。

昼休み、食事を終えるのを見計らって、俊介が未来を廊下に連れ出した。

「ちよつと、話があるんだ」

「何だよ？教室じゃできない話？」

「そういうこと」

廊下なら、ひっきりなしに生徒は通るが、その分、騒がしさで会話を聞かれる心配がない。俊介は自分のロッカーから何か取り出し、未来に渡した。手紙のようだ。

「何、これ」

「部活の後輩から頼まれてさ。おまえに渡してくれ、って」

「……」

「大丈夫、可愛い子だよ」

そういうことを言っているんじゃない、と思いながら、森下先輩へ、と書かれたその手紙の封を切った。内容は、まあ想像していたふうな感じで、要は、彼女がいないなら、付き合っして下さい、ということだ。手紙の最後には、中野沙耶（みや）という名前と、携帯番号、アドレスが書いてある。見知らぬ人からこんな手紙をもらうのは初めてで、嬉しさより戸惑いのほうが大きいことを意外に思いながら、「なんで俺のこと知ってるんだらう」

「さあ、そこまでは聞かなかったけど。何なら、今から教室まで見に行く？それか、部活見に来る？」

「やだよ。気があるみたいじゃん」

確かに、と笑う。俊介は弓道部で、練習は男女混合。俊介の彼女も弓道部の同級生だった。俊介は未来が菜々子と別れたことを知っているから、この手の手紙を渡しても支障はないと思ったのだろう。唯一打ち明けていなかった菜々子とのことを話してから、未来は俊介に、文字通り何でも話すようになっていた。隠し事のない身軽さが、何だか嬉しい。

「そういえば、俊介は彼女とうまくいつてんの？」

話を逸らそうと思ったわけではないが、気になって聞いてみた。

「まあ、フツーにね。なんで？」

「……彼女のこと、好き？」

当たり前のことを聞くな、というような表情で、頷く。

「そうだよな。好きでもないのに付き合わないよな」

言いながら、何だか羨ましくなってきた、未来は溜め息をついた。

「どうしたんだよ、珍しく反省？」

「そういうわけじゃないけどさ……」

未来は自分の気持ちを上手く表現できず、また溜め息をついてしまった。菜々子とはあれつきり、部活で会ってもお互い話しかける

ことはなく、ギクシヤクしているのを周りに悟られるのではないかと心配になる。何も、別れることはなかったのかも知れない。お互いの気持ちや関係を、一度確認すればよかっただけなのかも知れない。後悔ばかりが浮かんで、いつも心の中で渦巻いていた。

「俺、あいつのこと、好きだったのかな……」

口にしてみたものの、何も解決せず、後輩のこと、考えてやってくれよ、と言う俊介の言葉に曖昧に頷き、ちょうど鳴ったチャイムとともに教室に戻った。

降り続く雨の音が閉め切った窓越しにも聞こえる。湿度は何処も飽和状態で、それは教室の中まで侵入してきていた。床も机もベタベタして、それだけで憂鬱になる。一年生の時は教室が一階で、広い中庭に面していたため、授業中、色とりどりの紫陽花を眺めて気を紛らしたものだが、二階の教室に変わり、見えるのはベランダの壁ばかり。遠くに見える空も灰色で、余計に気持ちが滅入る。

放課後、同じトランペットで、未来をすごく可愛がってくれている南和人と二人で、パート練習をすることになった。南は三年生で、パートリーダーと部長を兼ねている。人間の大きさと言っか、包容力に溢れていて、まさに適任だと誰もが認める人材だ。未来も絶対の信頼をよせている。同じパートにはあと四人いるのだが、今日は楽器の修理をまとめてするため、休みだ。

パート練習では、他の楽器の音が混じらないように、楽器ごとに固まって練習をする。当然音楽室だけではスペースが足りず、廊下やベランダに椅子を移動させるのだが、トランペットの音は飛び抜けて大きく、こういった練習の時は邪魔者扱いだ。

「一番端まで行くか、」

南がそう言ったので、未来は二人分のパイプ椅子を腕にかけ、廊下の端まで移動させた。他のメンバーがいないこの機会に、菜々子とのことを相談しようかと悩んでいた未来はふと、南が指輪をしていることに気付いた。

「先輩、指輪、前からしてましたっけ」

「いや、……目敏いな」

聞くと、先週の誕生日に彼女からもらったらしい。南の彼女は、塾で知り合った他校の三年生、というところまでしか知らない。あまりペラペラと自分のことを喋らないところも、好感が持てる。

「先輩、彼女のこと、好きですか？」

未来の問いに、少しの間もなく、好きだよ、と答える。

「おまえは？菜々子と付き合ってたんだろ？」

「……、」

未来は思わず言葉に詰まった。誰にも、菜々子とのことは言っていないかったし、だから当然別れたことも、言っていない。驚いている未来に、南は、見てりゃ解るよ、と呆れたように言った。

「別れました、最近」

「……そっか。やっぱりな。おまえも菜々子も、最近元気ないから」

南は、それ以上は聞かず、元気出せよ、すぐ次が見つかるよ、と未来の背中を叩いた。自分はどうしたかったのだろう。菜々子と、別れなくなかった？それとも、別れて友達に戻りたかった？問いかけても、答えられる自分は何処にもいなかった。

週末は十日ぶりの晴天で、湿度は高いものの、未来は傘を持たなくていい身軽さを噛みしめていた。俊介たち弓道部の試合を見るため、久々に車庫から出したマウンテンバイクで、五キロほど離れた体育館に向かっている。全身で風を切って走るのは、いつも最高に気持ちがいい。ブレーキをかけたくなって、信号が切り替わる頃合いを見計らって、スピードを加減した。

会場に着くと、さすがに知らない顔ばかりで、人見知りをする未来は急に不安になり、誰かを誘えば良かったと後悔しはじめる。未来は、あまり大勢で行動するのが得意ではなく、どちらかというと、一人か、気の知れた友人の二、三人でいることが多い。特に休みの日は、そうだった。……いつもなら、菜々子を誘っていた。間違い

なく。

試合は時間ピッタリに始まり、余計な私語は一切ない。水を打ったように静まり返る中、弓道衣に身を包んだ生徒たちが並んで一斉に矢を射る。それは吹奏楽コンクールの演奏が始まる前の会場の静寂と、指揮者の最初の一振り、皆が一斉に息をする瞬間に似ていた。空間を切り裂くような矢の音が、聞いていて心地良い。その音を実際の音階に当てはめて聞いている自分に苦笑しながら、未来は俊介の出番を待った。普段は大雑把な性格に思える俊介も、この時だけは違う。一点に集中して弓を引く表情や構えは、羨ましくなるほど綺麗だった。ふと、自分にそんな瞬間があるのだろうか、と考えてみる。全てを忘れて一つのことに集中する瞬間に、身にまとう美しさ。そんなものに、憧れてしまう。

「未来、」

試合が終わり、着替えを済ませた俊介が、わざと後ろから忍び寄って、声をかけた。驚いて振り返ると、俊介の他に、三人、お揃いのジャージを着た女子の姿がある。一人は、俊介の彼女だと解ったが……。

「ほら、この前、渡したろ？この子だよ」

そう言われて、例の手紙のことを思い出した。

「沙耶、チャンスだよ」

小柄で、サイズがなかったのか、借り物のようなジャージ姿だ。

どうやら、沙耶は未来と同じく人見知りか、それほど積極的ではないようで、連れに引つ張られるようにして未来の前に立った。それでも俯いて恥ずかしそうにしている沙耶に、俊介が声をかける。

「大丈夫だよ。未来は優しいから。好きなんだろう？」

未来は、当事者ながら、この沙耶という子に同情した。寄ってたかって告白のようなことをさせられるなんて、未来なら絶対にイヤだ。

「俊介、」

咎めるように言うと、俊介も、解ってる、というように頷き、

「ごめんごめん。じゃあ、俺たち先に行くから」

と、彼女ともう一人の連れに手招きして帰って行った。本当に帰るの、と言いかけて、その台詞を飲み込む。残された未来は、明らかに予定外の事態に戸惑っていた。今までは、会話にしても、遊びにしても、いつも相手にリードしてもらっていた。自分から発信することなど、数えるほどもしたことがない。しかし、今日の前にいるのは、年下の、大人しい女子だ。必然的に、未来にリード権が発生することに気付いたものの、この初対面の後輩をどう扱ったらいいのか見出せず、散々悩んだ挙句、

「……俺も、人見知りでさ、……解るよ、」

すると、沙耶は恐る恐る顔を上げ、困った顔をした未来を見て、初めて笑った。可愛い、と純粹に思ってしまう。幼い顔立ちで、それを際立たせるかのように耳の下で切りそろえた髪が、相槌を打つたびにフワフワと揺れた。

聞くと、驚いたことに、同じ中学の出身だった。慣れてくると、会話のテンポが合っているのか、話しやすいと感じる。

「中学のときから、森下先輩のこと、好きでした」

「話したこともないのに、」

未来が笑うと、沙耶は真剣な顔で、

「話したことなくても、先輩が優しい人だって、解ります！台風の日、学校の前に捨てられてた犬を助けてあげてるの、見てから、ずっと……」

沙耶は言いながら泣き出してしまった。あの子犬は成長し、今も自宅の庭で元気になっている。

「……そうだ、今から、ヒマ？」

未来はなんとか泣き止ませようと、そう切り出した。こういう状況に慣れていなくて、未来のほうが泣きたい気分だ。

「家においでよ。あの犬、いるから」

そういうわけで、未来は弓道衣の入った大きな鞆と沙耶を連れて、自宅に戻った。沙耶の荷物を母親の車のボンネットに置き、車庫か

ら庭に入ると、犬が飛んで来て短い尻尾を振る。鎖でつないで自由を奪うのは可哀想だと、家族の意見が一致し、庭を自由に走り回れるようにしてあるのだが、当の本人は、走り回るより寝ることのほうが好きらしく、いつも同じ場所で転がっていた。

「ただいま、」

犬に向かって声をかけたはずが、リビングの窓が開いていて、姉の瑠未がおかえり、と答えた。受験生の瑠未は、自分の部屋で勉強すればいいのに、いつも食卓でやっている。

「ミミだよ。耳が大きいから」

聞かれる前に、名前を教えた。ミミの種類は解らないが、体全体が薄茶色で足が短く、お腹と足が白い。体の大きさと釣り合わない耳のサイズや、まるで靴下を履いているようなところがいつ見ても可笑しかった。沙耶は犬が好きなのか、ミミを胸に抱いて撫でている。

「あら、お客さん？」

母親が顔を出した。

「高校の後輩。中学も一緒だったんだって」

「中野沙耶です。はじめまして」

「こんにちは。可愛らしい子ね」

来るもの拒まず、の家風で、うちの家族はミミも含め、誰にでも愛想がいい。言ってくれたらケーキでも買っておいたのにな、と中から瑠未の声が聞こえた。

「自分が食べただけだろ、」

未来のつぶやきに、沙耶が笑った。菜々子やその他の部活仲間以外の女子と、あまり親しく話したことのなかった未来には、この幼い後輩の可愛らしさが、新鮮だった。

しばらくして、塾へ行く時間だから、と、沙耶は母親の淹れた紅茶のお礼を言って、帰って行った。その後、母親と瑠未の攻撃が始まる。

「可愛い子見つけちゃって」

「菜々ちゃん最近来ないけど、そういうことだったの」

「違うよ、今日初めて会ったんだよ」

「その割にはデレデレしちゃってさ」

「塾へ行くなんて、一年生なのに偉いわ。未来も見習いなさい」

未来は朝からゴルフに出掛けたまま帰ってこない父親を恨んだ。

この女たちの相手は、未来一人では手に負えない。

「塾は行かない。何回も言わせるなよ」

そう言い放って、未来は自分の部屋に逃げた。未来は同級生の殆どが塾へ通う中、自分だけは絶対に行かないと決めていた。学校の授業もろくに聞いていないのに、塾へ行っただころで、何の足しにもならないことくらい、自分が一番良く解っているからだ。それに学校の勉強だけでは受験戦争に勝ち残れない、というふうな考えが、気に入らない。中には塾を最優先にして、学校はただ内申書のためだけに通うような生徒もいるが、学校を無駄だといわんばかりの態度も嫌いだった。未来は、せっかく入ったこの高校生活を、楽しみたい。進学校に入った時点で、大学に行くことは前提だったとしても、元々、価値観が違うのだ。志望校と偏差値がいつしか同義語のように扱われ、偏差値が上がれば志望校も変わって行くことに、疑問すら抱いた。部活もせずに塾に通い、偏差値で決められた志望校に合格することに、未来は何の魅力も感じなかった。

それにしても、知らない人と話すと、疲れる。未来は大きく息を吐きながら、ベッドに寝転がった。いくら話しやすくても、やっぱり勝手が違うのか、ひどく体力を消耗した気がする。このまま眠ってしまおうか、と思った瞬間、携帯が鳴った。

「なんだ、俊介か」

「なんだよ、誰だったら良かったんだよ？」

「からかうような口調に、ホッとして、」

「今から何処か行かない？家から出たいんだけど、」

その誘いに乗ってくれた俊介と、駅前のファストフード店で落ち

合った。適当に注文して、窓際の席に座る。

「で、どうだった？中野と少しは話したんだろ？」

「やっぱり、その話題か。未来は軽く溜め息をついた。

「話したよ。中学の後輩だった」

「……それで？」

「それで、つて、それだけ」

俊介は、なんだ、つまらないな、と椅子に凭れ掛かる。

「一回話しただけで、何かあるわけないだろ」

「……菜々子とはあつたくせに」

「だから、あいつとはずっと前からの付き合いなの、」

そう言ってから、未来はふと、少し気が晴れていることに気付いた。菜々子と別れてから、ずっと胸の中に分厚い雲がかかっていたから。

「でも、何か、いい感じだったのかも」

「そうだろ？付き合えよ。あいつ、胸デカいしさ」

「マジで？」

そんなふうには見えなかったな、と言いながら、顔しか見ていなかったことを後悔してみる。

「でも、まだ別れたばっかだし」

「いいじゃん、そんなの。気にしてたらやってらんないよ」

俊介がどうしてここまで沙耶を勧めるのかは解らなかったが、未来はもう一度、会ってみてもいいかな、と思っていた。沙耶は、今どきの女子高生という派手で騒がしい感じはまるでなく、大人しくて控えめだった。あまり身長が高くない未来にとつて、沙耶が小柄であることも好感が持てる。菜々子も派手ではないが、性格のきつさが目立って、損をしているように思えた。自分が先頭に立って、有無を言わず周りを引っ張っていくタイプで、未来が何も言わなければ、菜々子の独断でどんどん話が進んで行く。楽だけど、そのスピードに時々、疲れる。そう感じるようになった頃から、未来は菜々子との関係に疑問を抱くようになったのかも知れなかった。

色々考えるとところはあるものの、俊介と話していると、悩んでいるのがバカバカしくなってくる。未来は大きく伸びをしながら、

「今日、俊介に会えて良かったよ。ありがとう」

「なんだよ、急に。俺より中野を褒めろって」

「今度、もう一回会ってみるよ」

「よし！」

俊介は自分のことのように喜び、早く連絡してやれよ、と未来の肩を叩いた。

不思議な人

? 不思議な人

吹奏楽コンクールが翌月に迫り、吹奏楽部の練習は土日にも及んだ。中学の頃から慣れてはいるが、休日の二度寝が何より好きな未来にはちよつと辛い。おまけに、梅雨明けしてから急に真夏並みの気温が続いて、少々夏バテ気味だった。未来の部屋にはエアコンがなく、冬はまだいいが、夏、どんなに暑くても窓を開けて扇風機で凌ぐしかない。小さい頃体が弱くて、エアコンの風が体に悪い、と言われたことを、未だに守っているのだ。未来は自分の部屋を与えられてから、母親にエアコンをつけてくれるよう、何度も直訴したが、それだけは受け入れてもらえなかった。

「酷くない？ウチの親、」

練習の合間、未来は譜面ファイルで顔を扇ぎながら、同じパートの寄本杏奈あんなにこぼした。

「未来くんのこと、大事にしてくれてるんじゃない」

「でも、もう何ともないのに。最近暑くて眠れないよ」

「確かにね。私もお肌に悪いからエアコンつけずに寝るんだけど、ちよつと辛いね」

四分の一、ヨーロッパの血が流れる杏奈は色白で、登下校には曇りの日も日傘をさしている。美白ブームか何か知らないが、最近妙に肌を気にしていた。そういえば母親も、瑠未と一緒に、風呂上がりに蒸気の出るおかしな機械を使っている。

「女子は大変だね、」

「未来くんも、肌理が細かいから、気をつけたほうがいいよ。日焼けしたらシミになるから」

言われた内容にピンとこなかった未来は、曖昧に返事をして、練

習を再開した。

菜々子とは、ようやく和解して、今まで通りに会話をすることができるようになった。コンクールを前に、部員が少しでもギクシャクしては、演奏に支障が出ると思ったから、と、菜々子らしい理由だった。それで未来も肩の荷が降り、溜め息をつくこともなくなっていたが、ただ、夏バテは深刻で、夏休みが始まる頃には、食事ができないほどになってしまい、それで余計に体力が落ちていた。

「だからエアコンつけてって言ったじゃん、」

ヨーグルトさえ受け付けなくて、スプーンで掻き混ぜただけで席を立とうとすると、母親がそれを止める。

「食べなさい」

「無理だよ、」

「吐いてもいいから食べるの」

「……」

確かに、食事がまともにとれなくなってしまって、何をすることもすごく辛い。ただでさえ肺活量の必要な楽器なのに、力が入らなくてはどうしようもないことも解っている。未来は、腕組みして立っている母親の前で、ヨーグルトを無理矢理流し込み、学校に向かった。

しかし、音楽室も暑いのは変わりないわけで、正午近くになると室温はどんどん上昇した。時折、開け放った両側の窓から流れ込む新鮮な風を待ちつつ、皆、汗を拭きながら自主連をしている。大きな楽器の部員たちは、汗で手が滑ると危ないので、暑いのに手袋をして練習をした。未来も、コンクールまでの残り少ない時間を無駄にするわけにはいかないと、気分が悪かったが、苦手な運指の部分を朝から何度も繰り返し返している。未来に限らず、金管楽器は、クラリネットやフルートのようにキイが多い木管楽器に比べ、細かい運指が得意ではないのだ。

「未来、どうした？ 顔色悪いぞ」

南が未来に声をかけた。

「……、」

「ホント、真つ青だよ。ちょっと涼しいところで休んだほうがいいよ。」

杏奈にまでそう言われて、ますます気分が悪くなってきた。未来は我慢できずに、楽器を椅子の上に置き、走って音楽室を出た。

「大丈夫か？」

しばらくして南が様子を見に来た。吐き気は治まったものの、体力を消耗して立ち上がれない未来は、廊下の壁にもたれて、目を閉じていた。

「今日はもう帰ったほうがいいよ。一日くらい休んだって、未来なら大丈夫だから」

「……でも、」

皆も暑いのは同じなのに。自分だけがこんなふうになってしまっていることが、情けなかった。

「楽器は俺がちゃんとしておくから、もう帰りな。先生には俺から言っておくよ。」

最初から未来を帰そうと思っていたらしく、荷物を手渡してくれた。未来は悔しかったが、今日だけ休んで、何とか夏バテを治そうと決め、南に謝って音楽室をあとにした。普段の倍ほどに感じる階段を降り、下駄箱まで歩くと、また気分が悪くなってくる。しかし、家までくらはもつだろうと、未来は炎天下を歩き出した。通学路には日陰がなく、痛いほどの陽射しが全身を攻撃するかのようになり過ぎ、一歩ごとに体力を奪われる。いくら歩かないうちに、未来は耐えきれず、道端に座り込んで嘔吐した。血の気が引いて、気が遠くなるのが解る。このままではダメだと解っても、体に力が入らない。やがてうずくまってしまった未来の横で車が止まった。

「大丈夫？」

慌てた様子で車を降りて来たのは、城戸だった。城戸は助手席の

シートを倒してぐったりした未来を乗せ、タオルを手に持たせる。使っていいからね、と言う声に未来が頷くと、車はゆっくり動き出した。家はすぐそこなのに、とてつもなく遠く感じる。また吐き気がしてきて、未来はそのタオルで口を押さえた。

ようやく家についたが、どうやらこんな時に限って誰もいないようだ。鍵を渡して玄関を開けてもらい、ふらつく体を支えられて、家の中に辿り着く。城戸は未来をリビングのソファに寝かせ、キッチンを借りるよ、と断って、未来に冷たい水を持って来た。

「少し熱いみたいだから、冷やそうか？」

額に手を当て、城戸が言った。水を飲んで少し気分が良くなった未来が首を横に振ると、

「熱中症じゃなきゃいいけど……」

と、まだ呼吸の荒い未来を、心配そうに見つめる。首筋の汗に気付き、そつとタオルで拭いた。

「夏バテなんです、……最近ずっと、」

「そっか……。辛いね。今年は特に、蒸し暑いから」

城戸は、この家の事情を知っているかのように、部屋のエアコンはつけず、窓を開けて扇風機をつけた。食卓の上に母親がよく使う扇子を見つけて、優しく未来の顔を扇ぐ。その風に乗って流れてくる、城戸の香水を、今日は何だか懐かしい、と感じた。

「ホントにすみません。ご迷惑ばかりおかけしてしまって、」

母親の甲高い声が聞こえる。

「ちょうど通りかかって良かったです。あのまま倒れていたら、大変なことになるところでした」

「体が弱いくせに、自覚がなくて困った子なんですよ。また改めてお礼に伺います」

「いえ、気になさらないで下さい。それより、お大事に」

城戸が帰って行くのを確認した未来は、起き上がって深呼吸をした。随分楽になった気がする。

「ちょっと、未来。また城戸先生に送って頂いたのね」

「……うん」

「無理しないでお母さんに電話したらいいじゃないの」

「どうせいなかったくせに、」

「近所のスーパーに行っただけよ。すぐ迎えに行けるわ」

怒ったように言った後、

「でも、ホント、カッコイイわぁ……王子様みたい」

しみじみとそう言って、しまった、お茶もお出ししなかったわ、と独り言のように付け足した。

未来は二階の自分の部屋で、もう一度ベッドに横になった。柔らかな扇風機の風に、すぐに眠気がやってきて、吸い込まれるように目を閉じる。夏の暑さで壊れた体が、何か不思議な力で修復されていくように感じられた。何だろう、この感覚は……。フワフワとした雲に乗り、空を漂っている。景色を見たいのに体を起こすことはできず、ただ流れる雲のベッドで浮かんでいた。それが言いようもなく心地良く、いつまでもそうしていたくて、未来は眠りの世界へと、自ら深く潜っていった。

再び目覚めたときは、もう吐き気もなく、むしろ空腹を覚えた。

不思議な夢の余韻を微かに感じながら起き上がり、階段を降りて行くと、瑠末も父も帰っていて、楽しそうに何やら話している。

「未来、もういいのか？ 帰りに倒れたって、」

「……もう大丈夫だよ」

母親と瑠末は、また城戸の話題で盛り上がっている。二重瞼が可愛いだの、唇の形が色っぱいだのと、会ったことのない瑠末に説明しているが、父親の前でよくこんな話ができるな、と呆れながら食事を始めた。

「もっと野菜を食べなさい。食事のバランスも大事だぞ？」

「解ってるよ、」

大学病院で働く父は、内科専門の医師だ。しかし、小さい頃から、少々熱があっても、友達と遊んでれば忘れるよ、と言って幼稚園に

送り出したり、怪我をして帰っても、こんなの唾をつけておけば治るよ、と言ったり、全く医者らしくない。まあ、厳格な父よりは気楽でいいのだが、未来は時々、本当に医者だろうか？と疑ってしま

う。
「未来、あんたが吐いて汚した城戸先生のタオル、洗濯したから今度ちゃんと返すのよ？」

「……解った、」

城戸と話していたときと、同じ人物とは思えない声だ。指摘しようかと思っただが、まだ母親とやりあう元気はなく、未来は黙って食事を続けた。

翌朝、未来は、夏バテがすっかり治っていることに驚いていた。

昨日まであんなに酷かったのに、もう何処も何ともない。いつも通りの食事をとり、久々に元気に家を出た。夏休みで曜日の感覚が薄れてしまって、今日が何曜日だったか考えながら歩いて行くと、菜々子が後ろからやって来て声をかけた。

「未来、昨日途中で帰ったけど、大丈夫？」

「うん、もう平気」

「ならいいけど。真っ青な顔してたって、杏奈が言ってたから。体が弱いんだから、体調には気をつけなきゃ」

体が弱い、と言われると、カチンとくる。確かにそうだけど、小さい時ほどじゃない。しかし、夏バテだったとか、説明するのも面倒だった未来は、全く別のことを口にした。

「そっいえば、今日って何曜日？」

「土曜だよ。なんで？」

「いや、別に」

土日は、部活の顧問の先生以外は、休みだ。城戸にタオルを返すのは、また今度だな、と未来は心の中で、確認するように呟いた。

音楽室に着くと、あちこちから、体を心配する声をかけられた。

特に南は、気分が悪くなったらすぐに言えよ、と、未来を病人のよ

うに扱う。

「先輩、もう、夏バテ治ったんです」

「ホントか？昨日の未来を見てたら、そうは思えないけど」

「俺も、不思議なんですけど。昨日……、」

不思議な夢のことを言いかけて、未来は口を噤んだ。その話をすれば、城戸の名を出すことになる気がして。未来は自分が、それを避けた理由が解らず戸惑った。

「……とにかく、もう大丈夫です」

知らず知らずのうちに溜め息をついた未来を見て、

「ほら、やつぱりまだ治ってないじゃないか」

南に咎められる。

「でも、昨日までに比べたら、全然元気になったね。よかったじゃん」

いつもマイペースな杏奈がそう言ってくれたおかげで、ようやくパート練習が始まった。久々に、練習が楽しい。楽器も元気を取り戻したのか、音が明るかった。徐々に息の合ってきた演奏に、コンクールでの入賞の期待を誰もが持ちながら、あえて口にしない。そんな暗黙のルールが、ますます未来をやる気にさせていた。

月曜日、練習が終わり、鍵当番を引き受けた未来は、部員たちが帰って行くのをピアノの椅子に座って待っていた。くるくる回転するその椅子を、目が回る寸前で止め、今度は逆回転をする、それを何度か繰り返し、飽きてきたところで、ふと窓の外を見た。空が徐々に夕焼け色に染まり、急ぐかのように太陽が沈んで行く。夕焼けが綺麗だと、翌日は雨だったか晴れだったか、そんなことを考えていた。最後の一人が音楽室を出ると、内側からサムターンを回して鍵をかけ、中で繋がった準備室から出る。音楽室にも準備室にも両方鍵はあるのに、何故か皆、そうしていた。音楽室、と書かれた黄色いタグのついた鍵を弄びながら職員室に着いた未来は、一息おいて、扉をノックした。

「失礼します、」

声をかけて、キーボックスに鍵を返し、おもむろに職員室の中を見渡した。目当ての人物が見つからなくて、どうしようか悩んでいると、

「どうした、珍しいな」

担任の野口と目が合って、滅多に職員室にこない未来をからかった。野口は数学の教師で、普段は厳しいが、いったん授業を離れると、気安く話せる人柄が、未来は好きだ。

「あの、城戸先生って、お休みですか？」

「いや、さっきまでいたけどな。まだ帰ってはないと思うぞ」

「解りました」

未来は城戸の居場所が解った気がして、職員室を出た。真っ直ぐ自分の教室に向かい、そのドアを開ける。

「やっぱり、」

思わず声に出してから、しまった、と思った。城戸はあの日と同じように窓際に佇み、外を眺めていたようだったが、驚いたように未来を振り返る。開けていた窓を閉めながら、

「よく会うね」

と、その表情を和ませた。夕日が射し込み、白いカーテンも彼のシャツも、オレンジ色に染まっている。

「もう体は大丈夫？」

未来は、ただ頷いた。お礼を言わなければならないのに、体が言うことをきかない。一方城戸は、未来が自分に用があつてここを訪れたのだと悟ったのか、窓を閉める手を止めた。

「……入ったら？自分の教室でしょ？」

入り口に立ち尽くしていた未来は、言われるまま、中に入った。急に何をしにここへ来たのか解らなくなり、考えていると、城戸のほうから、未来に近づいて来た。

「部活、頑張ってるみたいだね。もうすぐコンクールなんだって？」

母親が甲高い声で喋る様子が目に浮かんだ。徐々に近づいて、目

の前に立った城戸は、思っていたよりも背が高く、未来は目線を上げた。夕日に透ける茶色い髪と、同色の瞳。その目を見てみると、吸い込まれるような気がする。この教師が持つ、不思議な雰囲気は、瞳のせいだと、解った。

「どうして、ここなんですか」

思いもよらない台詞を口走って、未来はハツとした。まるで自制心が働かず、催眠術にでもかかったようだ。城戸も、そんな質問を受けるとは思っていなかったらしく、驚いたような表情になる。

「……、」

迷っているのか、言葉を探しているのか、城戸は黙って未来の目を見つめていたが、

「好きだから」

そう答えた。その明快な答えに、未来は納得して、思わず笑みを零す。もっと現実離れた理由を期待していたが、それは未来の想像の中だけに留めておこうと思った。

「初めて笑ったね」

そう言った城戸も、いつになく柔らかな笑顔だった。笑顔が優しい、と、女子たちが言うわけに、ようやく納得する。

「コンクール、頑張ってね。見に行くから」

「はい、頑張ります」

素直に、嬉しいと思っていることを意外に思うこともなく、未来は笑顔でそう答えた。

帰り道、夕日が徐々に傾いて行くのを眺めながら、未来はようやく、教室まで行ったわけを思い出していた。カバンの中に、白いタオル。でも、また、放課後の教室に行けばいい。そう思って、再び歩き出した。

「未来は相変わらず日焼けしないな、」

登校日、久々に会った俊介は、真っ黒に日焼けしている。

「何、その色。海？」

「そうだよ。うっかり寝ちゃってさ」

そう言って顔と背中の中の色の差を見せた。部活のメンバー以外の友達と話すのは久しぶりで、新鮮な気分だ。

「そっぴや、週末、コンクールだろ？練習頑張ってる？」

「うん。バッチリだよ。もういつでも大丈夫って感じ」

「すごい自信だな。金賞でも取るつもりか？」

からかうように言いながら、未来の後ろの席に座り、今度は小声で、

「おまえ、中野に一回も連絡してないだろ」

「……、」

忘れていたわけではないが、最近は部活の練習がきついし、先月は夏バテでそれどころではなかった。言い訳しようかとも思ったが、「ごめん、コンクールが終わったら、連絡する」

「言っとくけど、あいつ、相当おまえのこと好きみたいだぜ」

その一言が、未来を新たに憂鬱にさせた。未来は同時に幾つものことが出来ない性分で、コンクールに向けて全力を注いでいる今は、ただそれだけに集中したかった。頭の中が一つのことと占められてしまうと、他を入れる余地がない。逆に、本当に好きな人が出来た時には、その人のことで頭が一杯になってしまうのかも知れないが、今の未来にはそうなることが想像もつかなかった。

快晴、とはこの空のことを言うんだな、と思えるほど、真っ青な空だ。未来にとって、一年で最も重要と言っても過言ではないこの日、天気が良いと何だか結果まで良いような気がして、嬉しくなる。蝉の大合唱も、今日だけは未来を応援してくれているようで、頼もしい。コンクールの会場に着いた未来は、もう既に着いていた部員たちを見つけて合流した。

「おはよう！いい天気で良かったな」

南の学生服姿が久しぶりで、何だか可笑しい。制服のない未来た

ちは、少しでも統一感を出すため、女子は上が白いブラウス、下が黒いスカートかパンツで揃え、男子は中学のときの制服を着るか、父親のスーツを借りるかしている。未来も中学のときのブレザーの下と、白いシャツを着ていた。

「楽器の調子はどうだ？ちゃんと磨いてきたか？」

顧問の河合が、未来たちに声をかけた。河合は有名な音大を出ていて、色々な大会で優勝した経験を持っている。前に勤めていた高校も、河合が顧問になって一気に実力をつけたと聞いた。事実、この高校も、河合が赴任してから三年ほどになるが、かなり上位の成績をおさめるようになってきている。今年は圧倒的に女子部員が多く、どうしても同じ男という理由だけで男子部員に目をかける河合に、未来は父親に似たところを感じて好感を持っていた。父と娘ほどの差があっても、女性というのは扱いづらいようだ。

屋外で軽く練習をし、いよいよ本番が近づくと、毎回のことながら心臓が痛いほど緊張してくる。特に、優勝候補と言われる学校が、非の打ち所のない演奏をするのを聴くと尚更だった。だから、余計な緊張を避けるため、未来は意識的に、他の演奏は聴かないようにしていた。コンクールが終わったら、録音したものが配られるから、あとで聴けばいい。

暗い舞台裏で楽器を暖めながら、次に迫った出番を待っていた。あらかじめくじ引きで決められた順に、課題曲、自由曲の二曲を続けて演奏し、その都度、審査員が手元の用紙に評価を書き込んでゆく。今、舞台では前の高校の自由曲が演奏されていた。その演奏の素晴らしさに、皆、明らかに緊張していて、小声で話すこともない。未来は無心になろうと、最後まで苦労した部分を指だけで何度も練習していた。トランペットは音が通るため、特に高音部では些細なミスも許されない。

やがて前の学校の演奏が終わり、割れんばかりの拍手がおこる中、河合が無言で合図をした。指揮者の河合を除く全員が、決められた通りの順序で舞台に出て行く。客席が暗くて、来ているはずの家族

や俊介たちの顔が見えなかったが、自分の正面にいと決めて、未来はお辞儀をした。

「よく頑張ったな。素晴らしかったよ」

演奏が無事終わり、練習の成果以上のものが出せた実感に、女子部員たちの何人かはもう泣いている。特に三年生はこれで引退するため、思い入れは深かったはずだ。未来ももらい泣きしそうだったので、そそくさと外に出て、日陰のベンチで楽器の手入れを始めた。昨夜、念入りに磨いたトランペットを、もう一度綺麗に拭いて、そつと抱きしめる。それでようやく緊張の糸が切れ、未来は大きく息を吐き出した。

「お疲れ様です」

聞き覚えのある声に顔を上げると、そこに沙耶と俊介たちの姿。

「皆がいるとここにいないから、探したぞ」

「ああ、ごめん」

「結果発表、楽しみだな。拍手が何処よりも一番、大きかったよ」

「そうだね、」

言いながら、涙ぐんでしまう。だから、人のいないところに来たのに。友人に涙を見せなくなかった未来は、俯いて唇を噛んだ。

全ての学校が金、銀、銅のどれかに振り分けられるが、割合は決まっておらず、金賞が一枚だけの年もあれば十校の年もある。今年、審査が厳しかったのか、金賞が二校、銀賞が八校で、未来たちは、銀賞。毎年、十位までは発表されるのだが、なんと未来たちは三位だった。

「嘘でしょ、」

「ホントに三位？」

アナウンスが流れても半信半疑だったが、それが本当だと解った瞬間、皆で抱き合って喜んだ。自然に溢れる涙に、未来は南に抱きついて泣いた。南も泣いているようで、未来を抱きしめる腕が震えている。周りには微塵も見せなかったが、部長として部員たちをま

とめ、ここまで導くのは、大変だっただろう。その苦勞を思うと、ますます涙が止まらなかった。

「本当は金賞が取りたかったろうけど、そんな贅沢はもっと練習してから言えよ」

表彰式が終わり、ロビーに集まっても泣き続ける部員たちだったが、その河合の言葉によろやく皆笑った。そこに担任の野口をはじめ、他の教師たちが姿を見せ、見知った顔におめでとう、と声をかける。野口は未来を見つけるなり、嬉しそうな顔でやってきた。

「おい、すごいじゃないか。初めての三位入賞だぞ」

「はい、ありがとうございます」

「これくらい、勉強も頑張るといいんだけどな」

冗談にしても、聞きたくない台詞を吐いて、他の教師たちと談笑を始める。また余計なことを言われる前に退散しようと、大事なケースを抱えて集団に踵を返すと、そこに城戸の姿があった。

「おめでとう。良かったね。すごく上手だったよ」

「……ありがとうございます、」

「頑張ったかいがあったね」

未来は嬉しくてまた涙が出そうになり、無言で頷いた。みんなで力を合わせてここまで辿り着いた瞬間を、見ていてくれる人がいるということ。今まではそんな有り難さを感じたこともなかったが、今年は何故か言いようもなく嬉しい。やっと、人に素直に感謝できる年齢に達したことを、未来は感じていた。遠くから誰かに呼ばれて、じゃあ、またね、と未来の肩に手をかけて城戸が立ち去ると、今度は未来を見つけた家族が駆け寄ってきた。

「ちょっと、今のが城戸先生？想像してたよりずっとイケメンじゃない！」

「ごあいさつしてくるわ、」

そう言っただけにも城戸の後を追っていきそうな母親を、慌てて止める。

「やめるよ、もう」

「あんだ、どれだけお世話になったと思ってるの？」

「先生も色々とお忙しいだろうから、また今度でいいじゃないかなあ、未来」

父親のその言葉に、未来も大きく頷いて、名残惜しそうな女たちを引きずるように連れて外に出た。が、心がまだ、帰りたくないと言っている。

「俺、友達と約束あるから、先帰って」

特に誰とも約束をしていたわけではなかったが、未来はそう言っただけで家族と別れた。楽器だけは自分で持っていたくて、胸に抱いたまま、陽射しを避けてもう一度会場の敷地内に戻る。風通しの良い日陰にベンチを見つけ、未来は腰を下ろした。何だか、人生で一番幸せな瞬間を、もう味わってしまった気がして、少し不安になる。幸せすぎる出来事のためには、悲劇が待っている、そんなドラマのよきな展開が、自分にも起きる気がして。

きつかった練習は一旦休憩になった。あとはもう一つ、三年生が抜けたあと、秋に地元主催の小さなコンクールがあるため、それに向けての練習カリキュラムに切り替わる。自由曲は何になるんだろう、と楽器を片付けながら考えていた未来は、ふと杏奈が何やら大切そうに握りしめているペンが目にとまった。

「何、それ。何かのおまじない？」

他の部員も気付いたらしく、声をかける。

「そう。唯様にもらったの」

「え？マジで？なんで？なんで？」

城戸の話題になると、何処の女子も同じだ。甲高い声が音楽室に響き渡る。

「英語の授業のあと、よく質問に行くんだけどね、コンクールのこと話してて、緊張しないように何かお守りを下さいって言ったら、これをくれたの」

「ズルい！杏奈ばかり。ずっとナイシヨにしてたし、」

「言ったら願掛けにならないじゃん。きっとこのお守りのおかげで入賞できたんだよ。いつも外すGの音、バツチリ出たし」

「いいなー！私も唯様のお守り、欲しいよ！ね、誰でも喋ってくれる？優しい？」

「ダメ！ナイシヨ。私だけの唯様なんだから」

杏奈はそう言って、今までに見せたことのない表情で、そのペンを抱きしめた。

「バカな奴らだな。城戸先生、彼女いるのに」

女子たちの大声に呆れた様子で、私物の整理に来ていた南が言った。本人たちには聞こえていないが、未来もそれには驚いて、

「え、マジですか？」

「マジだよ。保健室の木村先生、お似合いだろ？」

それを聞いた未来は、あの試験の日の偶然が、そうでなかったことに、がっかりしている自分に気付いて戸惑った。あんまり人に喋るなよ、と言う南の言葉に曖昧に頷き、音楽室を出る。

「おかえり、未来。お腹すいたでしょ」

気がついたら、帰宅していた。下駄箱で靴をかえた記憶も、いつもの角を曲がった記憶もない。食卓には家族が揃っていて、未来を待っていたようだった。

「また痩せてきたみたいだから、いっぱい食べなきゃね」

頷いたものの、食欲がなく、家族が心配そうに未来を覗き込む。

「また夏バテ？」

「今朝まであんなに元気だったのに」

「病院で点滴するか？元気になるぞ？」

口々に言われて責められているような気分になった未来は、食事もせずに階段を駆け上がって部屋に閉じこもった。

「……なんで、」

解らない。未来は自分が解らなかった。ざわざわと胸の中が不快な音を立てる原因が、未来にはまだ、解らなかった。

年下のコイビト

? 年下のコイビト

コンクールが終わって初めての週末、部活も休みで、未来は久々に二度寝の幸せを味わっていた。部屋の中は相変わらず暑いが、眠ってしまえば気にならない。小鳥のさえずりや、近所でキャッチボールをする子供たちの声を聞きながら、ウトウトと微睡む。時々、庭掃除をしているらしい母親が、こら、ミミ！と、悪戯をする犬を叱る声が聞こえた。夢なのか現実なのか、その狭間で、未来は休日のゆるやかな時間の流れを堪能していた。が、そんな幸せも、長くは続かなかった。インターホンが鳴り、母親の甲高い声が聞こえてくる。やがて階段の下から未来を呼ぶ声。それでも聞こえないフリをしていると、部屋の扉をノックする音がした。

「……もう、なんだよ？」

遠慮がちに開いた扉から入ってきたのは、沙耶だった。一瞬、何が起こったのか解らず、呆然とその顔を見ていると、

「こんにちは。遊びに来ちゃいました」

「……、」

「私、ミミちゃんと遊んでるから、起きたら来て下さいね」

そう言って、沙耶はすぐに部屋を出て行った。未来の裸同然の格好を、見ていられなかったのかも知れない。まだ寝惚けていたが、仕方なく着替えた未来は、言われた通りに庭に出た。陽射しの眩しさに瞼を刺され、否応無しに目が覚める。植木に水をやっていたらしく、あちこちから雫が滴っていた。日なたと日陰の強いコントラストで、瞬きする視界に幾つも残像が残るのを気にしながら、ミミと戯れる沙耶の側に寄る。それだけで肌がジリジリと焼けた。

「暑くない？」

「平気です。この服、涼しいんですよ？」

先日は試合のあとでジャージ姿だったが、今日は女の子らしいレスをあしらった花柄のワンピースを着ている。肩が大きく開いていて、すごく肌を露出しているように思えた。ミミは遠慮なく、その腕に抱かれて嬉しそうだ。

「最近元気がないって、お母さんが言っていましたけど、何かあったんですか？」

どうしてうちの母親は、ペラペラと何でも喋るんだろう、と呆れながら、

「別に何も無いよ。暑くてバテてるだけ。そうだ、プールにでも行く？」

咄嗟に思いついて言ってみたら、沙耶は嬉しそうに頷いた。

夏休みとあって、プールはすごい人だった。泳げない沙耶は、浮き輪で楽しそうに浮かんでいる。俊介が言った通り、胸がはちきれそうに大きくて、目のやり場に困った未来は、水の中に潜って、人の隙間を縫って泳いだ。徐々に思い切り体を動かすと、何だかスッキリする。日頃のモヤモヤが、発散できる気がした。最近、特に溜め息が多いと自分でも解っている。溜め息をつくると幸せが逃げるよ、というも母親が咎めた。

泳ぎ疲れた未来は、背中で浮かんで、目を閉じた。それでも眩しい太陽に手をかざし、ゆったりと漂ってみる。その浮遊感に、いつか見た夢を思い出した。フワリ、とそこにはないはずの香りがして、ハッとする。……どうして？

「先輩、私もそれ、やってみたいな」

いつの間にか、沙耶が側に来ていた。浮き輪を外して、浮かぼうとしている。未来はすぐに沈みそうになる沙耶の背中に手を添え、浮かばせてやった。

「気持ちいい、」

沙耶は目を閉じ、さっきまで未来がしていたのと同じように手を

顔の上にかざした。気持ち良さそうに、未来の腕に体を委ねて浮かんでいる。……と思つたら、急に未来の首に抱きついた。

「先輩、どうして全然連絡くれないんですか？寂しくて、ご飯も食べれなくて、痩せちゃったんだから」

沙耶の胸が、体に当たって、未来はどうしていいか解らなくなつた。そのままプールサイドまで沙耶を抱いて行き、座らせる。

「私のこと、キライですか？」

目を潤ませて、聞いてくる。未来は首を横に振つた。

「キライだったら一緒にこんなところ、来ないよ」

「ハツキリ言ってくれなきゃ、わかんない、」

泣かれて、思わず、言つてしまった。

「好きだよ、だから泣くなつて、」

「ホントですか？」

未来が頷くと、沙耶は嬉しそうにもう一度、未来に抱きついた。

大人しそうな感じと、大胆さのギャップが、未来を驚かせる。意外なことだったが、そんな沙耶との時間が、不可解に曇つた未来の心を、癒した。

二学期が始まり、まだ夏バテのたるさが残る体に、残暑は容赦なく厳しかった。それに進学校というところは、とにかく試験が多い暇さえあれば、何とか模試だの、何とか試験だのと名前を変えては生徒たちを苦しめる。当然、部活ばかりやっている未来には、その恐怖と言つたらない。自業自得なのにもかかわらず、平均点を大きく下回る答案用紙に、思い切り傷ついてしまうのだった。

そんな試験週間が終わつた日のホームルームで、そろそろ志望校を決めなさいと担任が言い出した。とつくに進路を決めている生徒も多いが、未来のように、何も考えていない生徒もまた多い。そういう大きな決断を迫られることに慣れなくて、すごく負担を感じる。「未来はどうすんの？当然理系だよな」

後ろから俊介が声をかける。

「うん……」

「私立ならさ、相当いいところ、狙えるんじゃないの？」

私立とか国立とか、そういう区別も、未来にはまだ曖昧だった。

のんびりした自分の性格が、時々イヤになる。今はまだ考えたくない、矛先を俊介に向けた。

「……俊介は？決めたの？」

「うーん。英文科にしようかな、とは思ってるけどね。将来、英語ができるのとはできないのでは、全然違ってるって言うし。あとは偏差値次第かな」

想像した以上に、しっかりした答えだった。急に不安になり、未来は黙り込んでしまう。止めどなくざわつきだした生徒たちを静まらせるために、野口が両手を叩き、

「週明けのホームルームで、志望校を三つ、書いてもらうから、そのつもりでな」

そう言って締めた。

どうして将来のことが、何も見えないんだろう。部活を終えて帰宅した未来は、自分の部屋の机に向かい、パソコンの画面を眺めていたが、すぐに閉じた。何を検索すればいいのかさえ、解らなかつたから。誰かに相談したくても、相談する内容すら、解らない。

自分の不甲斐なさに傷ついて机に伏せていると、携帯が鳴った。

沙耶からだ。

「先輩、……助けて、」

予測しなかった台詞だった。

「痴漢、」

その瞬間、未来は階段を駆け下りて、外に飛び出した。マウンテンバイクで、沙耶が言った場所まで全力で向かったが、姿が見えなくて、今度は走って辺りを探すと、駅裏の薄暗い自転車置き場に、座り込んでいる沙耶の姿が見えた。

「沙耶」

駆け寄ると、沙耶は未来に縋り付くようにして泣いた。Ｔシャツの胸元が大きく破れて、下着が見えている。未来は自分でも信じられないほどの怒りが込み上げるのを感じた。

「誰だよ？誰にやられた？」

何も言わず、泣きながら首を横に振る。冷静さを失いかけていたが、二人を訝し気に見ている通行人に気付き、自分の体で沙耶の体を隠した。何をされたのか聞こうとして思いとどまり、自分のシャツを脱いで、破れた服の上から着せる。小さく震えているのが解った。

「……もう大丈夫だから」

未来の言葉に頷き、沙耶はようやく立ち上がった。肘や、ショートパンツから出た足に、数カ所血が滲んでいる。未来は沙耶を近くの公園へ連れて行き、水飲み場で傷口を洗ってやった。

「家で消毒しよう。ばい菌が入るといけないから」

「でも、」

「大丈夫。誰にも言わないよ」

その言葉に頷いた沙耶を連れ、未来は帰宅した。声を出さないように沙耶に合図し、そっと自分の部屋に入る。救急箱を取りに階段を下りると、幸い母親は入浴中らしく、浴室から鼻歌が聞こえていた。

沙耶の傷口を消毒してやり、クローゼットから自分の新しいＴシャツを出して渡すと、未来は部屋を出た。隣の部屋の瑠末もまだ塾から帰っていないようで、ホッとする。扉に背を向けて着替えが終わるのを待っていると、やがて中から扉が開いた。

「ありがとうございます。また、洗って返します」

「家まで送るよ、」

未来はそう言って、そつと階段を降り、再び外に出た。沙耶の家は、一駅向こうの、住宅街にある。中学までは未来と同じ町内に住んでいたが、新しく家を建てて引っ越したと言った。並んで駅までの道のりを歩くうち、二人は無言になっていく。切符を買い、普通

列車に乗ると、あっという間に隣の駅に着いた。この近くに親戚の家があり、幼い頃に訪れた時はもっと遠いと思っていたが、未来は自分の成長を意外なところで感じた。

「……もしかして、うちに来るところだった？」

ふと気付いて、未来は尋ねた。

「はい。塾が終わって帰る途中、何だかすごく先輩に会いたくなかったから」

未来はそこが沙耶の自宅の前にもかかわらず、沙耶を抱きしめていた。思ったことを素直に口にするのは、簡単なようで難しい。今ようやく沙耶の真剣な気持ちを受け取れた気がした。

「ごめんな。今度から、駅まで迎えに行くから。いつでも電話して、」

「……、」

沙耶が未来の背中に腕を回し、ギュッと抱きついて、頷く。体が離れ、見つめ合った瞬間、二人はキスしていた。近所の人を通りかかったが、それを気にすることもなく。間違いなく、未来は沙耶に惹かれ始めていた。

「未来、聞いたよ」

「……何を？」

「中野のこと、」

ニヤニヤして、それだけで言わんとすることが解った。

「おまえんとこの部活は、そんなことまで報告させるのかよ？」

「違うよ、嬉しそうに、あいつのほうから報告してきたんだよ。先輩とキスしちゃった！って」

「声がデカい、」

慌てて俊介を制した。

「付き合うんだろ？」

未来は黙って頷く。純粹に、愛おしいと感じた。初めて、誰かを守ってやりたいと思った。それは未来にとって、大きな変化だった。

ただ、ショックだったのは、一年生の沙耶でさえ、進路をもう決めていたこと。動物が好きで、獣医になるのだと言う。そのために、今から一生懸命、勉強しているのだと。未来は取りあえず、三つの志望校と学部を書いては来たものの、当然、本当に行きたい大学ではなかった。

数日後、担任の野口に呼び出された未来は、用件が何であるか察した上で、職員室のドアをノックした。

「失礼します、」

やや小さめの声で挨拶をし、中に入った。待ち構えていたという表情の野口が未来に向かって手招きをしている。

「部活があるだろうから、手短に済ませよう。会議室、使っぞ」

近くの教師たちにそう言っつて、野口は未来を伴って会議室に入った。二人で使うには広すぎる部屋で、慣れない椅子に座らされ、ビクビクしていると、野口が椅子を軋ませて腰を下ろす。おもむろに、「森下、数学のオリンピックくつて知ってるか？」

「え？」

想像していた内容と、あまりにもかけ離れていて、未来は思わず聞き返した。

「来年の一月に予選があるんだけど、出てみないか？」

「……、」

「おまえの数学の成績は素晴らしいよ。いつも確実に、学年で十位以内に入る。この成績は、間違いなく全国レベルでも通用するはずだ」

野口は、呆気にとられている未来には構わず、続けた。

「そこで、数学の成績が学年十位以内の二年生の中から何人か選んでその大会に出させようと思ったんだが、それぞれ志望校がすでに決まっつて、数学だけを勉強してられないそうなんだよ。……何が言いたいか、解るよな？」

未来はようやく、話の趣旨を理解した。数学オリンピックに出るか出ないかはともかく、数学の成績上位者で、志望校が決まっつてい

ない唯一の生徒が自分で、それだけの理由で白羽の矢が立ったということだ。

「おまえが書いてきた志望校は、ハッキリ言って、デタラメだろ？なにがやりたいか、まだ解ってないやつの典型だよ。だから、ちょっとでも手助けをと思ってさ」

その日の練習は、全く身が入らなかった。もうすぐ秋のコンクールの練習が本格的に始まるというのに、音もイマイチで、納得がいかない。何もかも、進路を決められない自分のせいだと解っているだけに、悔しいを通り越して悲しくなった。数学の成績を褒められても、その優越感より、他が何もできない劣等感のほうがはるかに勝って、素直に喜べない。三年生が抜けて、いつも隣にいた南がいなくなつた寂しさも、未来にとつては大きなダメージだった。トランプのリーダーは未来に替わり、自分でも、前任者とは比べ物にならないほど頼りなく思える。杏奈はそんな未来の不安を感じ取ったのか、何でも手伝うからね、と、いつものように柔らかい口調で言った。

「先輩、一緒に帰ろ」

校門の外で、沙耶が未来を待っていた。部活のジャージ姿に、ホツとする。沙耶の私服を学校で見たことはないが、ちょっと露出が多すぎる気がする。

「友達は？」

「先に帰りました。邪魔しちゃ悪いから、って」

「そうなんだ。……あのさ、別に、敬語じゃなくていいよ」

未だに敬語で話す沙耶にそう言っただけ、急な下り坂を歩き出す。学校から駅までは、ずっと下りだ。未来の自宅へ曲がる角を通り過ぎようとした時、

「あ、ここまでで大丈夫です」

「駅まで送るよ」

「でも、」

「いいから、」

未来は半ば強引に、沙耶の手を引っ張った。沙耶は再び隣に並び、嬉しそうに未来の顔を覗き込む。

「心配？」

「心配に決まってるだろ、」

「優しい、」

先日あんなことがあったのに、沙耶はもうケロツとした様子だ。その切り替えの早さは見習いたいと思ったが、ちよつと呆れてしまふ。もしかしたら、幼い見た目よりずっと強いのかも知れない。駅で沙耶を見送り、今度は上り坂になった道を戻る途中、菜々子の姿を見かけた。未来に気付いているのかは解らないが、足早に自宅のほうへと向かっている。未来は、歩く速度を緩めた。

もう一つの気持ち

? もう一つの気持ち

色々考えて、少しは真面目に勉強しようと思った未来は、どの進路にもついて回るであろう、英語から始めることにした。俊介が言ったように、英語の重要性は解るつもりだし、自分の英語力の低さも、イヤというほど解っていたから。集中力のなさも改善する目的で、何かと誘惑の多い自宅ではなく、学校でやると決めた未来は、放課後、部活が終わってから、音楽室に残って教科書とノートを広げた。単語の意味を確認しながら、知っている単語も知らない単語も全て、書き写すのだ。英語が得意な俊介が、まずは単語だよ、とよく言っている。それが本当なら、次の試験で点数が上がるはずだ。未来は、まっさらなノートに、教科書の単語を覚えるまでと決めて、淡々と書いていった。

この場所を選んだのは正解だったようで、気がつくとは外はもう真つ暗だった。ふと電気をつけた覚えがないのに明るいことに気付いて辺りを見回すと、ピアノの椅子に、城戸の姿があった。

「やっと気付いたね」

可笑しそうに言って、未来の側に歩み寄った。フワリ、とあの香水の香りがする。いつからそこにいたのか、素の自分を見られてしまったことが、恥ずかしくなった。城戸とはコンクールのあとに話したきりで、そういえば、まだタオルも返していない。

「この鍵だけ、戻ってなかったから」

この場所に来た理由を言って、まだ勉強する?と尋ねた。未来は黙って首を横に振り、ノートを置く。教室の両側にある窓を閉めるのを手伝い、いつもの癖で、音楽室の内側から鍵をかけ、準備室に入った。

「森下くんの楽器は、どれ？」

打楽器の隙間を縫って出口に向かおうとした時、城戸が足を止めて尋ねた。

「トランペット、だよね」

自分のパートを知っていたことに驚き、未来は頷きながら棚の上の黒いケースを取り出した。母親が喋ったのか、それともコンクールのステージで見えたのだろうかと思像しながら留め具を外し、開けて見せる。準備室の暗い蛍光灯の光にも輝いて、誘われたような気分になり、城戸がいることも忘れてその楽器を手に取った。

「大事にしてるんだね」

そう言われて何だか恥ずかしくなり、笑って俯いた未来だったが、楽器を知るには手に取るのが一番だと思って、トランペットを城戸に差し出した。城戸は少し躊躇って、壊れ物を扱うように両手で受け取り、未来に持ち方を習って、ピストンを押してみる。その指が細長く、まるで女性の手のようだと、未来は思った。

「この三つだけで、全部の音階を吹くの？」

三つのピストンの組み合わせと、唇と息の力加減で音階と高さを調整することを教えると、城戸は感心したように、自分には無理だと言って笑った。

「ピアノは、習ってたんだけどね。管楽器は、さっぱりだよ」

「……ピアノ、弾けるんですか？」

「難しい曲じゃなければ、」

城戸がそう言ったので、未来はもう一度音楽室に戻るよう促し、グランドピアノの蓋を開けた。

「何か、弾いて下さい」

その言葉に驚いたような顔をしたが、こないだ、すごい演奏を聴かせてもらったから、と言って鍵盤に向かった。何を弾こうか、少し考え、一瞬未来のほうを見て、おもむろに演奏を始めた。

穏やかなメロディが、誰もいない校舎に響く。未来はピアノに向かう城戸の後ろ姿を見つめながら、その心地良い音の重なりを聴い

ていた。弾かれた弦から生まれた音は、まるで命を吹き込まれたかのように、弾き手の思いを乗せて舞う。音の粒子が体の表面から全身に浸透し、未来は心が大きく動くのを感じていた。ふと見ると、鏡と化した黒いピアノの譜面台に、城戸の顔が映っていて、不意にその鏡越しに目が合う。未来は、暗示にかかったように、視線を逸らすことができなかった。

「トロイメライ、っていう曲だよ。森下くんを見てて、この曲が浮かんだから」

弾き終えて、そっとピアノの蓋を閉じた城戸が言った。姉の瑠末がいつもガタン、と音を立てていたことと比べると、この教師の育ちの良さが知れる。

「子供の頃、これを習ったときは、全然うまく弾けなくて、こんな簡単な曲なのについて落ち込んだけど、……やっと、弾けるようになった」

音楽は、技術ももちろんだが、その楽曲自体を解釈できるかどうかも大きな課題だ。未来はふと、目の前の大人と自分の幼さを比べてみる。今度こそ、準備室の鍵を締め、職員室と、下駄箱への分かれ道で、

「懐かしい曲を思い出させてくれて、ありがとう」

城戸は穏やかな声でそう言っ、気をつけてね、と未来を見送った。

帰宅した未来は、真っ先に部屋のパソコンの電源を入れた。トロイメライは、「夢」、「夢見心地」と訳される。「子供の情景」という無邪気な楽曲の中に属しながら、大人が子供の頃を懐かしく思っ、て見る夢だという解釈がされているものもあった。未来はさっきのメロディに、子供の夢というよりはもっと深く、強い思いを感じた。それは恐らく、城戸自身の心の中に秘められた感情が表れているのだろう。穏やかな態度とは裏腹に、行き場のない情熱を抱えているようにも思える。彼にこの曲を思い出させた訳を、知りたいような気もしたが、今はまだ、その余韻だけで充分だと思えた。

新体制になった未来たちの吹奏楽部は、秋のコンクールに向けての本格的な練習の真っ最中だった。一年生は、この大会が事実上のデビューになる。先輩、先輩、と声をかけてくる一年の野島マキに去年までの自分の姿を重ねながら、三年生が抜けた寂しさが未だに去って行かないことに、自分の幼さを反省する日々。しかも、新部長は菜々子に決まり、練習が厳しくなりそうな予感に、もう次の夏のコンクールの心配をしてしまう。夏バテだと休むことなど、許されそうもなく、やっぱり南を思い出して溜め息をついた。

計算外だったのは、マキが沙耶と同じクラスですごく仲が良いということ。周りが聞いていてもお構いなしで、未来と沙耶の関係を喋った。

「ね、沙耶って、超巨乳でしょ？こないだ触ったら、すっごく柔らかくて、ドキドキしちゃいました」

「……そういうことは、小さな声で言つてよ」

「沢木先輩に聞かれるから？」

図星。沢木先輩というのは菜々子のことだ。どういうわけか、マキは未来と菜々子が以前付き合っていたことを知っている。マキのおしゃべりのせいで、未来と沙耶の関係は周知の事実になり、同級生のからかいのネタになりつつあるが、菜々子だけは聞いて聞かぬフリをしている。それが解るだけに、毎日頭が痛かった。

「もう、Hしたんですか？」

「……、」

一応、小声で未来の耳元に囁いた。隣の杏奈には聞こえたようで大きく吹き出す。

「マキちゃん、未来くんが困ってるから、その話はまた今度ね」

「はい」

つまらなそうに言って、ようやく自分の練習を始めた。

季節は徐々に秋らしくなり、昼間の暑さも夕方には何処かに消え

る。暑いのが何より苦手な未来は、ようやく夏が去って行くことに、喜びを感じていた。秋は、未来が一番好きな季節だ。空も、風も澄んで、その透明感に、心までスツキリする。

英語の勉強を終え、外に出た未来は、まだ紺色の空を仰いだ。鍵が全て揃わないと、当番の教師は帰れないということを知った未来は、あまり遅くまで残らず、まだ他にも生徒が残っているうちに鍵を返して帰るようにしていた。職員の中で最も若い城戸は、必然的にその役目を押し付けられるわけで、たった一人の生徒の居残りに付き合わせるのも気の毒だ。

学校からの坂を下り、自宅が近づくと、何やら賑やかな声が聞こえてくる。どうやら、沙耶が来ているようだった。

「ただいま、」

声をかけると、庭のほうから、おかえりなさい、と沙耶の声。ミミと遊んでいるらしい。未来は一旦部屋に荷物を置き、リビングから庭に出た。キッチンから母親が、

「沙耶ちゃん、うちでご飯食べて行く？お母さん、もう準備しちゃうってるかしら」

「多分、もう作ってると思うから、今日は帰ります」

母親に聞こえるように、大きな声で答える。

「あんたのこと、ずっと待っててくれたのよ？最近遅いけど、こんな時間まで部活？」

「違うよ、ちよつと、……用事」

残って勉強していることは、言いたくない。それ以上の追求を逃れるため、未来はミミの首輪にリードをつけ、散歩がてら沙耶を駅まで送ることにした。

「ミミちゃんは、先輩のことが一番好きみたい」

「そんなこと、解るの？」

「解りますよ。多分、先輩があその角を曲がったあたりから、すつごくソワソワしだして、もう私のことなんて見向きもしないんだもん」

話の内容が解るのか、ミミは頻繁に振り返り、嬉しそうに未来のほうを見る。

「ミミちゃんが男の子で良かった」

そう言っつて、駅の手前の公園に入るように促す。沙耶がベンチに座ったので、未来はミミをブランコの柵につないで隣に並んだ。

「先輩と、キスしたくて待ってたの」

平気でそんなことを口にする沙耶と、マキが友達なのは納得だった。

「先輩は、私とキスしたいって思わない？」

急に泣きそうな顔になって、俯く。未来は言葉より、沙耶を抱き寄せて、唇を重ねた。離れようとすると、沙耶がそれを許さず、何度も、何度もキスをする。誰かに見られているかも知れない、と思うほど、興奮するのを感じた。沙耶は未来を、大胆にさせる何かを持っている。それとも、大胆さは元から未来の中にあっただろうか。どちらにしても、未来はいつも沙耶に会うたびに変わる自分を感じていた。

駅の改札を抜けようとして、沙耶が思い出したように未来の側に戻ってくる。どうしたのかと思っていると、

「今度は、Hしようね」

そう囁いて、おやすみなさい、と手を振った。年下の彼女にリードされ始めていることに気付いて、小さく息を吐き、

「ミミ、帰るぞ、」

せめて犬にだけは好きにされまいと、厳しく声をかけた。

音楽室のいつもの場所にいるのに、少し前までの自分とは何かが確実に違う。三年生が抜けた寂しさに、ようやく慣れたから？それとも、心が成長する時期だから？その答えを知りたくて、人見慣れた音楽室を見渡してみた。人数が減って、少しだけ、広くなった教室。見えなくなった景色は不思議ともう思い出せなくて、そこにまた、後輩たちが新しい景色を作っている。今までは肩身の狭い思い

をしていた一年生が、羽根を伸ばしているようにも見えて可笑しくなった。少し前までの未来がそうだったように、今後輩が、自分を頼りに思ってくれているのを肌で感じながら、1stと書かれた自分の楽譜を見つめた。この楽譜を手にするのは、間違いなく技術が一番優れている証拠。自覚はなくても、顧問の河合が未来を南のポジションに選んだことは、自信を持って良いと太鼓判を押されたことと同じだ。ミスも少なく、まるやかで優しい杏奈の音が一番だと思っていたが、意外にも自分が選ばれて、嬉しさよりも戸惑いのほうが勝っている。

それに最近、時間の流れが急に、早くなった気がする。ついこの間までは、自分の中にある時計よりも実際の時の流れが遅すぎて、苛立ちすら感じていた。しかし今、その速度は逆転し、時々置いていかれそうになって一生懸命に走った。足がもつれて転びそうになるたび、立ち止まっては汗を拭う、そんな毎日だった。

「今日ね、唯様がね、……」

誰かの声が聞こえた。見ると、前に並んだホルンの二人が、授業中に起こったことを、嬉しそうに話している。

「なんか、唯様の授業だけ、終わるのすごく早いんだけど」

「そうそう、古文とか日本史なんて、超長いのよね、あつという間に終わっちゃうよね」

「私なんて、英語好きになっちゃったよ」

思わずその会話に聞き入っていた未来を、マキがつついた。

「先輩。何ボーツとしてるんですか？ここのところ、どうやって吹くか、教えて下さい、」

「ああ、ごめん、」

未来は席を立ち、マキの側に立って丁寧に教えた。マキは入部した時は全く楽譜が読めず、一からの勉強だったが、最近はやほど複雑なもの以外は自分で解読できるまでに成長した。その説明の途中、何度も未来の顔を見ては、可笑しそうに笑う。

「聞いてんの？」

「優しいですね。沙耶にはもっと優しいんですか？」

「……、」

二人のやり取りを聞いて、杏奈が笑っている。助けなくても良さそうなものだと思しながら、自分の椅子に戻って溜め息をつく。こうやって、部活ではマキに、教室では俊介に沙耶とのことをからかわれ、いい加減にしてほしいと内心思っている未来だったが、本当の悩みは、もっと別のところにあった。沙耶を愛おしく思う気持ちは嘘ではない。先輩、といつも未来を慕ってくる姿を無性に可愛いと思える。にもかかわらず、未来の中には、姉に甘えていた頃の幼さが抜けきらないのか、誰かに甘えたい、守られたいと願う気持ちも同時に存在し、どちらが本当の自分なのか解らずに戸惑っていた。……その『誰か』、というのが、もう特定の人物になりつつあるということも。

「先輩、ここは？どうやればいいんですか？」

またマキに呼ばれ、席を立った未来は、今日も答えが出ないまま、慌ただしい一日を終えた。

優しい水色の空を、レースのような雲がゆつくりと流れている。通学路のあちこちで金木犀の香りが漂い、途端に秋らしくなった風が上空から下りて来て頬を撫でた。不意にこみ上げる切なさや、どこから来るものか、考えるほどに切なくなった。初秋の風は毎年、目には見えない、「何か」を運んでくる。その「何か」は一瞬で心の奥に浸透し、直接精神を揺さぶった。生まれるよりもっと前の記憶を思い出させるような、そんな力で。

秋のコンクールの成績は6位と、パツとしないものだったが、毎年新人が混じるこの時期、どの学校も演奏にキレがない。全ては夏に向けて気持を高めているため、それが終わって気が抜けてしまうのだ。顧問の河合もそれは承知していて、新人を場慣れさせるという点を重視しているようだった。夏からずっと忙しかった吹奏

楽部も、それでようやく一段落して、流行りの歌謡曲や秋祭りを使うマーチなどを和気あいあいと練習する日々。焦りや不安から解放されて純粹に楽器に触れている時間は、何よりも幸せだと感じた。

「未来、それで、中野とはどうなんだよ？」

昼休み、ベランダで物思いに耽っていた未来に、邪魔が入った。

俊介が、未来の隣に並ぶ。

「どうって？」

「キスの次にやることは決まってるんだろ？」

何処へ行ってもこの話題。気が休まるときがないな、と溜め息をついた未来だったが、あれから沙耶と、会うたびにSexをしていた。菜々子とのときは、こんなに頻繁ではなかったのに、と不思議になるほど、沙耶を見ていると興奮した。単に胸が大きいからというのもあるかも知れないが、その幼い顔立ちと体とのギャップも、未来を夢中にさせる。初めて会った時の、大人しい印象は、もう何処かへ消えていた。

「俊介はさ、彼女とどれくらいHすんの？」

逆に、聞いてみる。俊介は少なからず驚いた表情で、週1くらい、と答えた。

「体育館のマットとか、超興奮するぜ？今度やってみたら？」

それこそ誰に見られるか解らないな、と思いつながら、そういうことをやっている俊介をちょっと羨ましく感じた。

ただ、認めたくはないが、体が弱い未来は、この季節の変わり目の温度差に、毎年のように体調を崩す。秋の長雨というのか、一週間ほど雨で肌寒い日が続く、また試験週間が始まるという時になって、風邪をひいてしまった。今度はまだ、試験まで日があるため、治るには治るだろうが、次こそ勉強してからと思っていた未来には、大ダメージだった。

「もう、あんなたって子は、そんなに試験がイヤなの？」

体温計の表示を確認しながら、母親が言った。

「追試にならないように、頑張って治しなさいよ。ああ、恥ずかし

い

病人を、もうちょっといたわってくれても良さそうなものだ。未来はそんな母親を睨むと、重い体を引きずって部屋に戻り、ベッドに横になった。階段の下から、学校に電話をしている甲高い声が聞こえてきて、未来は頭から布団を被った。

父親が医者のおかげで、家に様々な薬を常備しているため、少々の風邪では病院へは行かない。ずっとそうしてきたせいで、この家の人間は皆、症状に合わせて自分で薬を選ぶ知識がついていた。本当は診察を受けなきゃダメなんだぞ？という父親の顔を思い浮かべながら薬を飲み、未来は目を閉じた。

また雨の音が強くなってきた。咳き込んで何度も目が覚め、その度に時計を見る。少しも無駄にしたくないのに、時間は無情に過ぎていった。息苦しくて、布団の中で胸を押さえて丸くなる。誰かにいたわってほしいと思つて浮かんだのが、家族でも沙耶でもなかったことに、未来はそれほど驚かなかつた。雨音を聞くと思ひ出す、甘い花の香りがする通学路。放課後の教室という、時間が止まったかのような空間での、偶然の出会い。あの日から、自分の中の、何かが変わった。何の思い入れもなかつた場所が、特別な場所に変わつていくこと。秘密の想い出が増えて行くこと。そんな密かな楽しみに支えられていることに、今初めて気付いていた。

試験の二日前、何とか風邪を治した未来は、久々に登校した。普段は皆と変わらず元気だが、風邪をひくと長引いてしまうことが、体の弱さを物語っている。そんなことは自分が一番よく解っているが、認めたくない気持ちで未来に無理をさせていた。

「もういいのか？」

心配そうに俊介が未来を覗き込む。

「もう平気。ずっと寝てたから、体が痛いよ」

「寝るのも体力がいるらしいからな」

そう言つて、未来の風邪声をからかつた。

「そういえば、中野が心配してたぞ。試験前に風邪をうつすといけないから来るなっていわれたけど、私のこと嫌いになったのかな、って」

沙耶が言いそうなことだ。未来は苦笑して、今日にでも電話するよ、と言った。

試験前には進学校らしく、部活は休みになる。授業が終わり、全員が一齐に下校するのは、この時だけだ。こんなにもたくさん生徒がいたのかと思うほど、下駄箱はごった返している。まだ本調子でない未来は、その混雑が過ぎるのを、中庭に面した廊下で待っていた。雨は上がっていたが、校舎の影にはまだ、湿気を含んだ地面が残る。中庭の中央にある、年に数度しか動かない噴水が、昨日までの雨で満たされていた。生徒たちはそれを、普段は専らベンチ代わりにして、そこで昼食をとったり本を読んだりするのに使っている。

ふと見ると、噴水の向こうの渡り廊下に、一組の男女の姿がある。女子のほうは遠目にも泣いているのが解り、気になって目を凝らすと、それは城戸と杏奈だった。杏奈が城戸を好きなのは、以前から知っているが、それは他の女子たちが唯様、と騒ぐのと同じレベルだと思っていた。しかし、今見える光景に、杏奈の気持ちがいかに上にあるかが伝わってくる。城戸は、泣いている杏奈の肩に手をかけ、何か声をかけているようだった。その穏やかな口調が聞こえてきそうだと思った瞬間、杏奈が城戸の胸に、顔を埋めた。

見ていられなくなり、未来はとくに人気のなくなつた下駄箱で靴を履き替え、足早に坂を下りる。曲がり角まで来ると、ついに駆け出し、自宅の玄関に飛び込んだ。

「未来？雨でも降って来たの？」

母親が、奥から声をかける。玄関で咳き込んでいると、タオルを持ってやって来た。

「せっかく治りかけてるんだから、無理しないのよ？」

「……、」

未来は無言で頷き、部屋への階段を上った。下から、玄関を開け

てみた母親の、雨なんて降ってないじゃない、という声が聞こえた。

試験週間が終わわり、未来は想像以上に英語の出来が良かったことに驚いていた。俊介が言ったことは本当だったようで、単語だけを馬鹿の一つ覚えのように繰り返し暗記しただけなのに、今まで暗号にしか見えなかった長文問題が、解読できるようになっていた。やればできるじゃないか、と言う教師の言葉は素直に嬉しく、未来は徐々に機嫌良く部活に向かった。しかし……。

音楽室に着くと、いつもと違うただならぬ雰囲気、未来は原因を探った。

「杏奈、辞めるなんて、急にどうしたの？」

「……勉強しなきゃいけないし。部活ばかりじゃ、志望校に行けないから」

「でも、杏奈が抜けたら、トランペットの人数が足りなくなっちゃうよ」

「……、」

杏奈は黙っている。吹奏楽部は、コンクールに出る際、人数によって小編成、中編成、大編成の三種類のどれかの部にエントリーする。未来たちは小編成で、良く言えば少数精鋭。悪く言えば、必要最低限の人数しかない。よって、一人が抜けるということは、もの凄く痛手だ。女子部員の一人が未来に気付いて、駆け寄って来た。「ねえ、杏奈が部活、辞めたいって。どうしよう？」

明らかに狼狽している様子だった。未来は杏奈がそう言い出した原因が、先日見た光景に、少なからず関係しているであろうことに気付きながら、

「杏奈、何かあった？」

「そろそろ、受験勉強を始めようと思って。塾に行くことにしたの」「……そっか。……あのさ、ちょっと二人で、話さない？」

未来は杏奈を屋上に連れ出した。明らかにいつもの笑顔が消えた杏奈は、柵に凭れてグラウンドを眺める。未来もそれに並んだ。

「ホントのこと言つてよ。受験勉強なんて、ウソだろ？」

「……、」

「杏奈が今悩んでることつてさ、部活を辞めたら解決するわけ？」
純粹に、杏奈に辞めてほしくないと思った。杏奈の音がすごく好きだし、杏奈はこれまで、どんな時も柔らかい笑顔で、部員たちを癒してくれた。その存在の大きさは、同じパートで近くにいた未来が、一番よく解っている。

「いつも皆の愚痴の聞き役で、杏奈自身の愚痴を聞いたことなかったな、つて、今気付いたよ。今更かも知れないけどさ、何でも言つてよ」

精一杯、明るく言つてみた。すると、杏奈は初めて、少し笑つた。「未来くんつて、優しいね。南先輩がいた時は、甘えん坊だなつて年下みたいにしてたけど、パートリーダーになつて、しっかりしてきたね、」

思いがけないことを言われて、未来はマジマジと杏奈の顔を見つめた。すると、突然、その目から涙が零れる。悲しみの深さを表すかのような、大粒の涙。幾つも頬を伝つて、流れ落ちた。

「私……大好きな人がいるの。でも、その人に、……私と付き合う気はないつて、……ハッキリ言われちゃつた、」

予想はしていたものの、未来は言葉に詰まつた。

「その人のことが頭から離れなくて、あんなに好きだったトランプツトが、吹けないの」

楽器に申し訳なく思ふ気持ちは、未来にも理解できた。純粹な杏奈らしいと、少し笑つて、

「解るよ。でもさ、杏奈がそんなふう悩んでる時も、杏奈のトランプツトは、黙つて見ててくれると思うよ。俺だつて、……彼女と楽器を比べるなんてできないけど、もし彼女に、どっちが好き？つて聞かれて、彼女を選んだとしても、楽器は笑つて許してくれると思ふ」

以前、菜々子に同じ質問をされて、答えられなかったことを思い

出していた。今は、どうだろう。迷わず沙耶を選ぶことができるだろうか。

「城戸先生のこと？」

思い切って尋ねた。杏奈は少し迷っていたが、黙って頷く。未来の胸が、チクツと痛んだ。

「こんなに好きになつた人、初めてなの。優しくて、いつも笑って励ましてくれて、……お守りしてくれたときは、私のこと、好きになつてくれたんじゃないかって、」

杏奈は未来に心を許したのか、あの日の城戸との会話を、泣きながら話した。彼女はいないと言ったこと、個人的に一人の生徒と親しくすることはできないと言われたこと、卒業するまで待つと言ったら、約束はできないと言われたこと。

「一人の教え子として、可愛いと思うことはあっても、それ以上はないんだって、」

真つ赤になつた目が痛々しかった。多感な年頃の女子を扱うことの難しさは、未来にも少しは解る。城戸の困った顔が目に見えかんだ。「どうしても諦められないの。だから、塾に行つて、他の学校の素敵な子を見つけたら、忘れられるんじゃないかって思ったの。……未来くんだったら、どうする？好きで好きでどうしようもないのに、諦めなきゃいけない時、」

聞かれて、未来はドキツとした。決して他人事ではない、そう言われた気がした。諦める、……最初から、それは……。

「ごめん、……やつと解つた……杏奈がどんなに辛いかつてこと、」
未来は涙を堪えきれず、俯く。自分の心の中にある、決して誰にも言えない気持ちだが、想像以上に大きかったことに、気付いてしまった。胸が、痛い。

「未来くんが泣くことないじゃん、」

未来の涙に、杏奈が驚いている。未来は慌てて涙を拭き、深呼吸した。自分の気持ちの整理もできないのに、友達の相談に乗ろうとしたことが情けなかった。

「何の解決にもならなかったね、……ホントごめん」
すると、杏奈はようやくやくいっつものように笑い、
「でも、何だか少し、スッキリしたみたい。ありがとう」
空に向かって伸びをしたあと、
「泣いたことは、黙っててあげる、」
と、からかうように言った。

彼の存在

？ 彼の存在

新しい楽譜が届き、パートリーダーの未来は、人数分の楽譜をコピーするため、職員室を訪れた。用事はそれだけではなく、まず、担任の野口に、数学オリンピックに出る決意をしたことを報告すると、

「そうか！よし！じゃあ、資料を渡すからな」

待っていたと言わんばかりに、引き出しからクリアファイルにまとめられた書類を取り出す。

「申し込み期限がギリギリなんだよ。今ここで、書いて行け」

言われるままに、野口の横の席に座り、出された書類に必要事項を書き込む。

「おまえなら絶対やってくれると思ってたよ」

いつになく嬉しそうだ。未来の口からやる気を聞きたくて、期限が迫っているにもかかわらず、待っていたらしい。

「言っとくけど、おまえの得意な微積は範囲外だからな。頭を柔らかくしておけよ」

詳しいことは、それを読んでおけ、と言って、野口は上機嫌に鼻歌を歌いながら職員室を出て行った。しばらくそのファイルの表紙に書かれた、「数学オリンピックに出てみよう」というタイトルを見つめていたが、もう一つの目的を思い出して、コピー機のある小部屋のドアを開けた。

「あ、」

思わず声を上げそうになる。そこには先客があり、城戸が授業で使うらしい資料をコピーしていた。

「もうすぐ終わるから、ちょっと待ってて」

いつもの笑顔で言った。杏奈に告白されて、悩んだりしないのだろうか、と想像してしまう。それとも、そんなことは日常茶飯事で、気にも留めていないのかも知れない。大卒で、すぐ教師になったとして、今は二年目だから、二十四歳。七つも、年上なのだ。自分の立場で考えたら、それは恋愛対象にはなり得ない差のような気がした。未来がそんなことを考えている間に、枚数を確認した城戸は、コピー機を明け渡してくれる。

「使い方、解るよね？」

未来は頷き、持って来た楽譜を順にコピーしていった。が、狭い部屋に残る香水の香りに心を乱されたのか、最後の一枚になって原紙を枚数に入れてしまっていることに気付き、もう一度最初の楽譜をセツトする。すると、そこに菜々子がやってきた。

「終わった？」

「まだ。一枚足りなかった。」

「早くしてよね」

「……」

溜め息をついて腕組みをする菜々子を、自分の母親と重ねながら、未来は再びコピー機に向かう。しかし、後ろに誰か待っていると思うと無意識に焦るのか、紙で指を切ってしまった。鋭い痛みに思わず声を上げ、未来の手を離れた楽譜が床に散らばる。

「もう、なにやってんの？ 鈍臭いわね……」

職員室中に聞こえるほどの声で、菜々子が言う。

「譜面が汚れるでしょ？ 手を洗って来たら？」

意外に深く切れてしまったらしく、指先から血が滲んで流れた。

「どうしたの？」

菜々子の大声に、城戸が慌てて戻ってくる。菜々子が未来の怪我を説明すると、

「こっちにおいで」

城戸は未来を手洗い場に連れて行き、傷口をそっと洗った。血が苦手な未来は、痛みに耐えながら、顔を背けて為されるがままにな

っている。

「結構深いね、」

職員室に置いてあった救急箱を開けた城戸は、未来の指を消毒して、絆創膏を巻き、

「しばらく、ギョツと押さえておくといいよ」

そう言っつて、未来の指を握った。未来は急に胸がドキドキしてきて、俯く。

「……大丈夫？」

城戸は指を握ったまま、未来の顔を覗き込んだが、やがて笑いながら、

「緊張してる？……すごく、脈が速いよ、」

からかうように言った。自分でも、赤面しているのが解る。咄嗟に否定しようと顔を上げると、目の前に城戸の綺麗な顔があつて、今度は息が止まりそうになつた。

「ホラ、もう血が止まった」

城戸の細い指が離れ、見ると本当に出血が止まっているようだ。

「……ありがとうございます、」

早口に言っつて、未来は逃げるように職員室をあとにした。どうしていつも、こうなるんだろう。仕組まれた罠のように、未来をどんどん深みに引きずり込んでいく。未来が困っているとき、いつも近くにいて手を差し伸べてくれることが、偶然なのかそうでないのかハッキリ知りたかつた。階段を駆け上がり、音楽室に飛び込んだ未来は、菜々子の顔に、楽譜を忘れて来たことに気付く。

「あなたの楽譜、持って来てあるよ」

そう言われて心底ホツとし、改めて受け取った楽譜をメンバーに配つた。

「未来くん、怪我したの？大丈夫？」

菜々子が言いふらしたのか、杏奈が声をかける。屋上で話してから杏奈は、数日の間部活を休んでいたが、先日、いつもの笑顔を取り戻して音楽室に現れ、事情を知る部員たちの前で部活を辞めたい

と言ったことを謝った。

「うん、ちよつと指切っただけ」

言いながら、職員室での出来事にまた、顔が熱くなる。

「先輩、どうしたんですか？顔、赤いですよ？」

「な、何でもないよ、ホラ、早く譜面をしまえ」

その日の練習は、ピストンを押す指が痛むたびに鼓動が乱れて息継ぎが上手くできず、譜面台を片付けた未来は大きく溜め息をついた。部員たちが帰り、いつものノートを開いても、思うように集中できなくて、苛立った未来は立ち上がり、準備室のドアを開けた。楽器ケースの中の、シルバーに輝く曲線を布でそつと撫でながら、そこに歪んで映る自分の顔を見つめる。ふと思いついて、携帯を取り出し、沙耶を呼び出した。ちよつと部活を終えて友達と話をしていたらしい沙耶は、いつものジャージ姿で音楽室に現れ、

「今日、会いたいと思ってたの、」

と、嬉しそうに未来の首に腕を回して抱きついた。その豊満な胸に興奮する自分に安堵しながら、ジャージのファスナーを下げ、沙耶の服を脱がせる。

「やだ、こんなところで？」

「うちまで我慢できないよ、」

いつになく、自制心が弱っていた。イヤだと言いながら、沙耶は自分で下着を脱ぐ。薄暗い準備室の楽器たちが、二人をジツと見ているのか、幾つもの視線を感じた。

「超コーフンしたね」

帰り道、沙耶が言った。ようやく落ち着きを取り戻していた未来は、笑いながら沙耶の手を取った。小さな手でギュツと握り返してくるのを可愛いと思ったが、その指の痛みに、また胸がドキン、と鳴る。ちよつと駅に着き、未来はさりげなく、手を離れた。

数学オリンピックの資料に一通り目を通し、過去問、と野口のぶ

つきらぼうな字で書かれた数枚の問題用紙をパラパラとめくった未来は、意外に簡単な問題が多いことを知った。頭を捻らなければ解けない難問ばかりかと思いきや、基礎さえ理解していればできそうに思える問題も多く、試しに一問目を解いて答え合わせをし、それが正解だと確認して少し嬉しくなった。劣等感を感じることが多い進学校での学校生活だが、トランペットと数学だけは未来の味方をしてくれる。未来は密かに、野口に感謝した。

休日の朝、ようやく家族にそのことを打ち明けると、

「すごいじゃない！未来は数学、得意だもんね」

瑠末が感心したように言った。

「そんな大会があるとは知らなかったな。負担にならない程度にやるんだぞ」

「また、当日に熱を出すんじゃないでしょうね。寒い時期だし、体調管理はしっかりやるのよ？」

口々に述べ、一応、応援してくれるのが解った未来は、満足して庭に出た。その音に、日なたで転がっていたミミが飛んでくる。十一月に入って朝晩の肌寒さが増していたが、外で日光を浴びるには丁度良い気候だった。

「未来と一緒にいられるのも、あとちょっとね」

ミミと戯れていた未来に、瑠末がそう声をかけた。隣に並んで、裏返ったミミのお腹を撫でながら、

「北海道は、寒いんだろうな、」

と呟いた。瑠末が目指すのは、医者之道。H大を受験することが決まっている。他に幾らでも医学部のある大学があるにもかかわらず、あえて遠くを選んだ瑠末の気持ち、未来には解らなかった。どうしてH大なの、と聞けばすんなり答えてくれるかも知れないが、聞けずに黙っていると、

「将来は、パパと一緒に開業するんだ。女なのに、若先生、とか呼ばれちゃってね。そしたら、未来が風邪ひいた時は、私が診てあげる」

瑠末は小さい頃から、面倒見が良く、未来をこの上なく可愛がって来た。年子と言っても、男と女では精神的な成長が著しく違い、物心ついた時から未来はいつも、大きく見える姉の背中に隠れて甘えていた。瑠末は瑠末で、体が弱く、内気な弟を、一生懸命守ってきた。その生活にも、終わりが近づいている。

「まあ、今はインターネットがあるから、いつでも顔、見れるけどね」

自分に言い聞かせるように言っ、オリンピックク頑張りなさいよ、とリビングに戻って行った。

「……もう受かったつもりなのがすごいよな、」

何も考えていない顔のミミに、話しかける。

「まあ、医者に向いてる気がするけどさ」

陽射しの暖かさとは裏腹に、言いようのない寂しさに襲われるのを感じた。次の春、瑠末は間違いなく、この家を出て行くのだろう。瑠末は完璧主義で、確実にできると自分で判断したことしか、実行しない。ピアノはもうやめてしまったが、発表会で弾く曲を練習する時も、上手に弾けるようになるまでは部屋に籠り、音を小さくして練習していた。もう間違えないと解って初めて、家族に披露するような、そんな子供だった。しかし、他人には寛大で、自分以外にその完璧を求めたりはしない。病気がちで体も小さく、学校までの通学路、息切れがしてしょっちゅう立ち止まる未来を、優しく振り返る瑠末の姿が思い出され、未来は不意に涙が出そうになった。

「クウーン……」

ミミが急に起き上がって未来の顔を舐める。未来の気持ちを感じ取ったのか、いつになく不安げな表情に、吹き出しそうになった。

「おまえに心配してもらわなくても、大丈夫だよ」

そう言っ、もう一度ミミを裏返し、お腹を撫でた。

初めて訪れる別れを、受け止めなくてはならない現実。その日と思うと、未来の心は寂しさに震えた。

本格的な冬の到来を待たずに、街はクリスマス一色になっていた。買い物がしたいと言う沙耶と一緒に人混みを歩きながら、未来はその騒がしさに驚いてしまう。大音量で流れる様々なクリスマスソングは、往來のあちこちでぶつかり合い、途切れることなく繰り返された。普段から音にはうるさい吹奏楽部員だが、ここまで雑多だと逆に不協和音にはならないことは、新たな発見かも知れない。

「ねえ、先輩はクリスマスプレゼント、何が欲しい？」

沙耶は未だに、未来を先輩、と呼ぶ。未来も敢えてそのままにしていた。

「別に、何もいらないよ」

「えー？つまんない。ね、お揃いの何か、買おうよ」
女子はみんな同じだ。すぐにお揃いにしたがる。

「沙耶が決めていいよ、」

「ホント？じゃあ、指輪がいいな。ペアリング、」

頷きながら、結局いつも沙耶にリードされている自分に、これでいいのか？と問いかけてみる。姉に甘えて育ってきた未来の体には、その生活が完全に染み込んでしまっているのだろうか。

二人は通りに面した店を何件かまわり、沙耶は洋服を、未来はスニーカーを買った。この間、庭に出る靴脱ぎ石の上に置き忘れたら、翌朝、見るも無惨な姿になって発見されたからだ。その残骸を口にくわえ、嬉しそうに尻尾を振るミミを見たら、叱る気も失せてしまった。

「ミミちゃんは、先輩の匂いがして、嬉しかったんだよ」

もう一足、庭用のスリッパが置いてあるにもかかわらず、未来の靴だけを狙ったことを話すと、沙耶は笑いながら言った。沙耶の家は猫を飼っていて、その素っ気なさを、時々嘆いている。

「すっごく甘える時もあるよ、こっちが抱っこしたいのに、フン、つて行っちゃう時もあるんだよ。ミミちゃんは、いつも甘えてくれるから、大好き」

動物好きの沙耶は、ミミにすごく甘い。しかし羨もちゃんと心得ていて、しっかりおすわりとお手をするまでは、おやつを与えなかった。

「沙耶は獣医になるんだろ？大学は、もう決めたの？」

「うん、H大」

瑠未と同じ志望校に、未来は驚いた。他に幾つも大学はあるのに、とそのわけを尋ねると、

「中学のとき読んだ漫画でね、獣医さんを目指す学生の話があって、その舞台がH大なの。すつごく面白そうだったから、」

思いもしなかった理由にポカンとしていると、

「先輩は？何になるの？」

「……まだ解んないや。もうちょっと、考えてみる」

自分のことになると、急に不安になり、未来は慌ててその話題から逃げた。

冬休みが近づいたある日の放課後、ようやく癖になってきた部活のあとの受験勉強で、未来は数学オリンピックの過去問を解いていた。未来にしか解らない走り書きが、ノートを埋めていく。簡単だと油断したが、種類は様々で、たった一行の問題なのに、一時間かかってやっと答えが見えてくるものもあった。そういう類いの問題は、糸口を見つけ出すために、頭の中をフル回転させる。それが早く見つけられるかどうか、能力の差だった。

やっとその難問を解く目処がたち、ペンを置いた未来は、また時間が経ちすぎていることに気付いた。いつの間にか電気がついていて、後ろの机で何か作業をする城戸を見つけ、邪魔をしないように気遣ってくれることを有り難く思いながら、机の上を片付ける。立ち上がると、城戸はすぐに気付いて、すごい集中力だね、と褒めた。城戸は期末試験の採点をしていたようで、ちょうど区切りがいいから、とその答案用紙の束を整えた。

頭を使いすぎたのか、ひどく頭痛がしてきて、ノートをカバンに入れた未来は、思わずこめかみを押さえた。カーテンを閉めていた城戸は、動きの止まった未来の様子を気にして、どうしたの？と、声をかける。

「何でもないです、」

未来はそう言って、頭を軽く振り、いつものように鍵を締めた。しかし、廊下を歩きながら、振動で頭がズキズキして、だんだん歩く速度が遅くなってしまい、それに気付いた城戸が立ち止まる。

「大丈夫？」

あまりに心配そうに見るので、未来は仕方なく頭痛の原因を説明した。

「考えすぎると、時々こうなるんです」

すると城戸は、未来を職員室に連れ帰り、珈琲を飲めるかと尋ねた。職員室の奥にはミニキッチンを備えた休憩室があり、教師たちはそこで自由に休憩ができる。城戸は椅子を引いて未来を座らせ、慣れた手つきで、珈琲を淹れてくれた。

「これを飲めば、多分良くなると思うよ、」

猫舌のため、慎重に冷ましながら飲む。ミルクも砂糖もたっぷり、その甘さにホッとした未来は、思わず微笑んだ。

「疲れた時は、甘いものが効くんだよ」

同じように珈琲を飲みながら、城戸が言った。勉強すぎた時の頭痛は、ブドウ糖が足りないサインらしい。城戸の言葉は、その穏やかな口調のせいなのか、声の周波数のせいなのか、不思議なほどスツと頭に入る。城戸が教えれば、他の授業の理解度も高いのではないかと想像してみた。甘いものが好きだとか、寒い冬は嫌いだとか、他愛のない会話をしながら、意外と話しやすいことに気付き、今まで変に構えていたことが馬鹿馬鹿しくなる。生徒たちに人気があるわけは、この容姿だけではないのだ。人見知りをする未来は、どうしても人を見た目で判断しがちだが、そろそろ治さなくてはならない気がした。

何処かから携帯らしき音が聞こえてきた。どうやら、職員室にある城戸の携帯のようだ。

「出なくていいんですか？」

「大丈夫。あとでかけ直すから、」

相手が解っている様子に、未来の頭には、保健室の木村のことが浮かんでいた。以前に南が、城戸と付き合っていると聞いていたが、杏奈が直接聞いて、彼女はいないと答えたらしい。どちらが本当なのか、こんなにも気になる理由に、未来はそろそろ気付いていた。

「未来、って、いい名前だね」

不意に名前を呼ばれ、ドキン、と胸が鳴った。小さい頃は、未来ちゃん、とふざけた同級生にからかわれたりして、その女子の名前のような響きが気に入らなかったが、意味を理解できるようになって、好きになった。褒められると何だか恥ずかしくて、

「小学校のとき、女の子みたい、ってよくからかわれました」

すると城戸も、解るよ、と笑う。

「僕もそうだったから」

そうだろうな、と思わず笑ってしまった。が、唯という名前は、この教師に、本当によく似合っていると思う。凜とした響きと、柔らかさとの調和が、中性的な城戸の雰囲気そのものだったから。しばらく名前について話していると、今度は未来の携帯が鳴った。あまりに帰りの遅いのを心配して、母親がかけてきたのだ。

「引き止めてごめんね、」

未来の頭痛を治そうとしてくれたにも関わらず、叱られたら僕のせいにしていいよ、と言って詫びた。未来を下駄箱のところまで送ると、

「数学オリンピック、頑張ってたね」

と、優しい笑顔で言った。

学校からの坂道を下りながら、未来はいつの間にか、頭痛が何処かに消えていることに気付いた。星が輝く空を見上げ、大きく深呼吸する。冷えた空気が体中に行き渡り、何だか気持ちがいい。吐く

息が白くて、気温の低さがうかがえたが、未来は全然寒くなかった。それは、体だけでなく、心まで温かかったから。未来は、城戸の優しい態度が、決して自分だけでなく、誰にも分け隔てないものだと承知しながら、それでもあの時の杏奈のように、自分に対してだけのものであるかのような錯覚に陥りそうになって、そのたびに、自分の心に警告を与えてきた。でも……。

未来はこの気持ちだが、この先どこへ向かうのか、自分でもまだ解らなかったが、こうやって時々、城戸と会う機会ができることを望んだ。それくらいは、許される。一人の生徒と、個人的に親しくすることはできない、と言った城戸自身が、未来と二人の時間を作っているのだから。

家に着いた未来は、叱られるということなどすっかり忘れて、ただいま、と元気にドアを開けた。

結局クリスマスは、沙耶の言いなりにお揃いの指輪を買い、学校でもつけてね、と言われてそれを守っていた未来だったが、案の定、すぐ俊介に指摘されて溜め息をついた。

「薬指にして、って言われたけどさ、そんなの恥ずかしくてできないよな」

未来はそれだけは無理、と、人差し指に入るサイズを買った。

「でも、お似合いだよ、おまえら」

可笑しそうに、俊介が言う。相変わらず優位に立てないことを不満に思いながら、毎回沙耶に振り回されていた。それでも、沙耶といると楽しくて、殆どの週末を一緒に過ごしている。お互いの気持ちの大きさが釣り合っていることの心地良さを、未来は初めて感じていた。それに、年下というのも、幼い未来には丁度いい。菜々子との時は、何かにつけて自分の能力の低さを感じて落ち込んだものだが、沙耶の成績はともかく、歳が下だというだけで、随分気が楽だ。試験の点数を聞かれることもない。

期末試験の全ての答案用紙が戻り、また英語の点数が上がったことに満足した未来は、来月の数学オリンピックに向けて、単語の書き取りは休憩することにした。冬休みの間中、部屋に籠ってひたすら過去問を解く。もともと数学が好きな未来には、それは全く苦痛ではなかった。母親も、未来が勉強していると解ると機嫌が良く、部屋にケーキを運んでくれたり、簡単な夜食を作ってくれたり、妙に優しい。

「でも、あんなに勉強キライだったのに、急にどうしたの？」

おせち料理を囲んで新年の挨拶をした直後、母親が言った。溜末もからかうように、

「好きな子に、何か言われたんじゃないの？やる気になる一言つてやっ、」

「理由なんてないよな？男はやらなきゃいけない時は、黙ってやるんだよ」

余計な会話を避けるため、未来は父親の言葉に大きく頷いた。しかし内心、志望校も、目標とする偏差値もない自分がこんなにも勉強に一生懸命になっていることが、不思議で仕方ない。勿論、誰かに強制されたこともなければ、負けたくない相手がいるわけでもない。今まで人と争ってまで手に入れたいと思つた物もないし、その闘争心のなさを不甲斐なく思う程だった。それなのに。

和気あいあいと食事をする家族の会話の中に、担任でもない城戸の名前が出るのが日常になっていた。やっぱり、彼は自分にとって、特別な存在。ハツキリと認識することは、意図的に避けてきたけれど、それは事実だ。彼が応援してくれるから。彼が見ていくれるから、頑張れる。そして未来はふと、気がついた。自分が負けたくない相手……それは、自分自身。何でもすぐに諦めて、諦めてしまったもつともらしい言い訳を探す、狡い自分。争いを避けてきたのは、負けるのが怖かったからだ。それなら、今度は絶対に負けるわけにはいかない。劣等感だらけの、弱い自分を、そろそろ卒業する時が来たのだ。

森下家は、帰省すると言っても父方も母方も同じ県内のため、二日に分けての日帰り旅行になる。クラスメイトが、遠方への帰省の話をするたびに羨ましくなる未来だったが、父方の兄弟が多く、お年玉をもらって急に大金持ちになれるのだけは嬉しかった。

「あら、瑠未ちゃん、今年を受験だから大変ね。未来くんは部活、頑張ってる？」

親戚のおばさんが、未来たちに声をかける。久々に会った兄弟と談笑する両親を眺めながら、

「私たちも、何年か経ったら、あんな風になるのかな、」

瑠未が言った。昼間から酔っぱらったおじさんたちがやたらと大声で話すのが可笑しくて、思わず吹き出した未来を、

「未来もあなるわよ、きつと」とからかった。

将来のこと。全く見えなかったものが、今ようやく、少しだけ、見えてきた。ずっと数学と向かい合ってきた結果、未来は自分がかく数学が好きだということに、改めて気付かされ、自分の進む道は、これしかないと思い始めていた。たとえ就ける仕事が少なくても、構わない。できることを突き詰めて行けば、道は開ける、そう信じて行こうと。

短い休暇が終わり、幸い体調を崩すこともなく、未来は数学オリピックの会場に来ていた。付き添いの野口は、いつも通りやれば大丈夫だ、と未来の肩を痛いくらいに叩く。見るからに頭の良さそうな生徒が集まる中で、予選くらいは勝ち残りたいと思いつながら試験が始まるのを待っていると、カバンの中で、携帯の音。マナーモードにし忘れたことを思い出し、慌てて取り出す。見ると登録されていない相手からで、気になった未来は、まだ開始まで時間があることを確認して、そのメールを開いた。

『未来、頑張れ』

時間が、止まったかのように感じた。周囲のざわめきが消え、ただ自分の鼓動だけが耳元で聞こえる。その短いメッセージの下の、Yuiというローマ字を、食い入るように見つめていたが、開始五分前のアナウンスが聞こえ、未来は急いで携帯を閉じた。アドレスを、誰に聞いたのか。そんなどうでもいいことを、まず考えている自分。油断すると涙が零れそうで、未来は震える手を握りしめ、とつくに暗記している公式を、何度も暗唱した。

たった三時間。あつという間に制限時間になり、それでもビツクリするほどスラスラと回答できた未来は、笑顔で担任のところ駆け寄った。

「そうか、それなら間違いなく本選に残ったな」

満足げに頷き、未来に缶珈琲を奢ってくれろ。ちよっぴり苦かったけれど、未来は職員室で飲んだ甘い珈琲を思い出して微笑んだ。

帰宅した未来は、今日の出来映えを家族に報告し、ひとしきり褒められたところで、自分の部屋に戻った。あらためて、さっきのメールを開いてみる。返信しようかどうか、散々悩んだ挙げ句、思いとどまってベッドに仰向けになった。目を閉じて、気持ちを落ち着けようと努力しているところへ、

「未来、入るよ？」

と、瑠末が顔を出した。来週のセンター試験に向けて、最後の追い込みをかけているのかと思いきや、母親とケーキを買いに行っていたらしい。

「一緒に食べない？」

甘いものが好きな未来は、粉砂糖のかかったシュークリームに惹かれて、手を伸ばした。いつもなら部屋まで運んでくれたりしない瑠末に、何か話があるのかとつかがっていると、

「今日、何かいいことあった？」

「……だから、問題が簡単だったって、」

「そうじゃなくって。ほら、他に何か、あったんじゃない？」

何のことを言っているのか、未来はしばらく考えた。頭の中に浮かぶのは、たった一つ。何にも例えようのないほど、嬉しかった。

しかし、万が一そうだったとしても、瑠未がそれを知り得た理由が解らない。黙っている未来に最後のシュークリームを勧めて、

「今朝、未来が出掛けてから、電話があつたの。未来の携帯のアドレスを教えてほしい、って」

瑠未はそれが誰からかをわざと言わずに、話を続けた。

「いくら学校の先生でも、勝手に教えちゃマズいかな、って思ったんだけど、何か、どうしても伝えなきゃならないことがあるって言うから、」

自宅に電話をしてまで、自分にメールをくれたことに感動していると、瑠未はさらに続けた。

「私、こういうことって何故か解っちゃうのよね。コンクールするとき、未来があの人と話してるの見て、ピンときちゃった。あんな、城戸先生のこと、好きでしょ」

ストレートすぎて、動揺するまでに数秒かかった。可愛い弟のことだから解るのかな、と首を傾げる瑠未に、

「もしそうだったとしたら、どうすんだよ？」

「どうするって？」

「あの人も俺も、男だってこと、」

言ってから、自分の言葉に傷つくのが解った。瑠未はしばらく考えて、

「好きになっただんだったら、仕方ないんじゃない？」

と、軽く言っ、さあ勉強しなきゃ、と部屋を出て行った。その足音が隣の部屋のドアの向こうに消えてからも、しばらく呆然としていた未来だったが、ようやく平常心を取り戻し、もう一度城戸からのメールを眺める。未来、と呼んだことなどないくせに、敢えてそうしたのは、未来の気持ちを見透かしてのことのように思えた。ど

んどん、引き寄せられていく。勢いのついた物体が、自らその動きを止められないように、未来の心は制止するもう一人の自分を振り切って、走り出そうとしていた。辛うじて、その時鳴った沙耶からの電話が、未来を遠くから牽制してくれた。

翌月の数学オリンピック本選を、未来はみごとAAランクで通過した。本選通過のラインを、大きく上回ったという証拠だ。本来なら、このランク以上だと、春の合宿に参加して、さらに勉強する機会を与えられるのだが、未来はそれを辞退した。何故なら、それよりも、夏の吹奏楽コンクールに向けて、そろそろ動き出す頃だと解っていたからだ。野口もそれは理解してくれて、おまえの実力は充分解った、と嬉しそうに言っていた。

それでようやく、今まで通りの生活に戻って安心した未来は、少しくらいのんびりしても許されるだろうと、こたつに潜ってテレビを見ていた。バレンタインデーに沙耶がくれた手作りのチョコは、意外に美味しくて、つつい、手が伸びる。そんなだらしない恰好の未来の隣に、仕事を終えて帰ってきた父親が座った。

「そんなことしていると、風邪ひくぞ」

言われて仕方なく起き上がると、

「未来は志望校を決めたのか？お姉ちゃんが終わったら、次はおまえの番だぞ？」

担任でも最近言わなくなったことを、と思いつながら首を横に振る。瑠未は先日、入試を終えて、結果待ちだ。あとは滑り止めの大学を受けるのだが、行く気もない大学を受験する苦痛をしょっちゅうこぼしている。

「どこでも、未来の好きなところを選んでいいんだよ？極端な話、日本じゃなくなつて構わないんだからな」

突拍子もないことを言い出して、一度は聞いたことのある外国の名門校を幾つか並べた。

「海外は日本と違って、一つのことに出出していけば、そこをどんどん評価して伸ばしてくれる。未来にはピツタリじゃないか。なあ、ママ」

キッチンで夕食の準備をしている母親に声をかけた。

「それには、苦手な英語をなんとかしなきゃね、」

いつも嫌味とも取れることを言っただけで未来を攻撃する。父親はそれを、いつもかばった。

「でも、最近英語も少しはできるようになってきたみたいだし、考えてみたらどうだ」

恐ろしく前向きな父親に、当事者である未来はついて行けず、混乱しただけだった。まあ、言いたいことは、好きにしていいたいということなのだろうが……。そもそも、やりたいことが決まっただけで、学部を決め、志望校を決めるのだ。未来にはそれがなくて、困っている。ただ、数学が好きで得意だというだけなら、それこそどこでもいいから大学に入って、教授にでも学者にでもなればいい。

「それも違うんだよな、」

呟いた未来は、勉強の邪魔になるかな、と思いつつも、瑠末の部屋をノックした。

「どうしたの？珍しい、」

もう何年も入ったことのない姉の部屋。想像したより殺風景で、いつもリビングにいるわけが解った気がした。

「瑠末はなんで、医学部に行こうと思ったの？」

思いがけない質問だったのか、驚いた顔をした瑠末は、まあ座って、と未来にベッドを指した。

「それはね、ナイショ。小学校の二年生くらいで、もう決めてたかな」

「……そうなんだ。すごいな」

あらためて、自分との差に驚かされる。

「未来は、数学がこんなに得意なんだから、それだけで充分だと思っただけ？将来の仕事なんて、大学行ってから考えればいいんじゃないかな」

い？」

数学だけを勉強できる学科があるという話や、父親と同じように、海外の大学の話をしたあと、

「志望校は、単純に好きな人が行ってたから、とか、あの芸能人が通ってるから、とか、そういうミィハーな理由で決めちゃえば？私には、この教授の講義が受けてみたい、っていうのがあって選んだけどね。城戸先生に、何処の大学だったか、聞いてみたら？」

最後の一言は余計だったが、意外なところで瑠未がH大を選んだ理由が解った。聞けずにいたことがバカバカしくなった未来は、胸のつかえが取れた気がして、自分の部屋に戻る。数学以外に興味がないなら、他に何でもできる生徒より、志望校を決めるのは簡単なことなのかも知れないと思えてきた。

部活のあとの自主的な居残りを再開した未来は、苦勞して覚えた単語をすっかり忘れていることに愕然とした。記憶力が悪いことは承知していたが、ここまでとはガツカリだ。仕方なく、もう一度最初から始めることにし、年末にするしを付けたところに戻るまで帰らないと決めて机に向かう。が、さすがにいつもの量をはるかに超えて疲れを感じ、少しだけ、休憩しようと思いついた。

窓に付いた結露が、外の気温の低さを物語っている。ほんの少し、窓を開けてみると、隙間から吹き込む凍り付くような風に、火照った頬が瞬時に冷めた。この学校は、冷房はないが、暖房だけは必要と判断したのか、どの教室にも完備していて、その吹き出し口に近い席になると、昼食後の授業は眠気との戦いになる。未来はその結露した窓に、ある文字を書きかけて思いとどまり、全く意味のない模様を描いた。

自分の住む街の夜景を眺めるのは、初めてかも知れない。意外なことに気付きながら、未来はしばらく、その景色に見入った。遠くまで続く灯りの海に、昼間より遙かに広く、違う街のように感じるのが不思議だ。真っ暗な空に星は見え、その深さもまた、計り知

れない。

窓に書いた模様が、流れる水滴ですつかり何だか解らなくなる頃、入り口のドアが開く音が聞こえた。濡れた窓に滲んで映る城戸の姿に、ドキン、と胸が鳴る。

「休憩中？」

あのメールを受け取って以来、言葉を交わすのは初めてだった。メールに返信はしておらず、それについて弁解しようか悩んでいると、未来のノートを見た城戸が、

「綺麗な字を書くな」

と褒め、窓際の未来に並んだ。いつも何処か良いところを見つけて、褒めてくれる。この教師が生徒を叱る姿など、想像できなかった。

「あの、ありがとうございます」

それだけで、城戸には伝わったようで、どういたしまして、と柔らかい口調で言う。すっかり慣れたはずの彼の香水が、今日はとても切なく感じた。あの時の気持ちがよくみえり、すぐ側に並んだ城戸の胸に飛び込みたい衝動に駆られた未来は、思い切って顔を上げた。城戸の優しい気な茶色い瞳が、未来の目を見つめる……。

しかしこんな時に限って、邪魔な自制心が働いて、未来は溢れそうなその気持ちを、やっとのことで胸の奥に押しやった。再び俯いた未来に、

「苦しそう、」

城戸のその言葉に、それはあなたのせいだと言いたかったが、それも全て閉じ込め、心に頑丈な鍵をかけた。

「……先生は、どうやって志望校を決めたんですか？」

ずっと前から聞いてみたいと思っていたことを、やっと口にしていた。いつ見ても生徒に囲まれているほど人気のこの教師が、この大学を出ているのか、噂にも聞いたことがない。

「流されるまま、かな。君の偏差値はこのくらいだから、ここがいんじゃない？って。その大学は実家からは通えなくて、一人暮らしをしてみたかった僕には、それも理由だったのかもね」

未来はそれを聞いて、幾らか安心していた。誰もが確固たる自信を持って、こういう目的でここに行きます、と答えるわけじゃない。ただ、どこの大学ですか、とは聞けず、また俯く。

「さつきから辛そうなのは、それが原因？」

城戸は優しく、そう尋ねた。

「志望校が、決められないから？それとも、別のこと？」

気遣うように未来を見つめる瞳。どうしてこんなに優しく接することができるんだろう。それが時に相手を苦しめていることに、気付いているのだろうか。未来は半ば恨みのこもった眼差しを向けてしまいそうになり、目を逸らした。

「……結果、聞いたよ。野口先生から」

城戸はそれ以上未来を追いつめるようなことはせず、話題を変えた。見ると、さつきの未来と同じように、窓に何か書いている。筆記体の文字……その指の動きを辿ってはいけない気がして、視線を外す。

「職員室中に、自慢してみえたよ。うちの森下はすごいだろ、って」
野口が得意げに語る様子が目に浮かび、未来は思わず顔を綻ばせた。自分に自信のなかった未来に、これだけは負けないというものを見つけてくれた野口には、本当に感謝している。

「頑張ったね、未来」

その言葉は、あの日のメールと同じように、未来の心に染み込んだ。嬉しさだけではない、色んな感情が入り交じった涙が溢れ、思わず顔を背ける。その瞬間、城戸の腕が、ふわり、と未来を包んだ。
「大丈夫。未来ならきつと、全部うまくいくよ」

温かい胸の中で、未来は言いようのない安らぎに、涙が止まらなかつた。まるで天使の羽根に包まれているような心地良さ。夢でもいい、そう思える。これ以上の優しさを、未来は知らなかつた。同時に、もう離れたくない、そんな強い気持ちが生えるのを、必死で抑えていた。

瑠末の合格通知が届き、家の中は急に慌ただしくなった。母親は毎日のようにパソコンに向かい、勉強から解放された瑠末と一緒に部屋探しに夢中だ。父親も、パパより優秀な医者になるなよ、などと冗談を言っただけで笑っているが、未来は素直に喜ばなかった。十七年もの間、同じ屋根の下で暮らしてきた家族が、ある日を境に遠くに行ってしまうこと。お姉ちゃん子だった未来にはそれが、この歳になって、今までに味わったどんなことよりも悲しかった。それを顔に出すまいとして、知らず知らずのうちに口数の減っていた未来に、父親が声をかける。

「どうした、未来。具合でも悪いのか？」

黙って首を振ると、側に来て額に手を当てる。

「熱があるじゃないか。我慢せずに言いなさい」

全く自覚のなかった未来だが、すぐにベッドに入るように言われ、自分の部屋に戻った。言われてみると、体がだるい気がする。母親が持ってきた薬を飲み、うとうとしていると、今度は父親が部屋を尋ねてきた。

「この部屋はいつも散らかってるな、」

呆れたように言いながら、未来の側に座る。

「何処か痛むか？」

「大丈夫、」

そう答えた未来に、おまえの大丈夫は全然当てにならないからな、と笑った。

「お姉ちゃんが医者になるうとしたわけを知ってるか？」

突然、そんなことを言った。以前本人に尋ねたが教えてもらえなかった。未来が首を横に振ると、

「小さかったから覚えてないかも知れないけど、おまえは生まれたときから体が弱くて、しょっちゅう具合を悪くして入院してた。元気に遊べる時がホントに少なくてさ。瑠末はいつも、未来が可哀想だって泣いてた。でもある日、大きくなったら立派なお医者さんに

なつて、未来のこと元気にしてあげるって言いだした。パパじゃ頼りにならないって言われたみたいで、ちょっとショックだったよ。でも、あんなに優しい子なら、きっと立派な医者になれると思わな
いか？」

未来はその話を聞きながら、涙が止まらなかつた。寂しい、寂しいと思うあまり、これから遠く離れて自分のために医者になろうとした姉を、素直に応援することができなかった。

「瑠未はまたここに帰ってくるよ。だから、寂しいのは今だけだ。お姉ちゃんに、おめでとうって言ってやりなさい」

父親はそう言って、子供の頃よくしてくれたように、未来の頭を撫で、部屋を出て行った。

桜の花がちらほらと咲き始めた頃、瑠未は元気に旅立っていった。空港で泣きながら手を振る母親に、メイクが落ちるから泣かないで、と言いながら、瑠未も涙ぐんでいた。思えば、瑠未が泣いたところを、未来は見たことがない気がする。そんな強さと優しさを兼ね備えた姉の思いを知ってから、もっと強くなろうと心に誓い、未来は必死に涙をこらえた。

「まあ、盆と正月には、帰ってくるんだらうけどな」

ぼつん、と父親が言う。

「そうね。ホタテを、送ってもらおうかしら」

ひとしきり泣いた母親は、ハンカチで涙を拭きながら、新婚旅行で行った函館漁港のホタテが絶品だった話を始める。しかも、

「あとは未来、あんたの進路が問題ね。そろそろ決めなきゃ勉強がどっち付かずになっちゃうわよ」

いつもの嫌味が射っていて、未来は思わず言葉に詰まった。

帰宅して、急に静かになったリビングが寂しすぎた未来は、自分の部屋に閉じこもった。隣の殺風景な部屋に、瑠未はもういない。前に進むということは、誰かとの別れでもあることを、未来は知った。

進路のことは、未来の中で、徐々に形になりつつある。しかし、まだ誰に相談したわけでもなく、心の中だけの決定事項だった。今はそれを温めて、心の卵から生まれる瞬間を待つのだ。

二人の距離

？ 二人の距離

三年生になると、クラスは完全に、理系、文系に分かれ、理系の未来は当然、俊介とは別々のクラスになった。その寂しさが、また未来を悩ませていたが、何より驚いたのは、城戸が未来のクラスの担任になったこと。去年までは他の教師たちの手伝いをしていたが、今年から、クラスを受け持つことになったのだ。最初に担当するのは、まずは学校生活にも慣れて分別もある、三年生からと決まっているようで、六つあるクラスの中から、未来たちのクラスに決まった。

「浮かれちゃって。馬鹿みたいだよな」

隣の席の生徒は、一年の時に同じクラスだった三上正紀だ。最初のホームルームが終わるなり、女子たちは城戸が担任になったことを、飛び上がって喜んでいる。

「担任なんて、誰でも一緒なのにさ」

その言葉に相槌を打ちながら、女子の気持ちも解るだけに、複雑な心境だ。城戸とは、未来が音楽室で泣いて以来、顔を合わせていない。会うのが気まずいような気もしていたのに、担任だなんて。気になるのは、杏奈も、同じクラスだということだった。杏奈は化学と生物が得意で、薬学部を目指している。城戸とあんなことがあってから、唯様、とは一度も言わなくなっていたが、城戸のほうもやりにくいのではないかと、案じてみる。

「未来くん、同じクラスになったね」

心配をよそに、杏奈がいつもの笑顔で話しかけてきた。

「ね、体育館に教科書取りに行くの、一緒に行かない？」

ちようど行こうと思っていた未来は、杏奈と二人で体育館に向か

った。一年生から三年生まで一斉に教科書が並べられ、自分に必要なものを、そこから選んで持ち帰るというシステムだ。あらかじめ配られたプリントを確認しながら教科書を探していると、偶然沙耶と出会った。

「あ、先輩！」

嬉しそうに駆け寄ってくる沙耶は、寒くないのかと心配になるほどのミニスカートだ。一緒にいる他の女子と比べても、明らかに露出が多い。春になったとは言え、まだ花冷えのする毎日だ。

「私ね、二年五組になったんだよ？」

二年五組というのは、未来が去年まで使っていた教室だ。特別な場所を奪われたようで何だか複雑な気分になり、言葉に詰まる。沙耶はそんなことお構いなしに、

「ね、今度、教室でHしようか」

耳元で、囁いた。

新一年生が部活の見学に来るようになり、パートリーダーの未来は、その都度、一年生にいろいろ質問を受けたりして、忙しくしていた。同時に、夏のコンクールの課題曲が決まって、その練習が始まるとともに、自由曲の選曲をするため、顧問の河合と菜々子とパートリーダー全員で、毎日のように頭を悩ませている。曲は気に入っても、人数が足りなかったり、楽器の種類が足りなかったり、制限時間より長過ぎたり、色々問題があつてなかなか決まらなかった。そんなある日、いつもの部活後の居残りを終えた未来は、偶然俊介に会った。

「久しぶり。どう？最近、」

変わらぬ様子で話しかけてくる。未来は相談したいことがあったため、以前よく行ったファストフード店に誘った。

「彼女と同じクラスになっちゃったよ」

座るなり、俊介が溜め息まじりに言った。

「何だよ、イヤなの？」

「やりにくいじゃん、何かと」

妙に大人びた台詞が可笑しい。笑っていると、

「おまえはどうなんだよ？中野とうまくいってんの？」

「……まあ、いってるほうだと思うけど、」

それは嘘ではなかった。会えば可愛いと思うし、守ってやりたいと思う気持ちもある。最近はやたらと肌を露出する沙耶の格好が気になるくらいだ。

「あいつさ、足とか、出し過ぎじゃない？」

すると俊介は吹き出した。

「服装自由なんだから、いいだろ、別に」

「そういうことじゃなくて、」

未来は以前に、沙耶が痴漢に遭ったことを言いそうになり、口をつぐんだ。

「それより、何か話があつたんだろ？」

話を逸らしてごめん、と言いながら、俊介はハンバーガーにかじりついた。

「俊介、俺さ、数学の教師になろうかな」

俊介は少し驚いたように目を丸くしたが、

「へえ、いいじゃん。おまえ数学得意だし」

でも、生徒に教えてる姿、想像つかないな、と笑う。

「教育学部ってこと？それか理学部とか行って、教職取るのかな」

「まだどこにするかは決めてないけどさ、……そしたら、またここに戻ってこれるんだよね」

俊介はその言葉の意味を理解するまでに少し考え、

「……ああ、教育実習だね」

と、呟いた。

数学を教えること、というより、未来は、自分のように進路を見出せなくて悩んでいる生徒の、助けになりたいと考えていた。たとえ直接力になることはできなくても、優しく手を差し伸べてやることで、未来がそうだったように、徐々にその目標に向かって歩いて

行けるから。そんな未来の心の中が見えたのか、

「そういえば、城戸って、この卒業生らしいよな」

俊介が思い出したように言い、クラスの女子が言ってた、と付け加える。

「教育実習の時も、キヤーキヤー騒がれたんだろうな」

女子生徒に囲まれて、困っている城戸の顔を思い浮かべ、未来は思わず顔を綻ばせていた。

ゴールデンウィークも終わり、ようやく三年生になった自覚が芽生えてきた頃、未来はよく、屋上で昼休みを過ごしていた。五月晴れの空と風が気持ち良くて、思わず昼寝をしたくなる。進路も決め、一仕事終えたような気分だった未来は、いつになく落ち着いていた。グラウンドでサッカーをする生徒たちを眺めながら、来年の今頃は何処にいるだろう、と考えてみる。

先日、二者懇談で城戸は、これからもっと頑張れるだろうから、まだ大学までは決めなくていい、やりたいことが見つかっただけで充分だよ、と言った。担任としての城戸は、音楽室や放課後の教室でのような柔らかい雰囲気はなく、言わなければならぬことはハッキリと言う、そんな印象だ。授業中も似たような感じで、言葉の丁寧さはあるものの、何か凜とした厳しさのようなものを感じる。一年生の時もこんなだっただろうか。城戸の授業があったはずなのに、それを思い出せないことがもどかしかった。

「ウチの担任ってさ、絶対名前を呼び捨てにしないよな」

英語の授業の後、正紀が言った。確かにそうだが、自分を時々名前と呼ぶことを思い、曖昧に頷く。正紀の、担任、という呼び方から、彼と教師の間の距離が知れた。未来は、自分が意識的に城戸の話題を避けているためか、彼を何と呼んでいたのか、解らなくなっていることに気付く。

「でも、あの発音はすごいよ。留学してたのかな」

今度は感心したように言って、教科書をカバンにまとめた。未来は相変わらず、殆どの教科書をロッカーに置いて帰る。放課後に学校で勉強するようになった未来にはそれがちょうど良いのだが、最も家が近くせに、と、電車で一時間ほどかけて通う正紀は笑った。

未来は、このクラスで一番、城戸と会話をしていると自負している。それを誰に自慢するわけでもないが、自分の中では唯一の心の拠り所と言っても過言ではない。そんな未来も、まだ城戸の出身大学を知らないし、留学の話も聞いたことがなかった。初めて城戸の授業でその流暢な発音を聞いて、中学の時の教師とのあまりの違いに驚いたことを思い出す。城戸は最初に、英語での授業が日本語か、どちらが良いかと生徒に尋ね、多数決で多いほうの言葉で授業をした。三年になって、文系のクラスは強制的に受け答えも全て英語らしく、日本語でもついていくのがやっとな未来には到底、信じられなかった。

話がしたいと思えば思うほど、偶然はやってこない。音楽室で、毎日のように居残りをしていても、最近日は長くなったこともあってか、うまく出会えなかった。職員室に行けば、いることは解っている。しかし、偶然でなければ意味がないと思う未来は、三年生になってからめっきり、放課後の城戸とは疎遠になっていた。

そんなある日、いつものように暗くなってきた音楽室の鍵を締め、職員室に行くと、明かりはついておらず、人の気配がない。生徒がまだ残っていることに気付かずに、教師が皆帰ってしまったのかと不安になった未来は、鍵を戻すと下駄箱まで走った。もしそうなら、昇降口の鍵も締まっているはずだ。しかし、入り口のガラス戸はまだ開いていて、やはり当番の教師は何処かにいるということになる。再び職員室に戻った未来は電気をつけ、キーボックスの中を調べた。他の鍵は全て戻っているから、もし待っていてくれたなら、一声かけるのが礼儀だと思い、まずは奥の休憩室を覗いてみた。が、誰もいない。職員室の中を歩いてみても、どの机も散らかっていて、い

るのかいないのかハッキリせず、未来は自分のことは棚に上げ、ちよっとは片付けるよな、と呟いた。

そのとき、聞き覚えのある音が聞こえ、未来はハツとした。城戸の机に行ってみると、机の上で携帯のランプが光っている。ということは、二年五組か……。未来は人探しの目処が立ってホツとし、おもむろにその場所に向かった。

少し前までは毎日いた場所が、懐かしい。不思議なもので、同じ校舎の中なのに、二年生の教室が並ぶ廊下は、余所の家のような匂いがした。未来は何だか歳をとったような複雑な気分でドアを開けたが、そこに城戸の姿はなかった。

「何処だよ、」

徐々に暗くなつて行く教室で、いつもと逆の立場に、教師たちの苦勞を思った。いつまでも戻らない鍵に、いちいち様子を見に行くのも大変だろう。しかし当てが外れて振り出しに戻つてしまい、未来は城戸が他に行きそうな場所を考えてみる。……。保健室。その場所にいるとしたら？未来は自分と沙耶との関係を思い、しばらく悩んだが、不意に意地悪な心が芽生え、保健室に向かった。

「あれ？」

入り口の採光窓から漏れる明かりを期待していた未来は、思わず声に出してしまった。ドアを開けると他の教室と同じく真っ暗で、僅かに夕日の名残で物が見える程度だ。未来はまた当てが外れて廊下に出ようとしたが、ふと物音が聞こえた気がして立ち止まった。

「誰？」

未来は再び保健室に戻り、明かりをつけた。

「……誰か、いるんですか？」

声をかけると、白いカーテンが開いた。

「ごめん、もう少し、待って」

恐る恐るベッドのほうに行くと、起き上がった城戸が、困ったように笑う。

「体調が悪くて。……。疲れてるのかな」

そう言って、辛そうに息を吐いた。明らかに具合が悪そうだったので、

「休んでて下さい、……まだ勉強があるから、」

未来はそう嘘をついた。

未来は保健室の机で本当にノートを広げ、さっきの続きを始めた。しかし、すぐそこで城戸が眠っていると思うと、全く集中できない。それでも一時間ほど、無理矢理単語を書いていたが、どうしても我慢できなくなつて、そつとベッドを覗いた。

「……、」

少しだけ覗くつもりが、そのあどけない寝顔に思わず釘付けになる。七つも歳の離れた教師を、可愛い、と思つてしまつて、未来は彼への気持ちにますます加速度がつくのを感じていた。長い睫毛、通つた鼻筋、少し開いた唇は、母親がいつか言つていたように、女性の色気さえ感じる。今まで、幾度となく会話をしたけれど、ジツと顔を見たことがなかった未来は、食い入るように、その美貌を眺めた。誰もいない、二人きりの空間。そのことに気付いて、未来の鼓動は乱れた。動けなくなつて、それでも彼から視線を剥がすことができずにいると、気配を察したのか、城戸の目が、ゆっくりと開く。側にいる未来に気付いて、

「……未来に寝顔を見られちゃったね、」

と、笑つた。起き上がり、シーツを整えながら、待たせてごめんね、と言う声はまだ弱々しくて、少なからず無理をしていることを悟つた未来は、心配でたまらなくなつた。

「家、遠いんですか？」

「そんなことないよ、車で二十分くらいだし」

未来にはそれが本当に近いのかどうか、判断が難しかった。心配げに見ているのが解つたのか、

「大丈夫、ちょっと疲れただけだから」

と、いつもの優しい笑顔を見せる。未来はこういうとき、どうす

ればいいのか見出せず、何もできない無力さに苛立った。自分が助けられてばかりで、肝心なとき役に立てないもどかしさ。しかし、城戸が保健室の鍵を締めているのを見て、具合の悪い城戸を置いて帰ってしまった木村の薄情さに矛先が向いた。

「……木村先生は？」

「もう帰ったよ」

城戸なら、もう帰られたよ、と言うであろうことに、その親しさが知れた。去年、南から聞いて知っていたはずの事実。しかし、確かめなければ、ただの噂と思いつい込むことも出来た。二人の関係を認めることが、自分自身を傷つけることになるかと解っているくせに、ハッキリと知りたいもう一人の自分にそそのかされて、ここに来たのだ。心の中に、不快な波がたち、未来は黙り込んだ。

「今日はありがとう。気をつけてね」

下駄箱の前まで来たことに気づき、未来は我に返った。城戸はもう何でもなさそうな表情で微笑む。

「……失礼します、」

未来は精一杯、平静を装うと、一礼して、昇降口を出た。

翌朝のホームルームが始まり、教室に入ってきた城戸が挨拶をするなり、白いマスクとそのかすれた声に、女子生徒たちが心配げな声を上げた。どうやら風邪をひいたようで、時々咳をしながら必要事項を伝える。体が弱い未来にはその苦しさは痛いほど解り、簡単に仕事を休めない城戸の立場を気の毒に思った。昨日の体調不良は、風邪の前兆だったのだろう。授業中も、頻繁に咳き込み、その都度苦しそうな顔をする。

「先生、大丈夫ですか？」

一人のクラスメイトが声をかけると、聞き取りにくくてごめんね、と謝った。

恋の病なのか、城戸のことが心配なあまり、昼食の時間になっても食欲がなかった未来は、そのまま屋上へ出掛けた。錆びてきしむ

扉を開けると、爽やかな風が通り抜け、フツと心が軽くなる。未来はフェンスに凭れ、遠くに広がる景色を眺めた。ミニチュアのような電車が駅から出発して、徐々にスピードを上げて行く。その軽快な音が風に乗って届いた。こんなに駅が近いのに、その電車に乗って、それほど遠くまで行ったことがないことに気付き、無性に何処か遠くへ行きたくなくなった。

気分が晴れずに口数の少ない未来だったが、その日の放課後、杏奈からの思いがけない知らせに喜んだ。卒業した南が、来ているというのだ。未来は一気に顔を輝かせ、音楽室に飛び込んだ。抱きつかんばかりの歓迎ぶりに、若干呆れた様子の南は、髪が茶色くなり、既にあか抜けた雰囲気だ。地元の国立大学の工学部に進学していて、専攻は建築。手始めに、母校の校舎の図面を借りてきて書き写せと言われたらしい。黒い筒のような図面ケースを肩からかけていた。

「それにしても、相変わらずだな、おまえは」

南は荷物を、いつも置いていた棚の上に置きながら笑った。大学での授業の様子や、新しく入った吹奏楽部の話を聞きながら、未来はその楽し気な様子に、初めて来年が待ち遠しいと思った。未成年なのに酒を飲まされて記憶がなくなったなどと、およそ南らしくない話も飛び出し、なんだか南が急に大人になってしまったような気もした。話のネタは尽きなかったが、ふと、未来は思い立って、

「先輩、前に木村先生と城戸先生が付き合ってるって言うってたの、誰に聞いたんですか？」

「ああ、何だよいきなり。誰かに聞いたわけじゃなくて、偶然廊下であの二人が話してるのを見たとき、木村先生が城戸のこと、唯、って呼んでたからさ」

「……、」
逃れようのない事実を突きつけられた気がして、未来は愕然とする。

「そんなことより、彼女できたのか？」

その南の言葉も、もう未来には届かなかった。

夜、窓を開けて外を眺めながら、未来は自覚していた以上に城戸への想いが大きくなっていたことを悟り、その苦しさは何度も溜め息をついた。自分にも沙耶という恋人がいるにもかかわらず、城戸にもそういう相手がいたことを心の中で責めてしまふ。城戸の優しさはやはり、未来だけでなく、どの生徒にも与えられる、同じ質のものだったのだ。ましてや、未来に対する恋愛感情など、あるはずがない。自分だけが特別と、勝手に思い込んで、それを心の支えにしていたことが急に恥ずかしくなり、未来は怒りに任せてベッドに身を投げた。そのまま仰向けになり、ギョツと目を閉じる。腹が立っているはずなのに、浮かんでくるのは城戸の優しい言葉と柔らかな笑顔ばかりで、それを追い払おうと、未来は頭から布団を被った。保健室の白いカーテンの向こうで、二つの影が動くのが見える。

いけないと思いつつも、未来は目を凝らした。楽しそうにじゃれあう二人は、時々笑い声を漏らし、誰かに見られているとは思ってもない様子だ。未来は急に腹が立って、その薄いカーテンを思い切り開けた。

「未来！いつまで寝てるの！遅刻するわよ？」

飛び起きた未来は、頭痛に顔をしかめた。どうやら、熱があるようだ。その様子に気付いた母親は、体温計を未来に渡す。

「ゆづべ、遅くまで起きてたみたいだけど、無理して体壊しちゃ、なんにもならないでしょ？」

未来が勉強していたものと思い込んでいる。それは好都合だったが、未来は午後になって四〇度の高熱を出し、病院へ連れて行かれた。未来の父親は医者だが、勤めているのが大病院ということもあり、普段のちょっとした病気は、近所の内科で済ませる。美人だが厳しい女医に、体が弱いくせに無理をすることを、本人の自覚がないのが一番いけません、と叱られ、未来の心はますます弱ってしまった。入院するよう勧められたが、家で絶対安静にしていることを条件にそれを逃れた未来に、

「入院すれば、楽なのに」

母親が氷枕を取り替えながら、呆れたように言う。

「どうしてそんなに病院がキライなの？」

そのわけは、一つ。当然のように注射器が置いてあり、いつでもその恐怖に怯えなくてはならないから。未来は自分でも情けないが、注射が何より苦手だった。インフルエンザの予防接種ですら、恐怖のあまり貧血を起こして倒れたことが何度もある。

「医者の子なのにな」

それに、入院してしまうと、自分のひ弱さを認めたことになってしまう気がした。普通の健康な高校生なら、風邪をひいたくらいでそう簡単に入院なんてしない。それが解っているから、未来はいつも無理をしてしまうのだった。

夜になり、未来の熱は全く下がらないどころか、今度は吐き気がひどくなり、何度も嘔吐した。高熱で内蔵に負担がかかるため、小さい頃から重い風邪にかかるといつもこうだ。夜中、付き合ってくれる両親に申し訳ないと思いつつながら、苦しさで涙が出る。吐き気は翌朝まで続き、薬も飲めない未来は、結局入院することになってしまった。

「……先生には、言わないで、」

病院のベッドの上で、熱に浮かされながら、やっとのことで母親にそれだけ言って、目を閉じる。城戸の風邪はもう治っただろうか、そんなことを思いながら、気を失うように眠りについた。

その景色は、流れるように変わって行った。花のような優しい香りに包まれて、うとうとと微睡んでいた未来は、目を開けることに変わる景色に、そこが車の中であることを思い出した。ラジオから流れるのは、中学の時の合唱コンクールで歌った曲で、未来の大好きな曲だ。

「懐かしい曲、」

運転席の城戸が、そう言ってラジオのボリュームを上げる。聞く

と、城戸も中学の時にこれを歌ったことがあるらしい。ピアノが弾ける城戸は専ら伴奏役で、気持ち良さそうに歌うクラスメイトが羨ましかった、と笑った。思い出の中に残る、幾つものメロディ。学校の音楽の時間に習った曲も、コンクールで演奏した曲も、聴けばその時の記憶が鮮明によりみができる。不思議なことに、楽しかった思い出ばかりが浮かんだ。音楽とはそういうものなのかも知れない。悲しい記憶も、いい思い出に変換され、メロディとともに再び姿を現すのかも知れない。城戸との思い出が、何年か経ったある日、この曲に乗って現れたとき、自分は何を思うのだろう。そんなことを考えていた。

外の景色はどんどん流れて行く。何処まで行くの？と聞こうとしたが、このまま遠くへ、何処までも連れて行ってほしい気がした。

次に目が覚めたとき、未来はぼんやりと見える空間に、好きな香りを見つけてその主を探した。窓辺に佇む城戸の姿が、やがてハッキリと見えてきて、未来は起き上がろうとした。

「まだ起きないほうがいいよ、」

気付いた城戸が、慌てて未来を止める。城戸がそばにいると思うだけで、随分苦痛が和らいだ。未来はただジッと、城戸の目を見つめる。

「お宅に伺ったら、入院してるって聞いて……。ビックリしたよ」「言うなって言ったのに。母親を心の中で恨みながらも、未来はこの状況を嬉しく思ってもいた。城戸の訪問に驚喜している母親の姿を思い浮かべると、少し恥ずかしいが……。城戸はベッドの横の椅子に腰を下ろし、冷やしたタオルで汗を拭いてくれる。

「……僕が風邪を移してしまったのかも知れないね」

「ごめんね、と本当にすまなそうに謝った。未来は慌てて首を横に振る。こうなることが解っていたから、城戸には知られたくなかったのだ。あの日、勝手に傷ついた未来は、窓を開けたまま、いつの間にか眠っていた。城戸のことになると冷静さを失う、自分の幼さ

が招いたことだ。

すぐ側の甘くて切ない香りに、再び現実から遠ざかって行くのを感じ、もっと話したいのに、と悔しい気持ちに襲われる。しかし、睡魔は容赦なく、未来を連れ去ろうとしていた。

「今、……先生とドライブしてたよね、……何処へ、行くんだっただの、」

その未来の言葉に、城戸はこれ以上ないくらいの優しい表情を浮かべ、未来の頬をそっと撫でる。

「何処でも、未来の好きなところへ行こう。元気になったら、連れて行ってあげる」

何だか今日は、願った通りに事が進んでいく。それに気付いた未来は、急に可笑しくなって吹き出した。

「夢だよ、絶対……」

そう言って、再び目を閉じた。

「先輩、お見舞いきたよ」

退院して、自宅に戻っていた未来を、沙耶とマキが訪ねてきた。

二人で選んだというお見舞いの花が、部屋中に淡い香りを漂わせている。その香りの中でも、記憶の中の城戸の香水を辿ろうとする自分に気付いて、胸が苦しくなった。

「大丈夫？まだ辛いの？」

「……ううん、起きたばかりで、寝惚けてるだけ」

それも、嘘ではない。ずっと寝ていたせいで、昼も夜も解らなくなっていた。

「入院してたなんて、知らなかった。なんか、寂しいな」

沙耶が、本当に寂しそうにそんな表情を浮かべる。

「別に、隠してたわけじゃないよ、……ホントに酷い風邪でさ、体が動かなかっただ」

「うん、……お母さんから、聞いたから、知ってる」

「心配かけて、ごめん」

珍しく元気がない沙耶にその声をかけ、頭をそつと撫でた。すると、ようやく安心したように、笑顔を見せる。未来も、ホツとした。沙耶は、一緒にいて安らげる、大切な存在。彼女が笑顔になると、未来も、笑顔になれる。沙耶を好きだと思ふ気持ちは、間違いなく、未来の中にあつた。そのことに、ホツとしたのかも知れない。

「先輩、早く元気になって下さいよ。今度の楽譜、難しくつて。先輩がいないと吹けないです」

今度はマキが、甘えたように言った。

「杏奈がいるだろ？」

「女の先輩には、聞きにくいんだもん」

その言葉に、沙耶がマキを睨む。

「マキ、同じ部活だからって、私のカレシにあんまりベタベタしないですよ」

「だって優しいんだもん、ね？先輩？」

私のカレシ、と言われて、未来はドキツとした。マキを牽制したのではなく、未来に、それを忘れるなど注意された気がした。沙耶は、俺の、カノジョ。解っているけれど、しつかりと言ひ聞かせておかないと、ふとした隙に、心が違ふところへ行こうとしてしまう。沙耶は、俺の、カノジョ。未来はそう何度も胸の中で呟いた。

季節はまた、梅雨にさしかかっていた。蒸し暑い日が続く、晴れたと思つたら突然の雷雨。そうかと思えばしとすとと霧雨が降り続き、暑さに慣れてきた体はその肌寒さに震えた。毎年のことながら、その鬱陶しさに気分が減入る。いっそ、四季のない国へ行きたい、と言つと、留学する気になったのか、と父親が笑つた。

「留学はしないよ。俺、数学の教師になろうと思つて、」

夕食の時間、家族の前で、初めてそう口にした。驚いて顔を見合させた両親は、しばらく未来の顔を見ていたが、

「ホントに？あんた、人前で教えられるの？」

母親は未だに未来が、姉の後ろに隠れて人目を避けていた頃のイメージを捨てられないようだ。

「大丈夫だよ。もう決めたから」

「そうか！自分で決めたのか。大人になったじゃないか」

父親は嬉しそうに未来の背中を叩く。

「先生は体力勝負だぞ？今からしっかり食べて、丈夫になつとかないとな」

未来の両親は、なんでもすぐ成功したつもりになって浮かれるところがある。進路を決めたとは言っても、まだ四年以上も先のことだ。大学も決まっていない未来にはまだ現実味を帯びず、両親の気楽さに呆れて部屋に戻った。

蒸し暑さに窓を開けると、甘い花の香り。風が運んできたのだろうか。急に時間が巻き戻され、未来はあの日の通学路を歩いている自分を見た気がした。慌てて階段を駆け下り、

「母さん、今、外でしてる匂い、何の匂い？」

リビングでくつろいでいた母親は、何、突然、と訝し気に窓を開ける。息を吸い込んですぐ、

「ああ、夏みかんよ。庭にあるでしょ」

と、意外なことを言った。何処から来るのかと思ったら、自分の家の庭だったとは。未来は開けた窓の隙間から覗くミミを撫でたくなり、一時、雨の上がった庭へと出た。リビングの明かりで目が赤く光っているのを見ると、いつも違う動物のようで可笑的い。未来はいつになく活発に動くミミにおやつを与えながら、庭の隅の白い花の咲いた木を見つめた。この花は、不思議と雨が降っているときに強く香る気がする。

「夏みかんだって。全然みかんの匂いじゃないよね」

ミミに向かって言ったところで、嬉しそうに尻尾を振るだけだ。

しかし、あの日の想い出の香りの名前を知って、少し前に進めたよな、そんな気分になれた。

中間試験と期末試験の間に、実力試験と言う名の試験週間がある。それは未来が最も恐れる試験で、五教科だけで楽そうにも見えるが、教科書などまるで関係なく、ほぼ入試問題に近い難問ばかりが出題される。どの教科もそれは同じで、勉強せずに受けると、0点を取る可能性も少なくなかった。一年生の時、得意な数学でさえ、十五点という屈辱的な点数だったことがある。

「誰が作ってるんだろうな。試験問題、」

物理の試験が終わった休み時間、恨めしそうに正紀が言った。

「生徒をいじめるのが、そんなに楽しいのかな」

未来もそれには同感だった。重箱の隅、という感じのいやらしさもあれば、純粹に解くのが難しい問題もある。それが組み合わせされると、もうお手上げだ。当然、隅々まで網羅していない未来の勉強では、それ以前の問題だったが。

昼休みを挟んで、英語の試験がある。未来は久々に杏奈と食事をしながら、単語帳を目で追っていた。

「英語は、長文に知らない動詞がメインで出たら、終わりだよな」

杏奈もそれほど英語が得意ではないらしく、そんなことを言った。

「今回は、城戸先生が作ったらしいよ？」

杏奈の口から城戸の名前を聞くと、去年の事件を思い出さずにはいられず、思わずその顔を見る。

「……もう全然平気だよ？昨日も質問に行ったんだから」

そのセリフに、未来は食事をする手が止まってしまった。同じクラスで、事情を知るのが未来だけだということもあり、杏奈は城戸のことを未来によく話すようになった。未来の気持ちを知るはずもない彼女は、城戸の態度や仕草をつぶさに報告する。以前と変わらず接する城戸に対し、

「私と話すの、何とも思わないのかな」

不本意そうに言って、

「告白されるのなんて、慣れてるのよね、きつと、」

と、未来に同意を求めた。未来の感じるところでは、杏奈はまだ、

城戸のことを以前と変わらずに想っている。自分で深刻に考えないように調教しただけのことで、本音を聞けばまた、涙ながらに語るのかも知れない。しかし、こうやってクラスメイトに相談できる杏奈を、未来は羨ましく思った。

風邪で入院してから、未来の城戸に対する想いは急激に大きくなり、自分ではもうどうすることもできない状態にまで陥っていた。自宅で母親が城戸の名を口にするだけで、赤面してしまう。学校で誰かが、唯様がね、と噂話をするだけで、聞き耳を立ててしまう。英語の授業中、城戸と目が合うたび、どうしていいか解らなくなつて胸が苦しかった。最近では放課後に英語の勉強をしても、授業中の城戸を思い出して、教科書が全然頭に入らない。右肩上がりだった英語の成績も、ぱったりその勢いを弱めていた。

實力試験が終わつた週末、未来は思い切つて俊介を呼び出した。苦しくて、苦しくて、どうしようもなく、少しでも胸の内を、聞いて欲しかったからだ。

「何だよ？真剣な顔しちゃつて」
いつものように、軽い口調で言つて、暑いな、今日、とシートに腰を下ろす。しかし、未来の思い詰めた様子にふと真面目な表情になり、

「何かあつた？」

と尋ねた。未来はそれでもまだ打ち明けていいものかどうか悩んで、しばらく俯いていると、

「中野と別れる、とか？」

「……、」

最近、以前ほど沙耶と会っていないことを、俊介は知っているのかも知れない。

「俺が紹介したからって、気にすることないよ。他に好きな子ができたんならさ、」

俊介はそう言つて、最近未来が杏奈と仲良くしていることに触れ

た。

「杏奈は、関係ないよ。部活が同じで、気楽だから、」

「じゃあ、誰、」

聞かれて、未来は首を横に振った。やっぱり言えない。いくら親友でも。

「沙耶のこと、好きだよ。今も会ってるし、すごく可愛いと思う。別れたいなんて、思ったことない」

それは本当のことだった。会えばキスもするし、Sexもする。その瞬間は全部忘れられたし、幸せだとも思った。しかし、それを遥かに上回る気持ち、別の人間に向けられている現実。決して打ち明けることのできない気持ちを抱えて、もう限界だと、俊介に語った。

「……未来、」

俊介はしばらく、言葉を探しているのか、未来の目を見つめたまま黙っていたが、やがてフツとその硬い表情を崩した。

「その相手ってさ、俺、解っちゃったんだけど」

「え？」

「言っていい？」

未来は慌てて首を横に振った。俊介は軽い感じの口調とは違い、相手の心を敏感に察して臨機応変に振る舞える柔軟さを持っている。それゆえ、友達や後輩から慕われ、相談事を持ちかけられることも多かった。もしその名前が俊介の口から出てしまったら、もう友達でいられなくなる気がしたから。

「別に、軽蔑したりしないよ」

その一言で、俊介の解ったという言葉が本当なのだと知れた。俊介はそれでも未来の意志を尊重してか、城戸の名前は出さずに、
「優しそうだもんな。……告白してみたら？」

と、ようやくいつものからかうような口調に戻った。まるで、相手が同性だということなど、二の次だと言わんばかりに、
「やってみなきゃ、わかんないと思うよ」

「でも、杏奈が、……友達が告白したら、一人の生徒と個人的に親しくはできないって言われたって、」

思わず杏奈の名を出してしまって自己嫌悪に陥る。俊介は口が堅く、口外されることはないと解っていても、言うべきではなかった。自分のことで精一杯になっっている今の状況が情けなくなり、目に涙を浮かべている未来を見て、俊介は可笑しそうに笑う。

「なんで好きになったんだよ？」

そのきわめて単純な質問に、即答できず困っていると、

「顔？ 雰囲気？ 性格？」

「……全部、」

とうとう、俊介は爆笑した。それなら迷うことないじゃん、と冷めかけのハンバーガーを食べきった。食べないならもうよ、と、未来の分に手を伸ばしながら、

「二人で話したこと、あるのかよ？ 連絡事項とかじゃなくて、個人的に、」

「うん、何度も」

俊介は、それには驚いた様子で、

「マジで？ 俺が何人かの女子に聞いたところでは、勉強の話以外、ほとんど喋ったことないって言ってたぜ。授業の後、質問に行ったりしても、それだけだつて。自分に興味を持ってもらおうとして、どんなにアピールしてもダメだし、逆にプライベートなこと聞いても、自分のことは一切喋ろうとしなくて、いつもはぐらかされるらしいよ」

今度は未来が驚いてしまった。急に鼓動が乱れて、苦しくなる。そんなふうにしたことは、一度もなかった。むしろ、話をするたびに、二人の間の距離は、どんどん、近くなる……。

『森下くんの楽器は、どれ？』

『未来、って、いい名前だね』

『未来、頑張れ』

いつも、見守ってくれているような、気がした。困っているとき、励ましてほしいとき、いつも優しい言葉をかけてくれた。しかし、それは、誰にでもそうなのだと、思っていた。

「決定的なこと、教えてやるうか」

未来と城戸との会話の幾つかを聞いた俊介は、こう言った。

「城戸の噂は毎日のように女子から聞くけど、生徒を名前で呼ぶなんて聞いたことない」

未来も、それは薄々、感じていた。授業中は皆と同じように、森下くん、と呼ばれていたが、放課後になると、未来、に変わる。

「それに、アドレスを知ってるなんてヤツも聞いたことない。そんなのバレたら、女子に殺されるぜ、おまえ。……まあ、可哀想だから、黙っててやるよ、」

と未来の肩を叩き、そろそろ塾に行くわ、と俊介は帰って行った。

俊介に会う前より、苦しさが増していた。本当に、自分だけが、特別？そうであってほしいと願ったくせに、急に怖くなる。でも、どうして？その質問はもう、本人にぶつけるしかないのだろう。ただ、そうするにはまだ、早すぎる。残りの学校生活を思うと、また溜め息が出た。

約束（前書き）

この小説、実は既に完成しているのですが、今までは何も考えず、かなりの文字数ごとにアップしてきましたが、読むほうも大変なのは……と今さら気付いたので、今回から少し、短めにします（^ ^ ; これからも、よろしくお願いします！

約束

? 約束

夏休みが近づき、コンクールに向けての最後の追い上げにかかっていた未来だったが、不安定な心に体まで弄ばれ、また夏バテに苦しんでいた。しかも、今年は例年になく異常な暑さで、連日、各地で最高気温を更新し、熱中症に対する注意が呼びかけられている。それでもコンクールは予定通り行われるわけで、厳しい菜々子が目を光らせている中、気楽に休憩することもできず、気分が悪くなっても限界まで我慢をして、音楽室を飛び出して行く部員も目立った。そんなある日、化学の授業中、薬品の匂いのせいか頭痛がひどく、目眩がしてきた未来は、教師に断って教室の外に出た。しばらく、廊下の壁に凭れて座り、顔を伏せていたが、一向に良くならないため、そのまま保健室に向かった。

「熱はないみたいね。貧血かな」

木村はそう言って、未来をベッドに寝かせると、白いカーテンをひきながら、おやすみ、と笑顔で言った。城戸との関係はともかく、木村の声や手は、不思議と未来を安心させた。木村を、嫌いなわけではない。むしろ、解りやすい優しさが、好きだった。恋敵を憎みきれない自分が情けなくて、溜め息になる。木村がカーテンの向こうで何やら作業をしているのを感じながら、未来の意識は遠のいていった。

遠くで聞き慣れない音がする。それが目覚ましの音なのか電話の音なのか考えているうちに、自分が保健室にいることを思い出した。パタパタとスリッパで走り、受話器を上げる音が聞こえた。

「ああ、唯？どうしたの？」

未来は一気に意識が覚め、その声に集中した。

「四時間目にここに来て、ずっと眠ってるわ」

城戸と木村が自分のことを話しているのだと解った。きっと、化学の教師から担任である城戸に連絡がいつて、それでここに確認の電話を入れたのだろう。

「ちよつと待つてね、」

木村はそう言って電話を保留にし、未来のところへ来た。

「大丈夫？少しは良くなった？」

頷いたものの、目を開けていると天井がぐるぐる回転するような目眩に襲われる。再び目を閉じた未来を見て、

「もうちよつと寝てたほうがいいわ。先生には連絡しとくから、心配しないでね」

再びカーテンを閉め、受話器を取る。

「まだ起きないほうが良さそう。……ねえ、放課後、何か予定入ってる？」

未来は、確かめたくもなかった現実を自分の耳で確認してしまい、思わず涙が出た。嗚咽に震える体を抱きしめ、布団の中で丸くなるくぐもつた木村の声はもう何を話しているのか解らなかったが、未来はさらに両手で耳を塞いだ。

「森下くん、大丈夫？」

しばらくして、カーテンが開き、木村が声をかけた。

「辛いのか？病院へ行こうか？」

未来の様子に、相当具合が悪いと思い込んでいるようだった。未来は涙を拭き、首を横に振る。

「そう？……私に何かできることある？」

もう、立ち直れない。心が千切れたような痛みにも、涙が止まらない。木村はそんな未来を心配そうに見つめながら、背中をさすった。その優しさが、今の未来には最大のダメージだった。

泣きながらいつの間にか眠ってしまい、次に目を開けた時、未来はその瞼の重さに何度も瞬きをした。忘れかけた幼い頃の記憶が、

ふとよみがえる。明日、また来るからね、と言う母親の背中を見送った後、一人病室に残されて、ずっと泣いていたこと。幼いながらも、心配をかけたくないから、泣くのは一人になってからと決めていた。

「良く寝てたね。気分は良くなった？」

まだ夢と現実の間を抜け出せないまま、頷く。何だか、すごく悲しい夢を見ていたような気分だった。その記憶の糸を辿って見えたものはもう、未来をさっきまでのように激しく傷つけたりはしなかったが、ただチクチクと心の内側を刺した。その痛みにも死に耐える未来に、木村は容赦なく、

「城戸先生は、担任、しっかりやってる？」

未来は一生懸命に感情を殺し、無言で、頷く。

「城戸先生、優しい？」

再び頷き、

「……城戸先生と、いつから付き合ってるの？」

自暴自棄になった未来のその言葉に、木村は何を言い出すんだというような表情になる。

「馬鹿なこと言わないで。あれ、弟よ？私の」

「……え？」

今度は未来が呆気にとられる番だった。何を言われたか理解するのに、しばらく時間がかかった。

「誰に聞いたの、そんなこと」

ああ、ビックリした、と言いながら、ちょうど鳴った電話に、カーテンの外に出て行く。姉なら、名前を呼び捨てにするのは当たり前か。未来は咄嗟に、南を恨んだ。南が誤解して言った言葉に、一年近く悩まされてきた未来は、今すぐ電話をして咎めたい気分だった。しかし、さっきまでの痛い棘は一瞬にして何処かに消え、代わりに空腹を覚えた。解りやすい自分の体に呆れてしまうが、そういえば、朝から何も食べていない。

ドアが開く音がし、誰か尋ねてきたようだ。未来はそろそろ教室

に戻ろうと起き上がり、シーツを整えてカーテンを開けた。談笑する声はすぐに、木村と城戸のものだと解り、未来は急に恥ずかしくなって足を止める。

「もう、どうしたらそんな誤解ができるのかしらね、」

未来に気付いて、木村はその台詞の語尾を未来に向けた。既に話を聞いた後らしく、城戸も可笑しそうに笑って、もう大丈夫？と尋ねる。

「それともまだ具合が悪くて、変なこと言ったの？」

「……だって、名字が違うし、」

未来がやっと思いついた言い訳をすると、

「結婚して変わったのよ。そんなに似てないかな？私たち」

「……似てないです」

そう言ったが、似ている部分を、未来はハッキリと感じていた。

それは、手。触れられると、心が落ち着く。痛みや辛さを、スツと取り除いてくれる、そんな力を持った優しい手だ。

「家まで、送るよ」

授業どころか部活も終わっていて、未来は自分がどれだけ保健室にいたのかと指を折ってみる。明日、菜々子からのお咎めがあるであろうことを想像すると気が重かった。

「先生も、もう帰るんですか？」

「そうだよ。今日は居残りする人もいないしね、」

からかうように言って、未来を助手席に乗せる。木村が放課後の予定を聞いていたのは、未来を自宅まで送らせるためだったらしい。勝手な想像で木村を困らせる程泣いたことが、恥ずかしくて仕方なかった。

「涼しくなったら、何処かドライブに行こうか」

「……え？」

「前に、約束したでしょ。もう忘れた？」

ドキン、と胸が大きな音を立てた。夢だと、思っていた。それでも、忘れるはずがない。夢でも現実でも、城戸の言葉は全て、未来

の心の中にあるから。

ドキドキがおさまらないまま、あつという間に自宅に着くと、挨拶なんてしなくていい、という未来を制して、城戸はいつものようにインターホンを鳴らした。相変わらず甲高い声で城戸と話す母親の横を擦り抜け、家に入ろうとすると、母親に腕を掴まれる。

「ちゃんとお礼を言いなさい。子供じゃないんだから」

「……ありがとうございます」

今度こそ玄関のドアを開けた未来の後ろから、早く元気になってね、という城戸の声が聞こえた。

「あんだ、それでもう目眩は治ったの？」

夕食の間、散々、未来の悪口を父親にこぼした後、母親が尋ねた。

「うん。大丈夫みたい」

「それにしても、ホントに優しいわね、城戸先生。いくら家が近かったって、何度も何度も……」

未来はその途中で大袈裟に溜め息をつき、リビングから庭に出た。ミミの首輪にリードをつけ、そのまま外に出る。昼間の炎天下にさらされたアスファルトが、まだその熱を放っていて、スニーカー越しにも伝わってきた。少し歩いて自宅が見えなくなったところで立ち止まり、星空を見上げると、ミミまでそれを真似る。未来は道路脇の縁石に腰を下ろし、じゃれついてくるミミを膝に乗せた。何だか今日一日で色んなことが起こりすぎた気がして、まだ混乱している。心の中に、その全てが雑然と押し込められているような、そんな苦しさを感じた。

「そういえば、ミミはまだ、あの人に会ったこと、なかったよな」

話しかけると、ミミは嬉しそうに尻尾を振る。未来の自宅は、北側が道路に面していて、エントランスに気持ちばかりの寄せ植えのスペースがある以外は、シャッターつきの要塞のような駐車場が占めている。それが邪魔で道路から庭は見えず、大人しいミミは滅多に吠えないため、この家に犬がいるとは知らない近所の人も多かつ

た。

「そうだ、今度、おまえも一緒に行くか？」

「クウーン、」

それが肯定なのか否定なのか解りかねたが、未来は城戸との約束にミミも同伴することに決めた。ミミを誘って初めて、実感がわいてくる。

「ホントに、いいのかな。どう思う？ミミ」

「ワン！」

珍しく、大きな声で吠えたミミを、未来はギュツと抱きしめた。

そのあまりの強さに、身の危険を感じたのか、ミミが激しくもがく。出掛けた時より、幾らか機嫌を良くして、未来は家に戻った。

今年の夏休みは、受験生というだけで、今までとはひと味もふた味も違った。勉強が何より嫌いな未来も、さすがに怠けてはられないと焦り出し、部活の後は必ず、何かを勉強するようになった。昼間はコンクールのことと頭が一杯だが、部屋に戻ると途端に、もう時間がない、と焦る気持ち姿を現し、そのせいで集中力を欠いてしまう悪循環に陥っていた。

夜、机に向かい、さっぱり解けない物理の問題に頭を抱えていると、携帯が鳴った。沙耶からだ。

「先輩、最近、全然電話くれないね。……部活とか勉強とか、大変だから？」

寂し気な声に、胸が痛む。未来も、気にはしていた。ずっとこのんびり過ごしてきたせいで、時間に追われる日々というのが初めてで、時間配分を考える余裕がなかった。長年のツケが一気に回ってきたような気分だった。

「じゅめん、……ホントに、忙しくてさ」

「今から会いに来て、って言ったら、来てくれる？」

いつになく遠慮がちな言葉に、すぐ行くよ、と言って家を出た。

駅の近くの公園で待っていると、やがて沙耶が走ってやってきた。

「会いたかった、」

震える声で言い、未来に抱きつく。

「先輩が浮気でもしてるんじゃないかって、心配で、」

その言葉に、また未来の胸は痛んだ。浮気という行為に、限りなく近い気持ちを、抱いていたから。

「ホントにごめんな、」

沙耶に会えば、沙耶を愛している自分を再確認する。だから、いつも別れを切り出せなかった。本当に別れたいわけじゃない、でも、どちらも好きだなんて、許されない。

「ミミちゃんに会いたいな」

それは遠回しに、Sexがしたいという意味だ。未来も承知で、沙耶を連れ帰る。運良く母親は入浴中で、一体何をやっているのか一時間以上は出てこないことが解っている。二人は足音を忍ばせて階段を上がった。

「今日、なんだかいつもと違った、」

うっとりとして、沙耶が未来に抱きつく。

「そんなことないよ、」

「違ったよ、」

そんな会話をしながら、服を着た二人は、堂々とリビングから庭に出た。風呂から上がり、あら、いらっしやい、と言う母親に、お邪魔してまず、と平然と挨拶をする沙耶を見て、その神経の太さに驚かされる。男と女では、根本的に、精神面の作りが違うということに、納得した。

城戸を思う気持ちが膨らんでいく一方で、沙耶を手放したくないと真剣に思う自分が、沙耶に会うたび、未来を悩ませる。罪悪感に押しつぶされそうで、あれから俊介にもう一度相談したが、別に別れることないんじゃないの？と軽い返事だった。

「もし、万が一、城戸とそういう関係になったとき、考えれば？」

その言葉に赤面した未来を見て、

「未来のはまだ、浮気までいってないよ」
と、俊介は笑った。

コンクール

? コンクール

西日にさらされ色褪せたカーテン、古いグランドピアノ、二分だけ、進んだ時計。後ろの黒板には、コンクールでの各々の役割分担が書かれている。この音楽室とも、もうお別れ。コンクール前日、午前中で練習を終えた未来は、会場へと楽器を運ぶトラックに打楽器や大きな金管楽器を乗せた後、言いようのない寂しさに打ちひしがれていた。中学の時にも同じ寂しさを乗り越えて、また高校で新しい部員たちとの友情を温めてきたが、前回にはなかった複雑な感情が胸の中で弾けて、苦しい。想い出がまだ新しいまま、はちきれそうに詰まっているから。時間が経って、また新たな想い出が重ねられたら、徐々に心の中へと浸透して行くのだろうか。未来はそんなことを思った。

明日の本番を前に、感傷に浸るのはまだ早い、と自分に言い聞かせながら、未来は黒い楽器ケースを抱えて音楽室を後にした。明日、うまく吹けるんだろうか。最後まで練習した高音部は、よつぼどることがない限り、外すことはない。そう解っていて、決して失敗できないという責任感、重圧。去年の南の気持ちにようやく辿り着いた気がしていた。

しかし、帰宅すると、思いもよらなかった人物の声に、未来は靴をそろえるのも忘れてリビングに飛び込んだ。

「未来！久しぶりね。元気だった？」

「……、」

まだ半年も経っていないのに、懐かしさで言葉に詰まる。瑠未はずっと短くしていた髪を伸ばし、僅かに化粧をしているようだった。「明日コンクールだって聞いて、バイト早めに休みもらって帰って

きたんだから」

「さあ、お昼ご飯にしましょう、と母親が声をかける。

「瑠末も今、帰ってきたところなのよ？ 未来はちゃんと手を洗ったの？」

本番前に、お腹が痛くなっても知らないわよ、と、食中毒の菌が何処にでもいる話を始める。

「で、どうなの？ 練習はバッチリ？」

「……うん」

「何よ、自信ないの？」

「それより、大学はどうなんだよ？ 楽しい？」

今は明日のことを考えたくなくて、話題を変えてみる。瑠末はあれから五月に一度だけ、インターネットのテレビ電話で話したきり、連絡を超越さなかった。その時も、バイトが忙しい、サークルが忙しいと、大学生活を満喫しているような素振りだった。

「医学部は、勉強するところなのね」

当たり前だろう、と呆れる父親。未来もそれには吹き出した。

「だってね、他の学部の子は、幾つもバイト、掛け持ちしてるの。

貯めたお金で海外旅行に行くんだって。でも、私はどう考えたってそんなの無理。家庭教師で二、三人教えるだけで、精一杯だわ」

要領のいい瑠末が言うのだから、本当に大変なのだろう。しかし、苦勞して稼いだお金で洋服を買ったり部屋の小物を買ったりするのが何よりの楽しみだと言った。姉の部屋が殺風景だったのは、飾ることに気が回らない程、勉強に集中していたから。そんな努力を微塵も見せず、常に明るく振る舞っていた姉を思い出し、未来は自分のあまりの至らなさに不安すら覚えた。

風呂上がり、何年ぶりかで、未来は瑠末と、庭に出て花火をして遊んだ。怖いのか、面白いのか、近寄っては逃げるミミに笑いながら、綺麗に散る火花を眺めていると、懐かしさに胸の奥がキュン、と音を立てる。その蛍光色と、煙の匂いは、容易に未来を子供の頃へと連れて行った。恐がりだった未来は、線香花火さえ怖くて、い

つも一番綺麗な時に地面に落としてしまう。そんな弟に、瑠未は最後の小さな火花になってから、花火を手渡してくれた。同じことを思い出しているのか、瑠未はしばらく、線香花火の残り火を見つめていたが、

「城戸先生とはどうなったの？」

よりによつて、今そんなことを聞かなくても。一気に現実を引き戻された未来は、姉を睨んだ。

「明日、また観に来てくれるって？」

「……知らないよ、そんなこと」

「あら、そう？」

意地悪な言い方も、何だか懐かしかった。瑠未はそれ以上は聞かず、さあ、明日に備えて早く寝なさいよ、と母親のように言って、花火に水をかけた。

部屋に戻った未来は、携帯の着信ランプに気付き、履歴を確認した。知らない、番号。その相手は、一人しかいない気がした。急に心拍数が上がり、苦しくなってくる。留守電は入っておらず、必然的に折り返さなければならぬことを悟りながら、しばらく携帯を握りしめたまま、立ち尽くした。しかし、意を決して、震える指で発信ボタンを押す。

「未来？」

名前を呼ばただけで、涙が出そうになった。城戸は、遅い時間に「ごめんね」と謝った後、

「明日、頑張つて。観に行くから」

何か言わなければ、と思えば思うほど、何も言葉にできない。黙っている、

「未来のことだから、すごく緊張してるんじゃないかと思って」

いつものように、柔らかい口調で言った。それで少し安心した未来は、

「今度は、メールじゃないんですね」

顔が見えないと、大胆になるのか、そんなことを言っていた。番号は恐らく、以前アドレスと一緒に瑠末が教えていたのだろう。城戸は、あの時の未来の気持ちを知っているかのように、メールじゃ返事に困るだろうから、と笑った。確かに、と言いそうになって、未来も思わず笑う。緊張の糸が切れ、しばらくの間、姉が北海道から帰省していることや、今花火をしていたことを話していたが、「明日に支障が出るといけないから、このくらいにしておくよ」と城戸が言った。まだ話したいと思う未来に、未来なら大丈夫、自信持ってね、と電話は切れた。

余計なことは、考えなくてもいいのかも知れない。詮索や、計算や、駆け引きなんて、まだ知りたくない。人を好きになるといふことの苦しさを噛みしめながら、未来は手のひらの熱の残る携帯を胸に当てた。

翌日はいつも以上に早く目が覚め、ミミを連れ出した未来は近所の公園を一周し、スッキリした気分朝の食卓についた。すると眠そうにあくびをしながら隣に座った瑠末が、

「夕べ、誰と電話してたのよ？」

と、まるで相手を知っているかのような口調で言った。隣り合った子供部屋の間の壁は薄いのか、それとも未来の声が大きすぎたのか、考えながら黙っていると、

「沙耶ちゃんでしょ。あの子可愛いわよね、」

と、食事を運んできた母親が、無意識の助け舟を出してくれた。

「へえ、彼女と敬語で話すのかしら」

辛うじて母親には聞こえない声で、未来の耳元に囁いた。そんな嫌がらせに遭っても、今日の未来の心は折れない。楽器ケースを抱えた未来は、いつてきます、と元気に家を出た。電車の中で数人の後輩部員に会い、それも連れて一年ぶりの会場に着くと、OBたちが手を振って出迎えてくれた。

「先輩！」

「おいおい、こないだ会ったばかりだろ」

南がまた大袈裟な歓迎を笑い、

「自由曲、トランペットの目立つヤツを選んだもんだな。大丈夫か？」

からかうように言う。未来は技術より、今の落ち着いた心の中を見せたいと思った。夕べ城戸と話してから、不安だった高音部が、何でもないことのように思えるようになり、それが決して自暴自棄になったからではなく、きちんと積み重ねた練習の成果だと自信を持てるようになった。もし今年も入賞できたら、人の目など気にせず一番に城戸のところに報告に行こうと、決めていた。

未来たちが自由曲に選んだ「アルヴァマー序曲」という楽曲は、毎年何処かが演奏すると解っているほど人気の曲だ。それでもあえてこの曲にしたのは、中学のとき、他校が演奏していて好きになり、いつかは自分たちもやってみたいと思っていた部員が多かったから。中学生でも演奏できるという点で、難易度的には不利なのだが、終始、メジャー調で軽やかなこの曲の雰囲気を出すには、技術よりも体力を必要とし、相当の練習量が必要になる。顧問の河合も、こういう曲が実は一番難しいんだぞ、と、雑になりがちな演奏を何度も注意した。トランペットのパートは、主旋律の誰もが知るメロディをいかに伸びやかに吹くかが大切で、未来は今までと質の違う難しさに苦戦した。

未来なら大丈夫。その声に励まされ、自分でもビツクリするほど、完璧に演奏しきった。未来の気持ちを映しているかのよう、晴れやかな音は、自由曲の雰囲気ピッタリだったと、演奏を終えた直後、河合からお褒めの言葉も頂いた。結果発表を待つロビーで、河合は未来の顔を見ながら、ぽつん、とこう言った。

「今年は、ひよっとするかもしれないぞ」

それが何を意味するのか。聞こえていた部員たちが騒然となる。

「先生、あんまり期待させると、あとが辛いですから。そうだよな

？」

南がからかうように言う。そのあとで、

「俺もハンカチの用意をしてくるんだったな、」

と、さらに期待に拍車をかけるようなことを言って、部員たちを笑わせた。

河合の勘は的中し、未来たちはなんと初めての金賞に輝いた。とても信じられない。皆、抱き合うことすら忘れて泣きじゃくった。未来も例外ではなく、杏奈と後輩たちとで手を握り合い、表彰式が終わったあと、いつまでも泣いていた。鬼の目にも涙で、河合もハンカチで何度も涙を拭っている。それを見て、せつかく泣き止んだ部員たちは、また声を上げて泣いた。

皆がそれぞれに片付けを終え、最後の楽器をトラックに積んで、その場は解散になった。部員たちが喜びを分かち合う瞬間の邪魔をしまいと申し合わせた担任や家族が、ようやく個々に声をかけ始める。未来はすぐに城戸の姿を見つけたが、その前に杏奈がいることに気付いて思いとどまり、ちょうど現れた家族と合流した。

「未来、ありがとう、」

母親は号泣していて、化粧が恐ろしい状態になっていた。父親も感無量と言った感じで、しきりに頷くだけで何も言わない。瑠未だけが笑顔で、さすが未来だね、と背中を叩いた。

「他にも報告に行かなきゃいけない人がいるんじゃないの？」

瑠未のその言葉に、泣いていた母親が顔を上げる。

「そうよ、城戸先生のところに行ってご挨拶していらっしやい」

もう一度城戸のほうを見ると、まだ杏奈と話をしているようで、

「いいよ、別に。また今度お礼を言うよ」

精一杯の強がりを言って、家族と会場を出た。無理しちゃって、と、また耳元で意地悪に囁く瑠未を睨みながら駅に向かって歩いていると、ポケットで携帯の音。見ると、城戸からのメールだった。

『おめでとう。本当に良かったね。未来の力は本物だから、これからも自信を持ってね』

未来は、ちよつと用事ができたから、と、踵を返し、会場に駆け戻った。さつきまでいた場所にもう城戸の姿はなく、杏奈も見当たらなかった。楽器ケースを抱えて、会場のロビーや中庭を探したけれど見つけれず、諦めて帰ろうとした時、後ろでクラクションが鳴った。

「乗って、」

後ろにも会場を出る車の列。未来は慌てて城戸の車に乗り込んでドアを閉めた。何も言わないまま、車は街を抜け、未来の知らない道を通って、いつの間にか近所の駅裏を走っていた。

「近道だよ。遅刻しそうなとき、いつもこの道を通ってた」

車では、通りにくいけどね、と笑う。

「先生、この学校の卒業生なんですよね？」

何の他意もなく尋ねたつもりだったが、フツと城戸の笑顔が消えた。

「……卒業は、してないよ。事情があつて」

いつになく硬い表情に、それ以上は聞けなかった。やがていつもの坂道に出て、学校の駐車場に着く。

「音楽室へ、行っていいですか」

未来は最後にもう一度、あの部屋にお別れを言いたくて、そう言っていた。もしかしたら、未来がそれを願っていると知っていて、この場所に戻ったのだろうか。城戸が優しい笑顔で頷くのを見て、未来はふと、そう思った。

音楽室の窓を開けると、日中の陽射しで澱んでいた空気がスツと外に逃げて行く。日が傾き始めて、やがて一日が終わってしまう寂しさに、もう少し待って、と叫びたくなった。殆どの楽器を持ち出して、がらん、とした準備室で、未来は、その場所に何が置いてあったか、一つ一つ思い出してみる。大太鼓、小太鼓、夕日を反射して眩しいシンバル。たまにしか出番はないのに、場所を取る木琴と鉄琴。所狭しと並んだ全員の譜面台、色とりどりの楽譜のファイル。いつもカバンの手をひっかけるティンパニの調節ネジを思い

浮かべて少し可笑しくなった。……この部屋とも、お別れ。不意に寂しさがこみ上げ、未来は慌てて音楽室のほうに戻った。

城戸は窓辺に立ち、遠くを見つめているようだった。その整った横顔に、一筋の影を見出した未来は、ふとさっきの会話を思い出す。卒業は、していないと言った。それはどういうことなのか。様々なことが頭に浮かんだが、そのどれかを特定することも、ましてや尋ねることなどできるはずもなく、黙って夕日に染まる街を眺める。やがて未来に気付いた城戸は、取り繕うようにその表情を和ませ、お別れは済んだ？と尋ねた。

「ありがとうございます」

母親に言われたからというわけではないが、しっかりと、お礼を言ったことがなかった気がして、一礼する。

「先生のおかげです。すごく、嬉しかった」

堪えている涙は、簡単に未来の瞳から溢れ出そうとする。城戸の前ではもう泣くまいと思っていたのに、俯いた未来の目から零れて床に落ちた。

「本当に、よく頑張ったね、未来」

城戸はそう言って、未来を抱きしめた。

「嬉しい涙は、恥ずかしくなんかないよ。悲しい涙も、その後には、心から悲しみを連れて行ってくれるから、泣きたい時は、我慢しなくていいんだよ」

優しい言葉が、未来の心にスツと染みて、涙が止まらなかった。ずっと、自分に自信がなかった。大好きなトランプペットも、数学も、自分が一番ではないと思っていた。そんな未来に、一つ一つ自信の種をまいて、未来の力で育ち、開花するよう、手助けをしてくれた。優しさという水で。

どれくらい城戸の胸に抱かれていたのか、ようやく気が済んだ未来は、そっと城戸から離れた。教室の中はもう薄暗く、そのせいか、城戸の顔が寂し気に見える。初めて見るその表情に、未来はふと不安を覚えた。どうしたのかと尋ねようとしたが、城戸はもう、いつ

もの柔らかい笑顔を取り戻して、

「もう、帰っても大丈夫？」

からかうように、未来に尋ねた。

「まだ、もう少し。……ピアノが、聴きたいです」

城戸は少し驚いたようだったが、いいよ、と言って明かりを見つけようとした。

「ダメ、」

未来は思わず駆け寄って、その手を止める。泣きはらした顔を、見られたくない。

「このままがいい、」

解った、と笑い、椅子に腰を下ろした。綺麗な指先から、聴いたことのあるメロディが流れ出す。幻想即興曲。瑠未が、最後の発表会で弾いた曲だった。高音部はキラキラと輝きを放ち、低音の深い海と交わる。吸い込まれて消えるのではなく、その光は闇と戯れ、追いかけてくをしているようだった。未来はいつしかその深い海の中が、明るく温かいことに気付く。それは紛れもなく、城戸の心の優しさ。これほどまでに心の中を表現するピアノを、未来は知らなかった。

演奏が終わると、城戸は黙ってピアノを閉じ、未来のほうを向く。「ちょうど、この高校に入学した頃に、練習してた曲だよ」

随分暗くなっちゃったね、と今度こそ、明かりをつけた。まるでその闇に、怯えているかのように。

「引退したら、少しはゆっくりできそう？」

下駄箱に向かう廊下で、城戸が尋ねた。

「はい、……寂しいけど、」

つい本音が出てしまう。

「居残りする場所が、なくなっちゃうね」

そう言われて、今さら気付いた未来に、城戸は可笑しそうに笑った。

「教室でやればいいよ。何人か、残ってる日もあるけどね、」
未来は、もう音楽室で城戸と話したり、ピアノを聴いたりできないことに、ますます寂しさを感じた。黙ってしまった未来に城戸は、「今日はホントにおめでとう。ゆっくり休んでね」と言っ
て、いつものように未来を見送った。

過去

? 過去

瑠末が北海道に帰って一ヶ月が過ぎ、森下家はまた、三人と一匹の生活のリズムを取り戻していた。一週間という短い時間でも、長年繰り返してきた生活はあつという間に元通りになり、それが終わる頃には、翌日から瑠末がいないのが不思議なほどだった。しかし、以前ほどの寂しさはなく、人は慣れる生き物なのだと、再確認する。幸せなことや、楽しいことには慣れたくないな、と、未来はコンクールの日を感動を思った。

吹奏楽コンクールで金賞を取るということは、必然的にもう一つ上の大会に出る権利を得ることだったが、進学校ということもあり、それは辞退することになった。引退した未来は、授業が終わると音楽室に向かいそうになる自分に、溜め息をつく毎日だ。しかし、城戸との距離がどんどん縮まっていくことに、嬉しさと怖さが混在し、相変わらず落ち着かない日々を送っていた。

放課後の教室でいつもの居残りをするようになっていた未来は、どうしても城戸に質問したいことができ、職員室に赴いた。しかし、城戸の姿は見えず、またあそこか、と二年五組の教室に向かう。すると、少しだけ開いた扉から、話し声が漏れていた。

「今さら、そんな無責任なことを言い出して、どうするつもりだ」
野口の声だ。未来は悪いと思いつつも、聞き耳を立てた。

「何のために教師になったんだ？二度とあんなことを繰り返したくないからじゃないのか？」

野口の相手が城戸であることは、多分間違いないのだろう。しかし……。

「今度は何があつたか知らないが、結局また逃げるんじゃないか。」

おまえはちつとも成長してないな。あいつに言われたことを、忘れたのか？」

「……忘れたことなんて、ありません」

「それなら、逃げるのはおかしいだろう。……いい加減、あいつを安心させてやれよ。おまえがいつまでたってもそれじゃ、心配でゆつくり眠れないだろうからな」

話の内容の重さを知り、聞いてしまったことを後悔しても、遅かった。しばらく沈黙が続いたあと、

「しつかりしろ！おまえはもう、ここの生徒じゃない。指導する立場なんだぞ？簡単に辞めるなんて口にするな！解ったら、顔を洗ってこい！」

野口の厳しい口調に、未来まで竦んでしまって動けずにいると、やがて中から野口が出てきた。未来が手にしていた英語の教科書に気付いてか、

「何だ、城戸先生に用事なら、また今度にしろ。今はちょっと都合が悪いからな」

まだ不機嫌そうに言って、後ろ手に扉を閉め、廊下を足早に歩いていった。それが入るなと言う意味だとは容易に知れたが、未来は少し迷ったのちにそつと扉を開け、思い切って教室に入った。窓際の席で頭を抱えるように俯いていた城戸が、慌てて涙を拭う。

「先生、……」

泣いているとは思わず、かける言葉が見つけれずにいると、

「……ごめん、」

城戸はそう言って、逃げるように席を立とうとする。未来はそれを止めた。

「狡いよ、自分は悩んでも、言わないなんて。それとも、俺じゃ、頼りないですか？」

先日から、城戸の寂し気な様子は、気になっていた。しかし、未来が弱さに触れる前に、その深いであろう傷を隠してしまう。城戸は未来の真剣な様子に心を動かされたのか、やがて再び腰を下ろし

た。

「野口先生はね、僕が二年生の時の、担任だった人だよ」

城戸の口調は、穏やかだったが、いつもの優しさを覆い尽くすように、ただ悲しみに満ちていた。未来はその前の席に座り、俯いている城戸の悲し気な顔を見つめた。

「小さい頃から仲が良く、いつも一緒に遊んでた智っていう友達がいた。高校も同じで、僕はバスケット部、智は吹奏楽部で部活は違ってたけど、終わると駅前の店で待ち合わせて色々な話をして、楽しかった。お互い、何でも話し合える仲だと、思ってた。……でも、三年生になってすぐ、智は急に、笑わなくなった。僕が聞いても、何でもないって答えるだけで、……授業はちゃんと出てるし、部活にも行ってるみたいだし、気のせいかな、って思った。受験生になって、塾にも行ってたから、急に頑張りすぎて疲れたんだろうって」

城戸は弱々しい声で話し、辛そうに息を吐いた。

「それでも、そんな日が続くと、僕はすごく寂しくなって……。智の素っ気ない態度が、塾にも行かず、部活ばかりやっている僕を、軽蔑してるからなんじゃないかって、思えてきた。だから、僕もだんだん、智と距離を置くようになってしまったんだ」

視線を落とし、指先で、机の傷をなぞる。未来はその綺麗に整った爪先を見ていた。

「梅雨時で、霧雨が降ってた。夕方、部活を終えて駅に着くと、いつものところに智が立ってたんだ。僕は、何も話しかけずにそこを通り過ぎたけど……その夜、なんだか智のことが気になって、眠れなくて。何度も智に電話しようと思ったけど、できなかった。智の冷たい声を聞くのが怖かったから。……次の日、智は……部屋で、首を吊って、死んだ」

未来は体が震えて止まらなかった。思わず、自分で自分を抱きしめる。

「原因は、進路のことだったって、後で智のご両親から聞いて、解ったけど……その時の僕には、何も解らなくて、……どうして何も

してやれなかつたんだろ。……親友が、そんなにも悩んでいたのに。悩みを聞いてほしくてあそこで僕を待ってたのに、どうして、」

城戸はその瞳から幾つも涙を零した。その時の城戸の心情を思うと、胸が張り裂けそうになり、未来はたまらず、机の上で握りしめた城戸の両手に、自分の手を添えた。震えるほど硬く握られ、冷たく、凍えそうなその手が、未来の手に触れ、少しだけ、緩んだ。何とか慰めてやりたい、そう思う反面、城戸の自分への親しみが、その智という吹奏楽部員だった親友と重ねていたからであろうことに、気付かざるを得なかった。……それでもいい。未来は、一生懸命、城戸の冷たい手を温めた。

「……未来、ありがとう」

どれくらい経ったのだらう。教室はもう暗くて、僅かな月明かりだけが窓から射し込んでいた。すぐ目の前にある綺麗な顔からはまだ、完全に悲しみの色が消えたわけではなかったが、いくらか表情を取り戻して、いつもの笑顔を作ってみせる。触れたままの城戸の手が、今度はそつと未来の両手を包んだ。

「未来はこんなにも優しいのに、僕は……」

また、その瞳から、涙が零れ落ちる。月に照らされた彼の顔は、ハツとするほど美しかった。

「僕はいつの間にか、未来を利用してた。自分の傷を癒すための、道具にしてた。それがある日、気がついた」

未来は覚悟していたはずのその言葉に、深く傷つくのを感じた。信じたくない。こんなにも心を奪っておきながら……。

「いつか、未来の楽器を見せてもらった時のこと、覚えてる？」

未来は頷きながら、忘れようのないあの日の出来事を、鮮明に思い出していた。未来のトランペットを手に取った時の、慣れない手つきが可笑しかった。

「智もね、トランペットを持っていたんだ。入学祝いに買ってもらったんだって、自慢してた。でも、どんなに頼んでも、触らせてく

れなくて。きつと何よりも大事にしてるんだな、って、ちよつと悔しかったな」

城戸は、その時の様子を思い出しているのか、ふと柔らかい表情で笑った。

「あの日、未来は、少しも躊躇わずに、僕にトランプペットを差し出してくれたよね。……僕は智なんかじゃない、って言われたような気がして……それで、自分のしてる事が、どんなに愚かなことが解ったよ」

暗い教室で、城戸は何もかも、話してくれた。智が自殺したこと、責任を感じて、学校に行けなくなつたこと。そんな息子を案じて、両親が城戸を、知り合いのいるカナダに留学させたこと。そのホストファミリーの老夫婦に、とても良くしてもらつたこと。

「そのママが、いつまでも心を開かない僕にこう言つたんだ。犯してしまつた過ちは、時間を戻さない限り、消すことはできない。神に祈つてもね、って。でも、再び同じ過ちを繰り返さないために、精一杯努力することはできるんだよ、そう言つて、あるとき、一つの小さな瓶を僕にくれた、……」

『この瓶は、とても良い香りがするでしょ?』

『うん、』

『でも、私にはこの香りがしないのよ。これは不思議な瓶で、心を穏やかにする力を持っているの。心を病んでいるほど、強く香つて抱えている痛みを和らげてくれる。持っている人に本当の笑顔が戻るまで、香り続けるのよ。……私は今、唯が側にいて、とっても幸せだから、何の香りもしないわ。だからこれをあなたにあげる。どんなときも身につけて、笑顔を忘れないようにしなさい。笑っていれば、いつか本当の笑顔が戻ってくるから』

城戸の優しさのわけ。いつも笑顔を絶やさないわけ。未来は常に自分の心と戦ってきたこの教師の孤独を、今初めて知った。

「もう、大丈夫。……職員室に戻らなきゃ。野口先生が、待ってるだろうから」

城戸はそう言っつて、そつと未来の手を離した。立ち上がり、教室を出て行くこうとするその背中に、未来は思わずこう言っつていた。

「最後に一度だけ、智になっつてあげる」

「……、」

「言いたかつたこと、あるんでしょ？何でも言っつてよ」

振り返つた城戸は、信じられないという表情で、立ち尽くしていた。しかし、再び未来の目の前に立っつて手を取り、食い入るようにその目を見つめた。未来にはそれが、自分を通して、あの日の智を見ているのだと、解っつていた。

「……智のこと、何でも知っつてると思っつた。年下の彼女のこと、テストの点数も、……甘いものが好きで、小学校の頃はいつも虫歯を作っつたことも。でも、智の、悩みだけは知らなかつた。一度も打ち明けてくれたことがなかつたから。……頼りなかつたんだよねきつと。お姉ちゃん子で、人見知りで、いつまでたつても子供みたいな僕に、進路の悩みなんて、言えないよね。僕は馬鹿だから、あの日も、智がどうしてあそこに立っつていたのか、解らなかつた。そんな頼りない僕にでも、話したいことが、あつたのにね、……ごめんね、智、……許して、」

泣きながら、崩れるように床に膝をついた。未来は城戸の手を強く握り、離さなかつた。

「もう泣くなよ、唯、」

無意識に、未来の口が動く。

「唯のせいなんかじゃないんだよ。だから、もう自分を許してやれよ。……笑っつて、唯。唯の、笑つた顔、一番好きだよ」

「智、」

その瞬間、未来は信じられない体験をした。自分の体に重なるよ

うに、知らない生徒が立っている。その両手が、まだ幼さの残る城戸の頬に、触れたかのように見えた。

「笑って」

未来の口を通して、その言葉が聞こえると同時に、彼の姿は見えなくなつた。

何が起こつたのか。未来はしばらく、呆然と城戸の手を握つたまま立ち尽くしていた。しかし、これだけは解る。智は城戸のことが心配だつたのだ。いつまでも自分を責めて、決して本当に笑うことのない親友に、もう一度、笑つてほしかつたのだ。

「先生、良かったね」

未来は、敢えていつも自分の冷静さを保つために使つていた敬語をやめた。

「今のは夢じゃないよ。智がホントに先生に会いにきたんだよ」

言いながら、未来は、智が自分に似ていたかどうか、確かめられなかつたことを悔やんだ。そして、智の代役なんて、もう絶対にご免だと、急に怒りが込み上げてくる。

「今のうちにこれだけは言っとくけど、俺は未来だから。もう智の代わりなんてしないよ。それに、先生を辞めたいなんて言うのも禁止だからね。もし、俺を利用したことが原因なら、俺は全然、気にしてないから」

そう言つて、先に教室を出た。立ち聞きしていたことが解つてしまつが、そんなことはどうでもいい。廊下で待っていると、やがて城戸も現れ、未来に気付いて、やっと、いつもの笑顔を見せた。

「ありがとう、未来。もう大丈夫。ホントにありがとう、」

抱きしめられて、その痛い程の強さに、未来はようやく、城戸が作り出していた智という殻を抜け出せたことを知つた。しっかりと、その腕が未来を包む。今までとは、比べ物にならないほど、温かかつた。

二人は並んで、中庭の月明かりが照らす廊下を歩く。お互い、何

も喋らないことが気になって、同時に顔を見合わせた。困ったように笑う城戸は、何だか出来たばかりの友達のように、可笑しい。結局、どちらも口を開かないまま、まだ明かりのついた職員室のドアを開けた。

「……やつと帰ってきたな。全く世話の焼けるヤツだな、」

職員室にはもう野口以外に誰もおらず、それを良いことにテレビを見ていたらしく、スポーツニュースが流れていた。

「何だ、教え子に慰めてもらったのか？」

呆れたように呟いて、二人に手招きをする。奥の休憩室で、野口は無言で珈琲を淹れてくれた。野口の厳しさをあらわしているかのような苦さに顔をしかめていると、

「そういえば、森下。数学以外の勉強はちゃんとやってるんだろな。城戸は甘いから、それをいいことに怠けると、浪人することになるぞ」

何も今言わなくても。未来は思わず溜め息をついてしまった。それを見た城戸が、

「大丈夫、未来はちゃんと毎日居残りして勉強してます。……そういえば、何か質問があっただよな？」

未来はようやくあの教室に行ったわけを思い出し、教科書を開こうとする。

「待て待て、今何時だと思ってるんだ？明日にしてくれ」

時計を見ると、もう十時を少し回っていた。未来は慌てて自分の教室に戻り、起きっ放しのカバンの中の携帯を取り出した。自宅からの着信で、履歴が一杯になっている。再び走って職員室に戻り、お先に失礼します、と入り口から声をかけ、未来は坂道を走った。

嘘

?
嘘

今年も金木犀の香りが通りのあちこちで漂う季節になった。未来の自宅の庭にもあって、毎年誕生日が近づくと、その日に合わせてくれたかのように何とも言えぬ季節の香りを放つオレンジ色の花が、子供の頃から大好きだった。この香りはどうして、心の奥まで入り込んで、隠れていた感情を揺り起こすのだろう。あまりに深いところにあつて、自分でもその気持ちに気付かず、ハッとさせられることもよくある。しかし今の未来は、一つのことと占められているのか、その香りに姿を現すのも、常に抱えている苦しさだけだった。

「ね、最近の唯様、すっごく良い匂いがしない？」

「何処の香水かな、」

廊下で女子生徒たちがそんなことを言いながら通り過ぎた。それほど深い悩みなどなさそうに見えるが……。未来は、初めて城戸の側に行った時から、あの香りを感じていた。何が悩みだと特定できないほど、不安定だったからだろうか、と、当時を振り返ってみたが、試験勉強に追われて焦る自分の姿しか思い浮かばなかった。

あの不思議な出来事から一ヶ月あまりが経ち、城戸との関係は、今まで通り、授業中の受け答えをするのみとなっていた。未来の城戸への想いは変わらなかったが、あの日以来、少し落ち着いた気がしている。それはもしかしたら、この間までの未来には城戸を思う智の気持ちも重なっていて、加速度的に高まっていたからかも知れない。何にしても、暗い過去に苦しんでいた城戸を、少しでも癒してやれたことに、未来は満足していた。

「どうしたんだよ、未来？ニヤニヤしちゃって。気持ち悪い、」

久しぶりに俊介と中庭で昼食をとっていた未来は、そう指摘され

て我に返った。

「聞くまでもないけど、何かいいことあった？」

無言の笑顔で頷いてみせる。

「テストの点数が上がった、とかそういうつまらないことは言うなよ？」

実際それも嬉しいことだったが、また英語の点数が上がったのだ。答案用紙を返す城戸から、頑張ったね、と言われて、嬉しさも倍増だった。

「それで？城戸とどこまでいったの、」

「声がデカい！」

未来は咄嗟に辺りを見回した。噴水のフチには他にも数人の生徒が座って談笑しているが、幸い聞こえてはいないようだった。

「何にもあるわけないだろ？変なこと言うなよ」

「なんだ、つまんねーの」

本当につまらなさそうに、水の乾いた噴水の中に立ち上がる。未来は、自分が本当に、そういう関係を望んでいるわけではないと、信じていた。城戸の過去を話すわけにはいかないが、コンクールの前日の電話や、演奏の後の音楽室での出来事を話すと、

「へえ……。マジでそれ、いけるんじゃないの？あり得ないもんな、絶対」

感心したように、俊介がまた未来の隣に戻る。

「未来、って呼ばれて、何て呼んでんの？まさか、唯？」

「俊介！」

「ごめんごめん、とふざけた謝り方で、全く反省の色がない。しかし、智の言葉だったとは言え、唯、と呼んだ時の心地良さを思い出して、また顔が綻んでしまうのだった。

俊介と話しているとどんどんエスカレートしていきそうで、未来は、もういいよ、と怒ったフリで背を向けた。進展したら報告しろよ、という俊介の声も、聞こえないフリをして歩き出した。が、ふと思いついて、中庭に戻る。まだ噴水のところで携帯を手に寝そべ

っている俊介に、

「ねえ、何か悩み事があつたら、言つてよ。……俺ばかり、話聞いてもらつてる気がするしさ、」

「……どうしたの、急に」

「どうもしいけど、言いたかつただけ。じゃあね、」

俊介が怪訝な顔をするのももつともだったが、未来はそれで少し心が軽くなり、今度こそ教室に戻った。

六時間目、英語の授業が始まり、いつものように長文を流暢な発音で読んで聞かせる城戸を、未来は窓際の、一番後ろの席から肩肘をついて見ていた。茶色い髪の色は、生まれつきなのだろうか。ほんの少し、くせのある、柔らかそうな髪。大学でも、モテたんだろな……。城戸はよく使う言い回しを、流れるような筆記体で黒板に書き、

「この熟語を使って、自分の周りで起こったことを英語で言つてみて下さい、森下くん」

急に名前を呼ばれて、心臓が止まりそうになった。当然上の空だった未来は、答えることができずに俯いてしまう。今更教科書を見ても、どうにもならなかつた。

「普段から、いつもの会話を英語に置き換えてみるように意識すれば、何も難しくくないよ。次の時間までに、皆さんも、考えておいて下さい」

チャイムが鳴り、未来はホツとして机に伏せた。まだ胸がドキドキしている。人前が苦手な未来には、授業中に当てられて答えることも、苦痛だった。

「未来くん、随分困つてたね」

杏奈が可笑しそうに言つて前の席に座った。

「ちよつとよそ見してただけなのにさ。……バレてたのかな」

実際城戸と目が合ったわけではなかつたのに、と溜め息をつく。徐々に教室から生徒の姿が消え、未来と杏奈の二人だけになった。

「部活引退したの、寂しいね」

杏奈が、ぼつり、と言った。

「そうだね。……やっと、放課後、音楽室に行きそうになる癖が抜けてきた、」

私も、と笑う。杏奈は何か話があるのか、未来の側に佇んで、しばらく黙っていたが、思い切ったように、

「私ね、……もう一度、告白してみようかな」

その言葉に、未来は思わず杏奈の顔を見つめた。

「……先生に？」

「うん。コンクールが終わったとき、少しだけ話ができたの。先生のほうから話しかけてくれたんだよ？前のことなんて気にしてないみたいになっごく優しく、頑張ったね、いい思い出ができたね、って言ってくれたんだ」

杏奈はうつとりと、その時の様子を思い浮かべながら話した。自分に対するのと同じように、杏奈にも優しい言葉をかけていたことが何だか悔しくなる。こんなにも独占欲が強かったかと自分に辟易しながらも、頑張れよ、という一言がかけられず、未来は胸を痛めた。

杏奈が帰って行き、いつものように教科書を開いた未来だったが、すぐに閉じて教室を出た。まだ明るい坂道をいつになくゆつくりと歩いていると、あちこちから金木犀の香りが流れて来て、心に染み込む。苦しくて、切なくて、思わず駆け出した未来は、車庫から庭に飛び込んでミミを抱いた。

「クウーン、」

涙が止まらない。ミミの首筋に顔を埋めていると、驚いた母親がリビングから顔を出した。

「ちよつと、未来？ただいまくらい言いなさい。泥棒かと思ったわ」
珍しく早く帰ってきたと思ったら、と呆れたように言ったが、未来の様子がおかしいことに気付いて庭に出てきた。

「未来？どうしたの、」

何も答えず泣き続ける未来の心の中は、誰にも見ることは出来ない。未来はただ、止めどなく流れる涙が、この悲しみを早く連れ去ってくれることだけを願った。

夜になっても、未来は自分の部屋から一步も出ずに、ベッドに伏せていた。自分では、城戸が未来を智の代わりにしていたことなど、気にしていないつもりだった。身に余るほどの優しさが、全て智への罪滅ぼしだったということも、城戸が立ち直ってくれたのならそれでいいと、思っていたはずだった。しかし、未来の心は、自分が認識しているよりも酷く、傷ついていた。その傷口が、今になって、耐えられないほど痛む。側にいると思っていた城戸の心にいたのは、常に智だったのだ。智と混同しないように未来を名前で呼んだとしても、心の中の智はいつも、未来に重ねられていたに違いない。あのコンクールの日の言葉も、ピアノも、何もかも、未来ではなく智へ向けたもの。そう思うと、震えるほど悔しくて、悲しかった。

「もうすぐ、誕生日ね。何が欲しいの？」

休日の朝食のテーブルで母親が尋ねた。

「……別に、何もいらない」

「何でもいいのよ？ホラ、前から欲しがってたゲームがあるじゃない」

「いらないよ、」

未来の反応に、両親は顔を見合わせる。気を遣われていることに気付いたが、それが余計に癪に障った。未来は席を立ち、行ってきます、と当てもなく家を出た。が、すぐに車庫の向こうで、ワン！と吠えるミニミの声が聞こえ、自分も連れて行けと言われた気がして庭に戻る。

「俺に命令するなんて、生意気なヤツだな、」

未来はそう言いながら、ミニミの首輪にリードをつけた。するとミニミは、いつもの散歩コースを無視し、坂道をどんどん駆け上がったいく。まるでもう目的地を決めているかのような足取りだった。引

かれるがままに着いていくと、ミミは坂を上りきったところで一度振り返り、校門の中へと未来を導いた。

「……どこへ行くんだよ、ミミ、止まれ！」

幾分強い口調で注意したが、ミミは聞かない。こんなことは珍しくて、未来は少し怖くなってきた。

「ミミ、いい加減にしろ！」

リードを強く引き、無理矢理ミミを止まらせた。悪びれるふうもなく、ミミは座って、いつものように未来の目を見る。

「……、」

ふと、何処かからピアノの音が聞こえて、未来はハツとした。咄嗟にミミを見ると、もう役目は終わったと言わんばかりに、退屈そうに、あくびをする。

「おまえ、まさか」

未来はミミを抱き上げ、校舎の中に入った。上履きに変え、誰もいない廊下を走る。その途中で音が聞こえなくなり、未来はさらにスピードを上げた。階段を三階まで一気に駆け上がり、音楽室のドアを開けると、思った通り、そこには城戸の姿があった。

「未来、」

驚いたように椅子から立ち上がり、息を切らせている未来の側へと歩み寄った。

「どうしたの、そんなに慌てて」

ミミに気付いて、連れてこられたの？と話しかける。

「違うよ、ミミに連れてこられたんだよ。ミミとはここに、来たこともないのに、」

未来はいつになくムキになってそう訴えた。明らかに、未来の意志ではなく、ミミの意志でここに来たのだ。

「……じゃあ、僕の思いが通じたのかな、」

不可解なことを言って、城戸はミミを撫でた。ミミはしきりに短い尻尾を振って、愛想を振りまいている。未来はようやく落ち着いてきて、ミミを床に放した。

「大人しいね、ミミ」

城戸がしゃがむと、ミミは調子に乗って、膝に登ろうとする。

「……犬、好きなんですか？」

「うん、カナダにいた頃、その家で、すっごく大きなセントバーナードを飼っていてね、可愛かったな」

自分とだけ、成り立つ会話だということを、未来はすぐに意識した。城戸はその犬に比べれば、何倍も小さいミミを、胸に抱き上げる。休日だからか、いつもと違う服装に、何だか新鮮な印象を受けた。ジツと見すぎてしまったのか、不意に目が合って、

「未来、今日の予定は？」

急に尋ねられ、特に何もなかった未来は首を横に振る。

「これから、頼まれた買い物をしに行くんだけど、未来も手伝ってくれない？」

「買い物、」

「ご飯、奢るから、」

断る理由も見つからず、未来は城戸の車で一旦自宅に戻り、ミミを庭に戻した。

「未来？」

「ちよつと、出掛けてくるから、」

リビングから顔を出した母親に、それだけ言って、未来は逃げるように庭を出た。

さつきまでの重い心が、突如として舞い降りた偶然で、一気に晴れていく。秋晴れの空も、いつも以上に澄んで見えた。昨日はあんなに悲しくて泣いたくせに、と、現金な自分に呆れながらも、城戸の車の中で、この助手席に何度も乗ったことがあるのも自分だけだろう、と優越感に浸ってみる。

「先生つて、細かいこと、気にするほうですか？」

何、その質問、と可笑しそうに笑う横顔に、もう今までの影はない。

「俺、もう細かいこと気にするの、やめようと思って」

「何をそんなに気にしてたの？」

「……それは、言えないけど、」

さすがに本人に向かつては言えず、俯いた未来は、ふと、城戸の香水が以前と違うことに気がつく。

「そういえば、こないだ言ってた瓶、って、どこにあるんですか？何か、前と、匂いが違う、」

城戸は一瞬、驚いたように未来のほうを見た。が、すぐに笑って、「どこだと思う？」

あとで教えてあげる、と車を停めた。

休日の街は、どこを見ても人の顔。こんなにどこから来たのかと不思議になるほどの混雑ぶりだ。そんな中で、学校でしか会うはずのなかった、城戸と一緒にいる状況が夢のようで、未来は急に心拍数が跳ね上がるのを感じた。ふと、この中に知り合いがいて、城戸と二人の所を見られはしないかと心配になり、隣の教師のほうを窺ってみたが、城戸はそんなこと、まるで気にしていない様子で、その人混みの中を歩いた。

アパレルショップが多く並ぶ辺りまで来て、未来の緊張もようやく少し、落ち着いてきた。買い物があると言った城戸は、目的地があるのかないのか、ゆっくりと未来を連れて歩く。未来も自然と、周りの店を見ながらついて行った。すると、いつも経済的な理由にするのが悔しくて、自分にはまだ早いと通り過ぎていたブランドショップの中に、一つのマフラーが目にとまった。赤の差し色が効いた、白とグレーのストライプ。城戸に、似合いそう。そう思っていると、城戸がそれを手に取った。

「これ、いいね。これだったら、学校でもいけるかな」

聞かれて、未来は大きく頷く。やはり、仕事とプライベートの服装を区別しているらしく、それが解って、嬉しくなった。

「未来にも似合うんじゃない？」

城戸はそう言って、突然それを、未来の首に巻く。カシミアの優

しい肌触りと、その距離の近さに、未来の心臓はまた、大きな音をたてた。そんなことにはお構いなしに、未来の肩に手を添えて鏡の前に連れて行き、

「ホラ、似合ってるよ」

鏡越しに目が合つて、未来はどうしていいか解らなくなり、先生のほうが似合うよ、と誤摩化した。

再び歩き出し、ふと、ショーケースの中に、お気に入りのG・s hockを見つけた未来は、思わず側に寄って眺めた。ずっと欲しくて、でも買えずにいる時計だ。入学した時に、一つ買ってもらった手前、壊れてもいないのに新しいのが欲しいとはなかなか言えず、いつも眺めるだけになっていく。森下家では、友達と何処かへ遊びに行く程度の小遣いしか与えられず、必要な物を必要な時に買えないというシステムのため、まさしく分相応の買い物しかできない。当然バイトは禁止で、唯一の収入源のお年玉も殆どは母親が銀行に預けてしまい、その通帳も印鑑もない未来は、その大金を持っていないも同然だ。

「どれが好きなの？」

また、ビツクリするほどの至近距離で、城戸が尋ねた。未来はまだ慣れない香りにドキドキしながら、その水色の腕時計を指差す。

「暗いところでライトをつけたら、きつと綺麗だよ、」

動揺のあまり、思わず友達口調で言ってしまった、すみません、と謝った。

「細かいこと気にするの、やめるんじゃないか？」

言われて、思わず苦笑してしまう。朝ご飯、食べなかったからお腹減ったよ、と、肝心の買い物など忘れたふうな城戸に、未来は恐る恐る尋ねてみた。

「あのさ、買い物、しなくていいの？」

「ご飯のあとにしよう。ね？」

結局、頼まれたという買い物らしいことは全くしないまま、夕方

になった。律儀な未来は、人ごとながら心配になったが、そろそろ帰ろうか、と言われて、急に寂しくなる。駐車場の、薄暗い階段の途中で、未来はつい、

「まだ、帰りたくないよ、」

その言葉に城戸は少し笑って、

「帰らないから、車に乗って？」

と、助手席のドアを開けた。今まで、何人もの恋人に、同じことを言われてきたんだろう。未来は動き出した車の中で、そんなことを考えて勝手に嫉妬した。車はコンクールの日に通った裏道を抜け、あつという間に学校に着く。帰らないって言ったくせに。未来は寂しさに言葉を失い、黙って車を降りた。

「この学校は、景色がいいよね。朝も、昼も、夜も、……ずっと見ていられる気がする」

城戸は夕日の傾いた空を見て言った。いつも、二年五組の窓から外を眺めていた城戸の姿を思い出す。

「……音楽室からの夕日が一番綺麗だよ」

未来は毎日眺めた景色を思い出し、また少し切なくなった。

「じゃあ、見に行こうか、」

学校が、特別な場所が変わったこと。城戸に出逢うまでの未来には、放課後の学校は、部活が終わったら用のない場所だった。一刻も早く、抜け出したいと思っていた。それが今では、何よりも大切な時間を過ごせる場所になった。過ぎ去って行く時間を、留めておけるものがあつたらいいのに。そんなこと、今まで考えたこともなかった。

二人は夕日と校舎が作り出すコントラストで影絵のように見える廊下を抜け、三階の音楽室に戻った。窓を開けると、その風はもう肌寒く、ハッキリと秋の深まりを告げている。季節が変わって行けば、いつか別れの時がやってくる。その日がもう、すぐそこまで来ていることに、未来はまだ、気付かないフリをしていたかった。

「今日は、ありがと。楽しかった、」

不意に未来と向かい合った城戸が、そう言った。思いがけない言葉に、それだけで、胸が一杯になってしまふ。自分が先にお礼を言うべきところだったのに、と思っていると、

「ウソついて、ごめんね」

その言葉の意味に、ようやく気付いた未来は、思わず城戸の顔を見た。

「今気付いたの？」

幾分呆れたように言って、笑う。未来も可笑しくなって、笑った。「ピアノ、聴きたいな、」

夕日の美しさが、未来を大胆にしてくれる。城戸はいつものように、頷いてピアノに向かった。綺麗な指先から、深く甘いメロディが流れ出す。今までに聴いた、どの音よりも優しく、切なく胸に響いた。温かい海のような、大きな包容力を思わせたかと思うと、途中、嵐のように激しく揺さぶりながら未来の心を弄ぶ。まるで恋人への思いをぶつけるかのような激しさと優しさ。それは不思議と、届かぬ思いを抱えた未来の苦しさと重なった。表情を変えて繰り返される穏やかな主旋律は何とも言えず心地良く、未来は目を閉じて聴き入っていた。時が止まってほしい。このままいつまでも、城戸のピアノの音に包まれていたい。未来は心から、そう願っていた。

演奏が終わり、そっと目を開けると、夕日はもう最後の光だけになって、音楽室を優しい闇に包もうとしていた。胸にはまだピアノの音が響いている。夢なのか現実なのか、本当に解らなくなる瞬間があるのだ。城戸の瞳を、ただ見つめて、未来は現実に戻ろうとする自分の意識を引き止めていた。

いつもは教えてくれるタイトルを、城戸は敢えて言わなかったのだろうか。学校を出た未来は坂の上から、今沈んでいく太陽を見つめていた。

「先輩、ケーキ食べようよ」

誕生日のプレゼントを買ってけると言うので、未来は沙耶と休日
の街に出てきていた。気持ちの良い秋晴れで、行楽に出掛ける人
が多いのか、街の混雑は思ったほど酷くない。普段なら、入る気も
失せるほど行列ができるカフェも、数組のカップルが待っているだ
けだ。

「みんな、大人だね。高校生なんて、私たちくらいかな」

沙耶が、他の客を観察しながら言った。確かに、どのカップルも、
社会人に見える。

「ねえ、先輩は、早く大人になりたい？」

唐突に聞かれて、未来は答えに困る。

「うーん、……どうだろう。なりたい、のかな」

自分でも、よく解らない。今の生活に特に不満はなかったし、と
りわけ急いで大人になる必要は、ないようにも思えた。

「私はね、早く大人になりたいの。だって、お姉ちゃんがすっごく
楽しそうなんだもん。大人になったら、きっと今より何倍も、楽し
いことがあるんだよ」

沙耶の姉に会ったことはないが、既に社会人らしい。お下がりだ
と言って洋服をくれるのだが、趣味が合わなくて着られない、と嘆
いた。沙耶はいつも女の子らしい恰好をしているから、姉のほうは
きつとサッパリした恰好が好みなんだろう、と想像してみる。

「週末なんて、ほとんど合コンだよ？で、いつも違う人に送っても
らって帰って来るの」

社会に出たら、自分はどう変わるんだろう。高校を卒業して、大
学を出て、教師になって……。卒業、か。不意に寂しさに襲われて、
頭の中からその感情を追い出す。社会に出る前に、まだ大学受験が
控えているじゃないか。ようやく決まった志望校に合格するには、
まだ英語の学力が、足りない。もっと勉強しなきゃ。少し前までは、
未来の中の何処を探しても見つからなかった言葉が、今は常に頭に
ある。社会人になった自分の姿など、未来にはまだ想像できなかつ
た。

「どうしたの？先輩、」

誕生日だからと、ケーキを二つも食べて満腹になった二人は、再び外を歩いていった。沙耶は見つけた派手なマフラーを未来の首に巻いて、鏡に映して見せている。

「……ううん、何でもないよ」

つい先日、城戸と二人で歩いた場所だった。あのときのマフラーはまだ向かいの店の硝子のケースの中にある。自分が見つけたものを、城戸に気に入ってもらえたことが、嬉しかった。

「何だか、全然別のこと、考えてるみたい」

不満そうに言われて、ハツとした未来は、

「マフラーはいいよ。まだ冬には早いし。それより俺、ゲームソフトが欲しいな。中古でいいからさ、」

そんなの、つまんない、と膨れる沙耶を連れて、逃げるようにその場所から離れた。ダメだよ、やっぱり。心の中で、自分を咎める声がする。沙耶のことは、好きだけど、もう……。

彼の香り

? 彼の香り

月日は過ぎ、乾いた北風が心の中までも入ってきそうな寒さが続いていた。毎日放課後の居残りをして、暗くなった外に出る瞬間は、痛いほど冷えた空気に、思わず首を竦めてしまう。早く、春にならないかな。寒さのあまり耳が痛くて、未来はつい、現実逃避に走ってしまう。何かの拍子に時間が進んで、この冬を一瞬で越えられないかと。暑さにも弱い、寒いのも苦手、温室育ちの代表のような自分が時々イヤになる。しかし、泣いても笑っても、一ヶ月後にはセンター試験が控えているのだ。そして二月には、未来の目指す大学の、本試験。

はあ。未来は夜空を見上げて、白い息を吐いた。教室の暖房で火照った頬はすぐに凍り付き、ひび割れそうになる。心と同じだな、と呟いてしまいそうになった。何かの気まぐれだったのか、城戸が未来を買い物に誘って以来、また二人は何事もなかったかのように教師と生徒に戻っていて、それがかえって、未来の余計な雑念になっている。最近頻繁に、唯様ってすごく良い匂い、とうつとりしながら話す女子生徒の会話を耳にして、それも気になって仕方がないことの一つだった。

「あの瓶のこと、あとで教えるって言って、結局忘れてるんじゃない、

未来は、城戸の言動に一喜一憂している自分に、いい加減腹が立っていた。今度二人で会ったら、絶対ハッキリさせてやる。先のことには威勢が良いが、いざその時になって尻込みする自分の姿が目には浮かんだ。実際、城戸は近づくと、春先に咲く花のような、瑞々しい果物のような、何とも言えぬ良い香りがした。それは去年から

未来が知っている彼の香水とは、全く違う。それだけは間違いないと言いつつ切れた。

期末試験は、受験生だろうが何だろうが関係なく行われ、今日でやっと、全ての答案用紙が手元に返ってきた。心配ないのは数学だけで、あとはいつも受け取るときヒヤヒヤするが、今回は自分でも納得の出来映えだった。本命が私立の未来は、受験に関係のない科目は一応、平均点以下でも許される。センター試験は、受けてみるだけ。その点で、自分で決めたラインをクリアしたということだ。

「これでやっと、試験が終わったな」

正紀がもううんざりだという表情で、未来に声をかけた。正紀は早々と指定校推薦の枠を手に入れていて、受験はないも同然だ。こういう友達を見ると、未来も全教科、きちんと勉強しておけば良かったと、激しく後悔した。結局、塾通いをしていた俊介も推薦組で、普通に受験すれば超難関と言われる私立大に既に合格している。そんな中で、未来は自分だけが取り残されているかのような気分が襲われ、それでも絶対合格してやる、と闘志を燃やしているのだった。

「クリスマス、中野とどっか出掛けんの？」

廊下でばったり会った俊介と、久々の立ち話だ。

「部活引退してから、おまえらの話が聞こえてこなくて寂しいよ」
実際、未来は沙耶と、以前ほど頻繁には会っていないかった。受験だから、というもつともな理由をつけていても、それは違っていると認識しているから胸が痛い。思い切って別れようと思っても、つい沙耶のペースに乗せられて、会えばいつものように部屋でSexをしていた。

「あっちのほうは、どうなってんだよ？全然報告がないけど？」

「……報告するようなことが、ないからだよ」

ふーん、と探るような目で見て、

「向こうは教師だから、自分からは誘えないと思うぜ？未来が思い切ったことしないと、いつまでもそのまま、あつという間に卒業

式が来るぞ、」

まあ、頑張れよな、と肩を叩いて予鈴の鳴った教室へと戻っていた。

思い切ったことって？未来は放課後の教室で、受験する大学の過去問を解きながら、余計なことを考えていた。俊介のせいで、受験とは別のタイムリミットを設けられたようで焦りを感じる。

「俊介は、そういうことばかり期待するんだもんな」

思わずそう呟きながら、指先でペンをクルクルと回した。落ち着きのないとき、決まってこの技が出る。気になることは一つ、城戸の気持ちだった。彼の中から未来に重ねていた智が消えて、もう特別扱いは終わったんだと、諦めていた。それなのに、ある日、嘘についてまで、未来を連れ出した事実。もしかしたら、何か話したいことがあったのではないかと勘ぐってみた。まさか、告白？……まさかね。

ますます落ち着きのなくなった未来は、ジッと目を閉じ、今度は自分の心の中に、問いかけてみる。自分は何を望んでいるんだろう。城戸と、どうなりたいと、思ってるんだろう。……最初はクライだった。男のくせに、香水なんかつけやがって、というのが第一印象だった。誰にでも優しい態度が、気に入らなかった。それが、いつからか、意識するようになった。それは今思えば、あの心を穏やかにするという瓶のせい。会うたびに、甘くて優しい香りが、未来の胸の中に、スツと入った。城戸といると心が安らぐと感じたのは、あの香りに癒されていたから？

「そっなのかな……」

未来は急に、不安を覚えた。城戸が未来に智の姿を見て自分の心を癒したように、未来もまた、城戸の持つ瓶の香りに癒されていただけ？条件反射のように、城戸の側にいれば安らぐと、思い込んだだけ？……そもそも、本当にその瓶は存在するのだろうか？そこまで考えが及んで、未来は強く頭を振った。細かいことを考えるのは、

やめたはずだったのに。たまらなくなつて、机に伏せ、もつと前向きなことを思い出そうと必死になった。しかし、全てが智に結びついて、離れない。未来と城戸とを結ぶものは、智以外に見つからなかった。

誰かが未来を揺り起こした。フワリ、と優しい香りがして、すぐに城戸だと解る。未来は顔を上げ、そこがまだ教室だと気付いた。

「風邪ひくよ。大事な時なんだから、気をつけないと、」

授業中のような口調で言つて、カーテンを閉めた。それが気にいらず、いつまでも机の上を片付けようとしないう未来に城戸は、

「どうしたの？具合が悪いの？」

未来は何も言わず、俯いていた。思い切つたことをするならば、今しかない、と思いつながら、それを引き止める自分が邪魔をする。未来が意図的に黙っていることを悟つたのか、城戸は小さく息を吐き、未来の側に来た。

「未来、約束、覚えてる？」

急に、いつもの優しい口調になった。意地を張つて、忘れた、と言いかけて、思いとどまる。黙っていると、

「受験勉強の息抜きに、今度、何処が行かない？未来の好きなところでいいよ」

「……あれは智とした約束でしょ」

思わず言つてしまつて、後悔したが、もう遅かつた。拍車のかかつた未来の意地悪な口が、さらにこう続ける。

「智の代わりにはならないって言つたよね」

城戸の反応を見たくなくて、あらぬ方向を向いていたが、あまりに長い沈黙に不安になつて、

「ごめんなさい、」

不本意ながらも、謝つてしまう。小さい頃、些細なウソについて母親に、謝りなさい！と叱られた時のことを思い出していた。

「謝るのは僕のほうだよ。ホントに、ごめんね。いくら謝つても足

りないくらいなのね」

その寂し気な口調に、城戸が過去に受けた傷の深さを知っているながら、心ないセリフを吐いてしまった自分を責めた。どうしてこんなに、うまくいかないんだろう。前はもっと、冷静に言葉を選べたはずなのに。言わなくてもいいことは、飲み込む術も心得ていたのに。

「……未来といると、落ち着くから、って言っても、未来にはピンと来ないよね。きつとまた僕が、智と一緒にいるつもりになってるんだろう、って思うよね」

全く、その通りだ。苛立ちが、未来からどんどん冷静さを奪っていく。

「俺の身にもなってよ。どうしていいか、全然解んない。俺はまだ智なの？未来なの？先生の、何なの？」

「……、」
「大事な生徒、なんて言っただけで逃げないでよね。ハッキリするまで帰らないから！」

畳み掛けるように言って、それでもまだ気の治まらない未来だったが、言いたいことは言ったつもりだった。もう、どうなってもいい、と開き直って、城戸から顔を背けた。

長い沈黙の後、ようやく、城戸が口を開いた。

「未来に初めて会った日、……試験の前で、教科書を忘れて取りに来てたよね。雨が降ってて、蒸し暑くて、窓を開けると何処からか甘い花の匂いがして、……智が死んだ日も、ちょうどあんな感じだった」

過去の風景を見るような眼差し。城戸は穏やかな口調で語った。

「ドアが開いたとき、智が、帰って来たのかと思ったよ。あの瞬間から、未来のことを、智に結びつけてしまうようになってた、」

出逢った日のこと。それは今も、昨日のことのように思い出せる。未来はただ、その綺麗な瞳を見つめた。

「狡い僕は、未来と智は違うんだって気付いてからも、未来のために一生懸命尽くすことで、自分を慰めてた。……でも、あの日、未来のおかげで智に会えて、やっと解った。智と未来は、全然似てない。そんなことも解らなくなったのか、って、智は言いたかったんだろっね」

ジツと見つめられて、未来は暗示にかかりそうな揺らぎを感じていた。常に過去を見ていた瞳。だからつかみ所のない印象を受けたのだと解る。しかし、今は違う。真っ直ぐに、未来を見つめていた。「長い間、胸の中に突き刺さっていた棘が、最後に智と話したことで、やっと消えた。そしたら、あの香りも、フツと何処かに消えたんだ。信じられないかも知れないけど、今はもう、思い出すこともできない」

それは未来も同じだった。城戸と会うたびに未来を癒したあの香りは、もう何処にも見つからなかった。

「今僕の前にいるのは、未来だって、ちゃんと解ってるよ。智はもう、この学校にはいないから。……それに、未来は智より、僕に似てる。」

思いがけないことを言っつて、城戸はポケットから、何かを取り出し、未来に差し出す。それは、想像していたよりもずっと小さい、透明な液体の入った硝子瓶だった。顔に近づけても、全くの無臭で、未来は何だか可笑しくなり、つい吹き出した。

「あの日、未来が帰った後、野口先生に、めっちゃくちゃ叱られたんだ。森下を利用するなんて、最低だ、って。自分でも解ってたことだけど、眠れないくらい、落ち込んだよ。でも、それまですごく怖かった暗闇が、何でもなくなってた。不思議でしょ？」

そう言っつて、未来に微笑みかける。思わずつられてしまいそうな笑顔に、未来はハツとした。城戸はあの日、長年の呪縛から解放された、ようやく本当の笑顔を取り戻したのだ。それなのに、今度は未来のほうが、いつまでも智に勝てないことに拗ねて、もうそこにはいない智のことばかり意識していた。智と、俺と、どっちが好き

なの、という馬鹿げた質問が心に浮かび、答えられないであろう城戸の困った顔を想像した未来は、大きく息を吐いた。

「やっぱり、細かいこと気にしてちゃ、やってられないよね」

未来が言くと、城戸もようやく、ホツとしたように息を吐いた。

「智のところに行きたい。それでも、連れて行ってくれるの？」

困らせようと思つて言ったのに、城戸はすぐに、いいよ、と答える。逆に驚いている未来を見て、

「僕も、同じことを考えてた。……一度も、お墓参りに行ってなかったから」

行かなかつたのではなく、行けなかつたのだらう。いつまでも癒えぬ心を抱えて、どんなに辛い思いをしてきたのか、未来には計り知れなかつた。今の未来と同じ歳の頃に、親友が自殺するだなんて想像もつかない深い悲しみと、暗闇。その真つ暗な世界で怯えながら、それでも二度と同じ過ちを繰り返すまいとして、必死に生きてきたのだ。そしてまた、この場所に戻ってくる事が出来た城戸の強さは、今の未来とは比べ物にならない。それなのに、感情に任せ責めてしまったことを、今、心から反省していた。

夜、暗い部屋のベッドで、未来はずつと城戸のことを考えていた。皆が持つている、彼の印象、それは未来も最初はそう思っていたように、容姿端麗で冷静で、理想的な大人だということ。どんな時も優しく、生徒のことを一番に考えてくれる。しかし、本当は、彼もまだ大人にはなっていないのかも知れない。何度も会話をして、未来はそう感じていた。それは、智が死んだときに彼の時間もまた止まってしまったから。壊れているかのように心の奥底に沈んでいた時計を、止めていたのは彼自身。戻ることも、進むことも出来ず、ずっと同じ場所をさまよっていた。そして、誰にも見せることのない、かたその時計を、ふとした拍子に、未来は覗いてしまった。二年五組という、彼の想い出の教室で。

城戸は、智が元気に笑っていた頃の想い出に包まれて、親友の笑

顔を絶やしてしまったのが、まるで自分のせいであるかのように自分を責め続けた。そんな彼を、智はずっと、見守ってきた。そんなことを知りもせず、突然間に入り込んだ未来の存在は、きつと二人を戸惑わせただろう。未来はそれに気付いて、思わず苦笑した。

未来はふいに起き上がり、コンクール以来封印したトランペットのケースを開けた。トランペットを持っていてる高校生の男子なんて、他に幾らでもいる。城戸がもし、他の高校の教師になっていたら、そこで同じような生徒に出会って、その生徒を智に重ねたのだろう。しかし、城戸は今、他の誰でもなく未来の側にいる。その偶然だけは、誰の意志でもない。そして、彼の時計はもう、動き始めている。『きつとうまくいくよ』

その声にハツとして顔を上げた未来は、思わず胸に抱いたトランペットを見つめた。いつも側で未来を見守ってくれる、コイビト。今は少しだけ、離れているけど、来年になったらまた、同じように吹いてあげるから。未来は心でそう言っ、そつとケースにしまった。

遠くを走る電車の音が、澄んだ上空の風に乗って心地良く響いてくる。いつになく温かい陽射しに、心も温かくなるような日だった。雀のさえずりがあちこちから聞こえ、時折、その小さな体で砂利を踏む音を立てては見つけた餌をついばんでいる。さつきから、ずつと目を閉じてひざまずいたまま、智の墓前から動こうとしない城戸は、カナダで週末になると連れて行かれたというミサでの癖なのか、両手を合わせるのではなく、胸の前で組んでいるが、それが何とも絵になる。黒いショート丈のトレンチコートが良く似合っていて、未来は場所もわきまえずに見とれてしまっていた。

未来は智の墓前で、一言、唯のことは俺に任せて、と心の中で言った。暗に、智には負けない、という意味を含めておいたが、智には伝わっただろうか。城戸が用意してきたフリージアの香りに、今

が真冬だということを忘れそうになりながら、待ちくたびれた未来は墓前から離れ、墓地を囲むフェンスの向こうに広がる景色を眺めた。今頃気付いたが、城戸の香水は、フリージアに似ている。智は子供の頃から、通学路にこの香りがすると、美味しそうな匂い、と犬のように鼻を動かしてそのありかを探していたらしいが、春先の庭でこの香りがすると、同じことをしている未来にはその気持ちがよく解り、思わず笑みを零した。

もし、自分が先に死んだら、どんな花を手向けてくれるんだろう。ふとそんなことが浮かび、言いようのない寂しさに襲われた未来は、走って城戸のいる所に戻った。ちょうど立ち上がって未来を探していた城戸は、何事かと驚く。

「どうしたの？何かあった？」

「……、」

黙って首を横に振る。

「ならいいけど、」

まだ心配そうな城戸は、待たせてごめんね、と謝った。駐車場までの砂利道を並んで歩き、城戸の側にいるという安心でようやく落ち着いてきた未来は、

「もう、いいの？」

と、尋ねてみる。頷いた横顔には、涙が光っていた。探すほどに見つからない言葉を、無理に口にする必要などない。城戸がこれで本当に、智を想い出の友達にすることができたはずだと、未来は信じていた。

城戸はここに向かう車の中で、智が自殺した直接的な原因が、三年生になってすぐの二者懇談だったことを話した。城戸と同じ、教師になって三年目の女性教師は、初めて受け持つクラスで意気込んでいたのだろう。生徒に馬鹿にされまいと、厳しい教師を演じていたのかも知れない。その教師は、成績とはかけ離れた志望校を述べた智に、途方もない夢は捨てると言った。それともふざけているのかと。子供の頃から智を知っている者になら、智の今の成績が本当

の実力でないことは、容易に解つたはずだ。しかし、その教師に解るはずもなく、高校に入ってから伸び悩んでいた智に、過去にどれだけ成績が良かったか知らないが、そんな生徒はいくらでもいる、自分だけが特別だと思つのはもう卒業して現実を見なさいと、智を突き放した。言われた内容の正しさを、一番良く解つていたのは智自身だつたし、それを乗り越えてもう一度頑張ろうとしていた矢先だつたのに、ことごとく否定されてしまったのだ。

「智はね、僕から見ても、何か突拍子もないことを簡単にやってのけそうな、そんな力を持っていた。学校の成績とかじゃない、何か特別な力だよ。だから将来、きつと大物になる、っていつもからかつてた」

能力が高い者ほど、越えなければならぬ壁は高くなる。よほど悔しかったのか、智はその日に教師から言われた言葉を、そのまま日記に綴っていた。女性教師は、智の両親から見せられたその日記の内容にシヨックを受けて学校に来なくなり、今どうしているかは解らないという。智は遺書の最後に、どんなに高い壁も、乗り越えようという気持ちがあれば、越えていけるはずだ。すぐには無理でも、時間をかければ必ず自分の力で越えられるはずだから、側で見ている大人は決して否定せずに、見守つてやつてほしい、と書いた。『僕はもう壁を越えようという気持ちをなくしてしまった。誰の手も借りたくない僕には、これしか道はありませんでした』

城戸から、教師を目指したわけを聞いたことはなかったが、恐らくそのことがあつたからだろう。どんな時も優しく手を差し伸べ、誰にも分け隔てなく接する城戸の姿を思い浮かべ、未来は胸が熱くなるのを感じた。

遺書の中には城戸個人に宛てた手紙もあつたと言うが、その内容だけは絶対に教えてくれなかった。気になって仕方なく、城戸が智を想い出ししても、未来がこだわっていたのでは意味がないような気がして、溜め息をつく。わざと気にさせるように言ったのかも知れないと、城戸を横目でうかがつてみたが、慣れてきたはずの綺麗

な横顔に思わずドキツとして、慌てて前を向く。……それはともかく、自分に比べて、遙かに大人びた智に、また嫉妬してしまう情けなさ。まだおまえなんかには負けないぞ、という声が聞こえた気がして、未来は何度も墓地を振り返った。

車に乗り、行き先を聞かず黙ったままの未来に、

「今日は、帰りたくない、って言わないんだね」

そんなことを言うてからかう。未来は思わず赤面して、窓の外を見た。ドライブには、ミミを連れてくるんだつたのに。自宅からそれほど離れていないであろう場所に、こんなに自然があつたことに驚きながら、知らない場所に向かう車に、少しの期待と不安を覚える。そんな未来の気持ちを察してか、城戸はラジオのスイッチを入れた。休日の昼間に相応しい懐メロが聞こえ、知らない曲ばかりなのに、懐かしいと感じる根拠は何なのかと、気にする必要のないことを、考えていた。

何となく、次にかかる曲のタイトルが浮かび、耳を澄ませて待っている、ラジオは本当に、その大好きなメロディを聴かせてくれた。驚いていると、城戸が、

「懐かしい曲、」

そう言つて、ボリュームを上げる。中学の時の合唱コンクールで歌つた曲だと言つた。未来も、同じように、この曲を中学の合唱コンクールで歌つた思い出がある。追憶の中、というにはまだ幼すぎる未来だったが、その頃の一生懸命な自分と懐かしい風景を思い出して、少し瞳が潤んだ。今、もしひとつだけ、願いが叶うなら……。

「ねえ、唯、って呼んでいい？」

「いいよ」

「学校でも？」

「それはダメ」

懐かしいメロディをBGMに、二人の他愛のない会話は続いた。いとも簡単に叶ってしまった願いは、些細なことだが何より嬉しく、

未来はその名を呼ぶたびに、心が満たされていくのを感じていた。

二つの別れ

? 二つの別れ

貼り出された白い紙に、整然と数字が並んでいる。大勢の受験生のひしめき合う中、自分の番号を見つけた未来は、ようやく受験地獄から解放されて笑顔を浮かべた。耳が痛いほどの寒さも、喜びに消える。実際は、地獄というほどの辛さを味わったわけではなかったが、このこと決めた大学に、絶対に合格しなければならぬ、という自ら課した重圧と戦った日々は、途方もなく長かった。自宅で待っていていれればいれぬ合否の通知が郵送されてくることは解っていたけれど、未来は自分の目で、その結果を確かめてみたかった。両親に電話で合格を伝え、手短かに話を終えた未来は、おもむろに時間を確認した。鮮やかな水色の、G - s h o c k。智の墓参りに行った日、帰り際に城戸から手渡された箱の中身が想像もつかなくて、部屋で包みを開けた未来は、思わず声を上げた。

『いろいろありがとう。これはそのお礼だから、受け取ってほしいな。あと、受験は時間との戦いだから。時間に負けずに頑張ってね』
英語でそう書いたメモが入っていた。お礼のメールを入れたが返信はなく、それっきり、個人的な会話は一度もしていない。

ちょうど昼休みの時間だったので、履歴から城戸の番号を探して発信ボタンを押す。緊張に、鼓動が乱れた。思えば電話で話すのはコンクールの時以来。もう随分昔のことのようだ。繋がるのを待ちながら構内を歩いていた未来は、城戸から聞いたチャペルを見つけて、誘われるように中に入った。誰もいない、静けさそのもののような空間。暖かみのあるステンドグラスの色合いが何とも言えず綺麗で、思わず見とれていたが、ふと聞き覚えのある音に、ドキン、と胸が鳴る。信じられない気持ちで振り返った未来は、迷わずその

胸に飛び込んだ。

「おめでとう、未来」

優しく抱きしめられ、紛れもなく、自分だけに向けられたその気持ちに、未来は喜びを噛みしめていた。城戸はその目で、もう未来の受験番号を確認してきたようだった。

「授業はどうしたんだよ？」

「教師が仮病使っちゃ、ダメ？」

「ダメに決まってるじゃん」

「……細かいこと、気にしないの」

いつもそうだ。もう未来に興味などなくなったようなフリをして、不意に優しくする。それが故意なのかそうでないのか聞いてみたいが、都合良く振り回されている自分を思うと悔しくて、また聞けないままだ。

「ここに来るとね、いつも荒んでいた心が、フツと穏やかになれたんだ」

城戸は高い天井を見上げて、そう言った。

「薄暗くて、いつ来ても人がいなくて、一人になりたい時は、ここが一番都合が良かった。晴れた日はステンドグラスが綺麗で、雨の日は、目を閉じると優しい雨音に包まれてる気分になれる」

未来は僕に似てるから、きっと同じことをするよ、と笑った。

怒られるかな、と言いながら、城戸はパイプオルガンの前に座り、バッハの『主よ、人の望みの喜びよ』という曲を弾き始めた。その独特の音は高い天井にのぼって共鳴し、光のように降り注ぐ。未来は神聖な気持ちで上を見上げた。ステンドグラスから射し込む光が梁と交わり、そこから真っ白な羽根が舞い降りるのを見た気がして、何度も瞬きをする。冷えた空気を震わせる、天使の歌声のような音色。優しいと感じるのは、城戸が弾いているから。音楽室のピアノに感動したのも、大好きな彼の心を映していたから。自分も楽器を演奏する立場なのに、そんなことにも気付かずにはいたなんて、何だか悔しかった。

それからの日々は、何もかもが慌ただしくあつという間で、未来自身、身の回りに起こり始めた変化についていけず、右往左往していた。去年の今頃、姉の瑠未がそうだったように、四月から住む場所や、そこからの通学経路を調べたりと、学校生活とは別に、毎日忙しく過ごしていた。

「未来、この自転車は持っていくの？」

卒業式を間近に控えた休日の朝、大声で尋ねる母親に溜め息をつきながら庭に出た未来は、じゃれるミミを抱いて車庫に下りた。

「先輩、」

車庫の前に沙耶の姿があった。あら、いらっしゃい、と母親が声をかけると、沙耶は急に、涙を零す。

「……ミミの散歩に行ってくる、」

未来はそう言つて、沙耶を連れて外に出た。近くの公園まで行つて、沙耶をベンチに座らせ、自分も隣に腰を下ろした。ミミは沙耶を気遣っているのか、しきりに沙耶を見上げる。

「ミミちゃんも、もうすぐ先輩とお別れだね」

言われて、未来のほうに泣きそうになった。ミミの側を離れるなんて、今まで考えたこともなかった。

「もう、会えない気がする」

沙耶はそう言つて、再び泣き出した。ミミを抱き上げ、膝の上で撫でていたが、やがて思い切つたように口を開く。

「先輩は、他に好きな人が、いるんでしょ？」

心の準備がなくて、未来はただ、沙耶の顔を見つめる。彼女がそんなことを言い出す根拠は、すぐに解つた。

「合格発表の日、驚かせようと思つて、駅の外に隠れて待ってたの。往復の切符だから、帰ってくる時間は解つてるって、お母さんから聞いて知ってたから」

それだけで、もう充分だった。それなのに、沙耶は残酷にも、続ける。

「改札から出てきたのは、先輩だけじゃなかったよね。体調が悪いから、って授業が自習になったのに、城戸先生がそんなところにいるなんて、おかしいよね」

未来はただ、黙っていた。弁解する気などない。沙耶を思う気持ちも、城戸を思う気持ちも、未来の中には存在していたが、説明しても理解されないことくらい、解っていた。

「ただそれだけなら、クラスの生徒が心配で、ついていったのかな、って思えたのに、先輩は、あの人のこと、名前で呼んでた。信じられないよ」

あの日、城戸は自宅近くの駅ではなく、あえて未来の家に近い駅に車を置いていた。それは、未来が降りる駅まで一緒に帰って、自宅に送り届けるため。誰かに見られることなど、気にもしていなかったのだろう。城戸は、隙がないように見えて、意外とそうでもない。未来は迂闊にも、学校の近くで城戸と親し気に話してしまったことを後悔した。学校では、先生でも、一歩外に出たら、名前で呼べる。未来にはそれが嬉しくて、たまらなかった。

「私と城戸先生、どっちが好きなの？」

「……、」

「ねえ、答えてよ、先輩」

はぐらかすことを、沙耶は許さなかった。

もう隠す必要はない。そう思っただけ事実を打ち明けた未来は、泣きながら走っていった沙耶を、追うことはしなかった。沙耶を愛する気持ちは間違いなくあるが、今は城戸との時間が何より愛おしいということ。城戸の存在がなければ、今の未来は存在しない。親友の死を受け止めきれずに自分を責めてばかりいた教師と、自分自身を信じられず、常に劣等感に苛まれていた生徒は、いつしか互いに寄り添い、励まし合って少しずつ、自分の弱さを克服してきた。そんな城戸は今、未来にとって、同士と言っても過言ではない。二人がいつか性別も、立場の違いも、全て越えられる日がくると、未来は

信じていたかった。

「これでいいんだよな、ミミ」

沙耶の後ろ姿を見送っていたミミに、そう語りかけた。振り返って嬉しそうに尻尾を振るミミの頭を撫で、

「そろそろ帰ろうか。引つ越しの準備しなきゃ」

急な坂道をミミに引つ張られるようにして歩きながら、未来は寒空を仰いだ。去年までは待ち遠しかった春が、今年はもうちょっと遅れて来て欲しいと思える。間もなく訪れる幾つもの別れに、未来はまだ心の準備ができていなかった。しかし、自分が望んだ進路を歩むために、その別れは避けられない。去年、瑠未を見送った時は、また違った寂しさがこみ上げ、それを振り払おうと坂道を全力で駆け上がった。

未来は卒業式の前日、思い切って城戸を呼び出した。放課後の二年五組の教室。彼と出逢ったこの場所で、幾度となく、話をした。勉強のこと、部活のこと、進路のこと、そして智のこと。そんな時間も、今日で終わってしまう。退屈な授業中、あんなにも時間を早回ししたいと思っていたのに、今は一秒でも無駄にしたくない。本当は、城戸と最後に話すのは式が終わったあとにしようかとも思ったが、明日では遅すぎる、そんな気がして、未来は時の流れの残酷さを感じながら、彼が来るのを待っていた。

「ごめん、遅くなって」

明日の準備をしていたらしく、なかなか抜け出せなかったことを謝った。

「いよいよ、明日だね、」

いつもと同じ笑顔に見えた。自分だけが寂しいような気がして、言おうとしていた言葉を飲み込む。しばらく俯いていると、

「明日はきつと、バタバタしててゆっくり話せないだろうから、ちよつと良かった」

城戸はそう言って椅子を引き、未来に勧めた。自分はその隣の席に、座る。フワリ、とフリージアに似た香りがした。こんなに悲しい香りだっただろうか。未来は寂しさに城戸の顔を見ることが出来ず、城戸もまた、言葉を探しているのか、空を見つめたままだ。普段は聞こえない壁の時計の音が、やけに大きく響いていた。

「未来の気持ちは、ちゃんと解ってるつもりだよ」

予想外の台詞に、未来は驚いて顔を上げた。城戸はいつになく真剣な表情で、未来の目を見つめる。

「でも、今はまだ、早すぎる。未来がもっと大人になって、それでもまだ同じ気持ちでいてくれたなら、もう一度ここで会いたいな」

その別れの言葉の意味を、未来は理解しようと努力した。しかし、その意志に反して、涙が溢れだす。しかし城戸は、今までのように未来を抱きしめたりはしなかった。

「早く大人になって、未来。そして、四年後、ここに戻っておいで。僕は、ずっと待ってるから」

ただ、頷くしかなかった。自分の口から好きだとは言えず、また、城戸の口からもその言葉はなかったが、未来はもう、歩き出さなくてはならないことを悟った。少しでも早く、大人になるために。

「これ、今までのお礼、」

未来は涙を拭き、自分で選んで買ったネクタイの細長い箱を、城戸に差し出した。こんなものでは到底、彼への感謝の気持ちに及ばないことは解っていたが、それでも何かしたかったから。

「明日、スーツなんでしょ？それ、つけてきてよ」

未来の言葉に、城戸は笑顔で頷き、

「今まで、ありがとう」

そう言って、教室を出て行った。

翌朝、一旦教室に集合し、最後のホームルームが始まった。黒いスーツ姿の城戸が教室に入ってくると、女子たちのうっとりとした溜息が漏れる。未来は昨日手渡したネクタイをつけていることに満

足したが、それ以上に、眼鏡をかけていることに驚いた。城戸が近眼であることなど、全く知らなかったからだ。しかし、それもまた似合っていて、女子たちの小声で騒ぐ声があちこちから聞こえた。どうして今日は眼鏡なんですか、と誰かに聞かれると、

「きつと感動して泣いちゃうから、」
と、笑った。

三年生の担任の代表として城戸の名が呼ばれ、壇上になると、その予期せぬ喜びに皆、ザワザワと声を上げた。本来なら学年主任である野口の役目なのだが、未来にはそれを城戸に譲った元担任の気持ちも察することができる。城戸は深く一礼し、卒業生たちを見渡した後、マイクのスイッチを入れた。

「今日、この場所で、ぜひ皆さんにお話ししたいことがあります。ずっと忘れずにいてほしいことです。……四月から大学生になる人も、もつと頑張つて上を目指す人も、これから先、どんなに高い壁が、その目の前に立ちはだかり、皆さんを苦しめるかもしれません。でも、決して簡単に投げ出さないで下さい。諦めなければ、いつかきつと、乗り越えられる時がやってくるから。どんなに時間がかかっても、必ず」

いつものように穏やかな声で、優しい間を置きながら話す姿勢は、それだけで未来の心を熱くさせた。智の遺書の言葉であるうことに気付きながら、どんな気持ちでいるのだろう、と想像してみる。未来の席からは遠すぎて、城戸の表情までは見えなかったが、ジツとその目を見つめて聞いていた。

「若い皆さんはまだ、過去という言葉を、使わないかもしれませんが、でも、もし、過去の辛い経験や、また、これから何か辛いことがある、そのせいで前に進めなくなってしまうたら、その時は無理にでも、笑ってみて下さい。いつも前を向いて笑っていれば、未来が、皆さんの手を、引つ張つてくれます。過去にとらわれて身動きのできなかつた私を、暗闇から救ってくれたように。……どうかどんな時も、笑顔を忘れないで下さい。それがいつか大きな幸せに繋がる

のだと、私は信じています」

『未来、って、いい名前だね』

想い出が、涙になって、溢れ出した。今日は絶対に泣かないと、決めていたのに。思えば、あのときを境に、城戸は未来を、名前で呼ぶようになっていた。彼は一生懸命に前を見て歩いていこうとしていたのに、智の影にこだわり、取り憑かれていた未来は、その手を引っ張るところか、困らせたり、傷つけたり、散々邪魔をしてみった。

「私が教師になった年、この高校に入学した皆さん。一緒に学び、成長し、今日皆さんを送り出して、初めて私は教師という仕事の喜びを、知った気がします。三年間、本当にありがとうございます」
声が、震えているような気がした。啜り泣く声が、あちこちから聞こえる。あえて、おめでとうではなく、ありがとう、と言ったところに、城戸らしさを感じた。

式が終わり、城戸に花束を贈呈して散々泣いた後、教室に戻った生徒たちは、この部屋から去って行くのが寂しいのか、誰一人帰ろうとしなかった。小学校の卒業式のように、城戸先生、ありがとう、と書かれた黒板に、皆がそれぞれに自分からのメッセージを書き足している。女子生徒は、これが最後だから構わないと思ったのか、好きです、だの、付き合ってください、だの、好き勝手に書いていた。泣いたり、笑ったり、そんな卒業式らしい賑わいに、未来も帰ってはもつたない気がしてそこに留まっていたが、ふと名前を呼ばれて入り口を見ると、野口が未来に向かって手招きをしている。最後に何かとんでもないことを言われそうな気がして恐る恐る出て行く、と、野口は一枚の卒業証書を未来に手渡した。その生徒の名は、城戸 唯と書かれている。

「城戸がもうすぐ来るはずだから、それをおまえから渡しなさい」

「……、」

「ホラ、早く、」

城戸の姿が廊下の端に見え、野口は戸惑う未来の背中を押しして教室に戻した。母親が迎えにきたりして、ようやく教室からは生徒の姿が減りつつある。もう一度、採光窓から廊下を見ると、野口が身振り手振り、それを壇上で読んで渡せ、というようなジェスチャーをしていた。未来は突然課せられたその使命に、どうしていいか解らなかったが、それこそ最後だからと開き直って、壇上で城戸が入ってくるのを待った。やがて、扉が開いた……。

「城戸 唯」

未来はそう呼んだ。城戸本人も、残っていたクラスメイトも、一斉に未来のほうを見る。未来は構わず、続けた。

「卒業証書。三年三組 城戸 唯殿。右の者は本校において、高等学校普通科の課程を修了したことを証する……」

呆気にとられていた城戸だったが、やがて未来の前に立ち、その証書を受け取った。日付は、今日、そして学校の印の代わりに、野口の認め印が押されている。戸惑っている城戸に、おめでとう、と言つと、いきさつを知らないクラスメイトたちも、卒業おめでとう！と叫んで拍手をした。

城戸はしばらく、その卒業証書を胸に抱いて泣いていたが、やがて深呼吸をして、

「みんな、ありがとう。いつまでも一緒にいたいけど、もう帰る時間だよ」

早く帰りなさい、と他の教室からも担任の声が聞こえたが、残っている生徒たちの気持ちは、皆同じなのだろう。今日帰ったら、もうここには来られない。この教室は、未来たちの教室ではなくなってしまうのだ。そして、担任もまた、今日で終わり。それを思うと寂しすぎて、未来は胸が張り裂けそうだった。

話すことは、もうない。昨日、城戸との時間は終わったのだと、自分に言い聞かせたから。最後に携帯と一緒に写真を撮っている杏

奈や他の女子たちを少し羨ましく思ったが、未来は思い切つて、その風景に背を向けた。できれば、寂しさも、悲しさも、全部、ここに置いて行きたい。楽しかった想い出だけを持って、卒業するのだ。

下駄箱に、二つの手紙が入っていた。一つは、沙耶から。

『先輩のことを、忘れられるように、頑張るから、先輩も頑張つてね』

沙耶らしいその短い手紙に、言いようのない寂しさに襲われた。

嫌いで別れたわけじゃない。そんなことは自分が一番、よく解っていたから。沙耶に会うよりも早くに訪れた偶然の出会いが、既に未来の心を奪っていた。自分の力ではどうすることもできないほどの引力。それは運命だったのかも知れないと、未来は今、感じていた。

帰宅した未来は、部屋の机に向かい、もう一つの手紙の封を開けた。日本語であることにホッとして深呼吸すると、微かにフリージアの香りがする。授業中の黒板にはいつも筆記体の英語しか書かなかった城戸の文字は、やはり綺麗だった。

『未来へ。卒業おめでとう。本当に、いろんなことがあったね。未来の居残りに付き合うのが、僕の楽しみになっていたこと、未来は気付いていたのかな。明日から、その時間もなくなってしまうけど、未来と過ごした時間は、絶対に忘れない。またいつか、会える日が来たら、その時はあの教室で待ち合わせしよう。』

音楽室でも、よく会ったね。最後に僕が弾いた曲、覚えてる？ 発表会のために、毎日のように練習していた頃より、音楽室で弾いたあの時のほうが、ずっと上手だった。初めて誰かのために、未来のために、弾いたから。タイトルを知っていたら、僕の気持ちはもう、解っているのかも知れないね。でも、もし知らないなら、無理に探さないで。いつか偶然知ったとき、僕のことを思い出してくれたら、嬉しいな』

「Liebestrumme No.3」。未来は先日、姉の置いて行った楽譜の中から、記憶の旋律を辿ってその一曲を見つけてし

まったことを、後悔した。

『たくさんの想い出を、ありがとう。唯』

全てが、今、想い出に変わってゆく。未来は今、この瞬間、ようやく高校生活が終わってしまったことを実感した。どれだけ泣いても足りないほどの寂しさも、告げられなかった想いの苦しさも、いつかは去って行くはずだ。未来はここに留まることよりも、少しでも前へ進んで行きたかった。時間は誰にも平等だと言うが、辿り着くまでの道のりは皆、違う。それなら、多少急いでも、先に歩き出したほうがいい。未来は引越しの荷物の中に入れた、Franz Lisztの楽譜を、姉の本棚に戻した。

二年五組

最終章 二年五組

それから四年後の春、未来は、母校の教壇に立つ準備に追われていた。教育実習は、大学の系列校で済ませてしまったが、ちょうど他校に異動になる野口と入れ替わりに、この学校に赴任することが決まったとき、未来はやはり運命を感じた。何より、卒業以来の母校を訪れて、何にも例えようのない複雑な感情が芽生えてくる。懐かしさ、新鮮さ、嬉しさ、不安、緊張、期待。そのどれにも当てはまらず、また、その全てでもあり、未来は胸がいっぱいになった。

つい最近まで学生だった未来は、まだ教える側に立つという実感に乏しい。職員室が未来の部屋に変わり、野口の席だったところが必然的に未来のものになったが、そこに座る自分の姿はやはり、場違いな気がしてならなかった。未来が在籍していた時に教えてもらった教師もまだ何人が残っていて、昼食の時などは当時のことをよく話題にする。特に音楽教師の河合は、コンクールで金賞を取った時のことを嬉しそうに語った。

初めての授業が終わり、興味本位で近づいてくる生徒たちの相手をしたあと、未来は無事最初の一日を終えたことにホッとして職員室に戻った。この扉を開ける時は未だに緊張するが、生徒だった頃は、広くて奥が深いと思っていた部屋が、何だか狭苦しく感じるのが不思議だ。窓から見える景色など、あの頃は全く知らなかったことも、職員室の居心地の悪さのせいだったのだと解り、苦笑してしまう。机に荷物を置くと、未来はおもむろにある場所に向かった。四年という月日は長いのか短いのか。毎日目にして忘れるはずのなかった風景でさえ曖昧になっていることが、その長さを物語っていた。

二年五組。どの教室も同じはずなのに、ここだけは違う。誘われるように窓際に寄り、開けっ放しの窓からグラウンドを眺めながら、未来はようやく、あの時彼が、この場所に佇んでいた訳を知った。住人が何度も入れ替わり、掲示板の内容が変わっても、見える景色は変わらない。夕日も、風も、あの頃のまま、そこにあった。不意に涙で視界が歪み、自分でも予期しなかった状況に戸惑っていると、教室のドアが開く音がした。

「未来、」

その声は、未来がここにいることを承知していたというふうな響きだった。あの日と変わらず、優しく微笑んでいる。一瞬で時間が巻き戻され、最後に話した言葉がまだ耳に残っている気がした。

「泣いてるの？」

未来は泣き虫だね、と笑いながら未来の側に寄り、その綺麗な指でそつと涙を拭いてくれる。懐かしい声と花の香りが未来の中に染み込み、いつか固く鍵をかけた心の奥の扉が、音を立てて開いた。人前で泣くななんて、あり得なかった。この人に出逢うまでは。

「変わってないね。元気だった？」

お互い、敢えて一度も連絡しなかった。そうすることに何の意味があるのかと、俊介は何度も言ったが、未来は過ぎ去った時間を無駄だとは思わない。城戸はあの日、四年後、また戻っておいで、と言った。それまでは会わないという意味だと、未来は受け取った。たとえ間違った解釈だったとしても、それで良かったのだ。……まだ、子供だった。対等に向かい合うには、幼すぎたから。

「唯、」

その名を呼んで、四年間、ずっと堪えていた涙が、幾つも頬を伝うのを感じていた。あの時から、自分はこの教師と向き合えるほど成長できたのだろうか。大学を卒業し、この街に戻る電車の中で、何度も考えたが答えは見つからなかった。しかし、今この場所から見える景色を、言いようもなく懐かしいと感じる。あの頃の自分が、窓際の席で退屈そうにしている姿が、見えた気がした。

「おかえり、未来」

震える声でそう言って、城戸は未来を抱きしめた。あの頃と同じ、包み込むような優しさを持った、その手で。

夕日に染まる白いカーテンが、春の優しい風になびいていた。想い出という景色の見える教室で、重なり合う長い影はいつまでも離れることなく、そこに佇んでいた。

二年五組（後書き）

初めてここに公開したこの小説は、私の中で最も大切で、最も思い入れの深い作品です。大好きだったあの頃の景色は、いつまでも鮮明なものだと思っていたけれど、それが少しずつ、形を変え、消えてしまいかも知れないことに気付いたとき、この小説を書こうと決心しました。

ずっと心の中にあって、でも、それを口にすることはできない。そんな思いが、誰にもあるのだと思います。未来と唯が出逢うことで、私の長年の思いは果たせたような気がします。これで、私の想い出は永遠に消えることはないから。それどころか、読んでくださった皆様の中で、新しい思い出になれるかもしれないから。

最後まで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4653u/>

二年五組のコイビト

2011年7月23日03時28分発行